

茨城県教育財團文化財調査報告第212集

谷ノ沢遺跡
手接遺跡
花房遺跡
大日遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成16年3月

国土交通省 常総国道事務所
財團法人 茨城県教育財團

谷ノ沢遺跡
手接遺跡
花房遺跡
大日遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成16年3月

国土交通省 常総国道事務所
財団法人 茨城県教育財団



手接・花房・大日遺跡遠影（左から）



大日遺跡第1号火葬墓遺物出土状況

序

首都圏中央連絡自動車道の建設は、首都圏の中核都市を相互に結ぶことにより地域の核となる都市群を形成し、さらにこれらの地域における交通の円滑化を図り、地域の自立性を高める拠点となる都市整備を目的として計画されたものです。阿見町においても2か所のインターチェンジと町域を通過するルートが決定しており、多くの整備効果が期待されています。この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の4遺跡が所在しているため、財团法人茨城県教育財團は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成14年6月から同年10月まで発掘調査を実施しました。

本書は、谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局常総国道事務所から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財團法人 茨城県教育財團
理事長 斎藤 佳郎

例　　言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財團が平成14年度に発掘調査を実施した、谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡及び大日遺跡の発掘調査報告書である。

なお、4遺跡の所在地は以下のとおりである。

谷ノ沢遺跡	茨城県稟敷郡阿見町人字福田字谷ノ沢208番地の25ほか
手接遺跡	茨城県稟敷郡阿見町人字吉原字手接3247番地の1ほか
花房遺跡	茨城県稟敷郡阿見町大字吉原字馬立1633番地ほか
大日遺跡	茨城県稟敷郡阿見町大字吉原字馬立1707番地の1ほか

- 2 4遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調査

谷ノ沢遺跡	平成14年9月9日～平成14年10月30日
手接遺跡	平成14年9月9日～平成14年10月30日
花房遺跡	平成14年6月11日～平成14年8月30日
大日遺跡	平成14年7月22日～平成14年10月30日

整理

谷ノ沢遺跡	平成15年4月1日～平成15年4月30日
手接遺跡	平成16年3月1日～平成16年3月31日
花房遺跡	平成15年5月1日～平成15年6月30日
大日遺跡	平成15年7月1日～平成15年8月30日

- 3 4遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久のもとに行われた。担当は以下のとおりである。

谷ノ沢遺跡	調査第一課首席調査員兼班長川津法伸、主任調査員長谷川聰、調査員小林健太郎
手接遺跡	調査第一課首席調査員兼班長川津法伸、主任調査員飯島一生、同後藤孝行
花房遺跡	調査第一課首席調査員兼班長川津法伸、主任調査員綿引英樹
大日遺跡	調査第一課首席調査員兼班長川津法伸、主任調査員綿引英樹、同石川義信

がそれぞれ担当した。

- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅の指揮のもと、主任調査員綿引英樹、同後藤孝行が担当した。執筆は、第1・2・3・5・6章を綿引が、第4章を後藤がそれぞれ担当した。

- 5 本書の作成にあたり、火葬墓については、桐朋学園短期大学非常勤講師吉澤悟氏にご指導いただいた。

凡 例

1 谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の地区設定は、それぞれ日本平面直角座標第Ⅷ系座標に準拠した。

谷ノ沢遺跡はX軸 = -720m, Y = +23,560mの交点、手接遺跡はX軸 = -1,040m, Y = +34,680mの交点、花房遺跡はX軸 = -1,400m, Y = +35,280mの交点、大日遺跡はX軸 = -1,520m, Y = +35,480mの交点をそれぞれ基準点（A 1a1）とした。4遺跡それぞれの基準点を基に、遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の覧には、世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。

3 遺構・遺物・土層に使用した記号は、次のとおりである。

【遺構】	住居跡-SI	土坑・火葬墓-SK	溝跡-SD	柱穴-P	不明遺構-SX
【遺物】	拓本土器-TP	土製品-DP	石器・石製品-Q	金属製品-M	
【土層】	擾乱-K				

4 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

■	焼土・赤彩・施釉	■	炉・棚粘土
■	竈部・粘土・黒色処理・漆塗布・木炭	■	油煙・煤
●	土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品	-----	硬化面

5 土層観察と遺物における色調の判定には、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は100分の1及び500分の1、遺構は原則的に60分の1に縮尺して掲載した。
- (2) 遺物測図は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合がある。
- 7 「主軸」は、竈を持つ竈穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N-10°-E, N-10°-W）
- 8 遺物観察表における土器の計測値の単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

抄 録

ふりがな	やのさわいせき	てつぎいせき	はなぶさいせき	だいにちいせき				
書名	谷ノ沢遺跡 手接遺跡 花房遺跡 大日遺跡							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	VI							
シリーズ名	茨城県教育財团文化財調査報告							
シリーズ番号	第212集							
著者名	編引 英樹 後藤 孝行							
編集機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2	TEL 029-225-6587						
発行機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2	TEL 029-225-6587						
発行日	2004年(平成16年)3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	経度	標高	調査期間	調査面積	調査原因
所取道路	所在地							
谷ノ沢遺跡	茨城県稟敷郡河見町 大字桜田字谷ノ沢	08443	35度	140度	23	20030909	9.399m ²	一般国道468号 首都圏中央連絡自動車道事業(茨城県)に 伴う季前調査
	208番地の25ほか	-	59分	12分	-	-		
		213	32秒	23秒	24m	20031030		
			35度	140度				
			59分	12分				
			43秒	11秒				
手接遺跡	茨城県稟敷郡河見町 大字吉原字手接	08443	35度	140度	20m	20030909	10.448m ²	
	3247番地の1ほか	-	59分	13分	-	-		
		151	21秒	09秒		20031030		
			35度	140度				
			59分	12分				
			32秒	37秒				
花房遺跡	茨城県稟敷郡河見町 大字吉原字馬立	08443	35度	140度	23	20030611	6.109m ²	
	1633番地ほか	-	59分	13分	-	-		
		150	09秒	31秒	25m	20030830		
			35度	140度				
			59分	13分				
			20秒	19秒				
大日遺跡	茨城県稟敷郡河見町 大字吉原字馬立	08443	35度	140度	15	20030722	4.097m ²	
	1707番地の1ほか	-	59分	13分	-	-		
		082	06秒	37秒	26m	20031030		
			35度	140度				
			59分	13分				
			17秒	25秒				

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷ノ沢遺跡	石器	旧石器	石器集中地點 2か所	石器(尖頭器), 石核, 石錐, 制片, 砕片	山石器調査区から出土した石核と制片が接合した。碎片のまとまりが2か所確認された。
	製作跡				
	祭祀	縄文	縫し穴 9基	縄文土器片	
手接遺跡	その他	不明	土坑 8基	土師器片, 制片, 砕片	
	集落跡	古墳	竪穴住居跡 4軒	上師器(环・鉢・壺・小形壺・瓶), 土製品(紡錘車・小玉・管玉), 石製品(紡錘車)	古墳時代後期の住居跡が4軒確認され, そのうちの1軒は炉と竈の両方をもつ。土師器の更を骨蔵器とした火葬墓1基が確認された。
	墓地	奈良・平安	火葬墓 1基	上師器(壺)須恵器(环・鉢)	
花房遺跡	祭祀	縄文		縄文土器片	
	その他	不明	土坑 3基		
	集落跡	弥生	竪穴住居跡 2軒	弦生土器(広口壺), 土製品(紡錘車) 石器(撫拭具)	桂川支流の左岸に位置している。弥生時代から奈良・平安時代までの複合遺跡である。竈の左右に粘土を貼った棚状施設を持つ住居跡が確認された。また, 須恵器を骨蔵器とした火葬墓1基が確認された。
大日遺跡	祭祀	古墳	竪穴住居跡 3軒	上師器(高壺・器台・壺・壺・小形壺), 土製品(紡錘車・支脚), 石製品(勾玉・管玉), 石器(砾石) 玉器洞片	
		奈良・平安	竪穴住居跡 14軒 土坑 2基	上師器(环・高台付环・高台付壺・壺), 須恵器(环・高台付环・壺・高台付壺・鉢・壺・瓶), 墓石上器, 灰釉陶器(短頭壺・高台付瓶・長頭壺・水瓶), 土製品(紡錘車), 石器(砾石), 金屬製品(刀子・針)	
		墓地	奈良・平安	火葬墓 1基	上師器(环)須恵器(鉢・壺)
大日遺跡	その他	縄文		縄文土器片, 石器(打製石斧)	
	集落跡	不明	土坑 34基	土師器片, 須恵器(环・壺), 灰釉陶器	
			溝跡 1条		
	祭祀	不明	遺構 1基		
		奈良・平安	竪穴住居跡 16軒 土坑 1基	上師器(环・高台付环・壺), 須恵器(环・高台付环・壺・高盤・鉢・瓶) 墓石上器, 灰釉陶器(長頭瓶), 瓦塔片, 土製品(支脚), 金屬製品(刀子・帶金具)	桂川支流の左岸に位置している。住居跡は主に段丘下段から検出され, 竈の左右や側面に粘土を貼った棚状施設を持つ住居跡が確認された。段丘の上段からは, 灰釉陶器を竹籠器とした火葬墓2基が確認された。
		墓地	奈良・平安	火葬墓 2基	上師器(高台付壺)須恵器(鉢) 灰釉陶器(短頭壺・長頭壺)
大日遺跡	その他	縄文		縄文土器片, 打製石斧	
	祭祀	不明	方形竪穴遺構 2基	土師器片	
			溝跡 3条		
			土坑 10基		

目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 谷ノ沢遺跡	
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 旧石器時代の遺物	10
石器集中地点	10
2 縄文時代の遺構と遺物	16
陥し穴	16
3 その他の遺構	23
土坑	23
第4節 まとめ	25
第4章 手接遺跡	
第1節 遺跡の概要	29
第2節 基本層序	29
第3節 遺構と遺物	30
1 古墳時代の遺構と遺物	30
堅穴住居跡	30
2 平安時代の遺構と遺物	40
火葬墓	40
3 その他の遺構	42
土坑	42
4 遺構外遺物	43
第4節 まとめ	43

第5章 花房遺跡	
第1節 遺跡の概要	45
第2節 基本層序	45
第3節 遺構と遺物	47
1 弥生時代の遺構と遺物	47
竪穴住居跡	47
2 古墳時代の遺構と遺物	51
竪穴住居跡	51
3 奈良・平安時代の遺構と遺物	58
(1) 竪穴住居跡	58
(2) 火葬墓	93
(3) 土坑	95
4 その他の遺構と遺物	96
(1) 溝跡	96
(2) 上坑	96
(3) 不明遺構	98
(4) 遺構外遺物	99
第4節まとめ	100
第6章 大日遺跡	
第1節 遺跡の概要	103
第2節 基本層序	103
第3節 遺構と遺物	104
1 縄文時代の遺構	104
陥し穴	104
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	105
(1) 竪穴住居跡	105
(2) 火葬墓	144
(3) 土坑	148
3 その他の遺構	149
(1) 方形竪穴遺構	149
(2) 溝跡	150
(3) 土坑	151
(4) 遺構外遺物	152
第4節まとめ	153
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省は、首都圏全体の発展と交通の円滑化を図るために、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設を進めている。

平成12年6月5日、建設省（現国土交通省）関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年8月12～13日に谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の現地踏査を、平成13年11月26～28日に谷ノ沢遺跡、同年11月29日に手接遺跡、同年12月3～4日に花房遺跡、同年12月5～6日に大日遺跡の試掘調査をそれぞれ実施し、遺跡の所在を確認した。平成14年1月17日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、事業地内に谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の4遺跡が所在する旨回答した。

平成14年2月25日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、同年2月26日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

同年2月27日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。同年2月28日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、谷ノ沢遺跡（9,399m²）は平成14年9月9日から同年10月30日まで、手接遺跡（10,448m²）は同年9月9日から同年10月30日まで、花房遺跡（6,109m²）は同年6月11日から同年8月30日まで、大日遺跡（4,097m²）は同年7月22日から同年10月30日まで発掘調査をそれぞれ実施することとなった。

第2節 調査経過

谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の4遺跡の調査は、平成14年6月11日から同年10月30日までそれぞれ実施した。

以下、調査の経過についての概要を表で記載する。

谷ノ沢遺跡	6	7	8	9	10
準備・撤収				■	
試掘				■■■■	
表土除去				■■■■	
遺構調査				■■■■	
洗浄・注記				■■■■	

手接遺跡	6	7	8	9	10
準備・撤収				■	
試掘				■■	
表土除去				■■■■	
遺構調査				■■■■	
洗浄・注記				■■■■	

花房遺跡	6	7	8	9	10
準備・撤収	■			■	
試掘					
表土除去	■				
遺構調査			■■■■		
洗浄・注記			■■■■		

大日遺跡	6	7	8	9	10
準備・撤収		■■			
試掘		■■			
表土除去			■■■■		
遺構調査			■■■■		
洗浄・注記			■■■■		

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の4遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町の福田地区から吉原地区にかけて位置している。谷ノ沢遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字福田字谷ノ沢208番地の25ほか、手接遺跡は、同町大字吉原字手接3247番地の1ほか、花房遺跡は、同町大字吉原字馬立1633番地ほか、大日遺跡は、同町大字吉原字馬立1707番地の1ほかにそれぞれ所在している。

これらの遺跡が所在する阿見町は、筑波・稻敷台地の北東部に位置している。この台地は、新生代第四期洪積世に形成された層を基盤とし、その上に龍ヶ崎砂礫層、さらに常緑粘土層、関東ローム層が連続して堆積している。台地の標高は24~30mで、台地面は中・小の河川に開析され、複雑な樹枝状の支谷が刻まれている。

谷ノ沢遺跡は、町域南西部、乙戸川左岸の標高23~24mほどの台地縁部に位置しており、北西には乙戸川の低地から伸びる支谷があり込んでいる。手接遺跡は、桂川支流の漫食によって刻まれた支谷に面して立地し、標高は約25mほどである。また、花房遺跡は、桂川及びその支流が形成した支谷に延びた標高24m前後の舌状台地上に所在している。さらに、大日遺跡は、標高15~26m前後の段丘部と台地上に位置している。それぞれの遺跡の周辺の現況は山林及び畠地である。

第2節 歴史的環境

谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の4遺跡が所在する阿見町の主な遺跡について、乙戸川流域とその支流である桂川流域とに分け、それぞれに時代ごとに記述する。

(1) 乙戸川流域

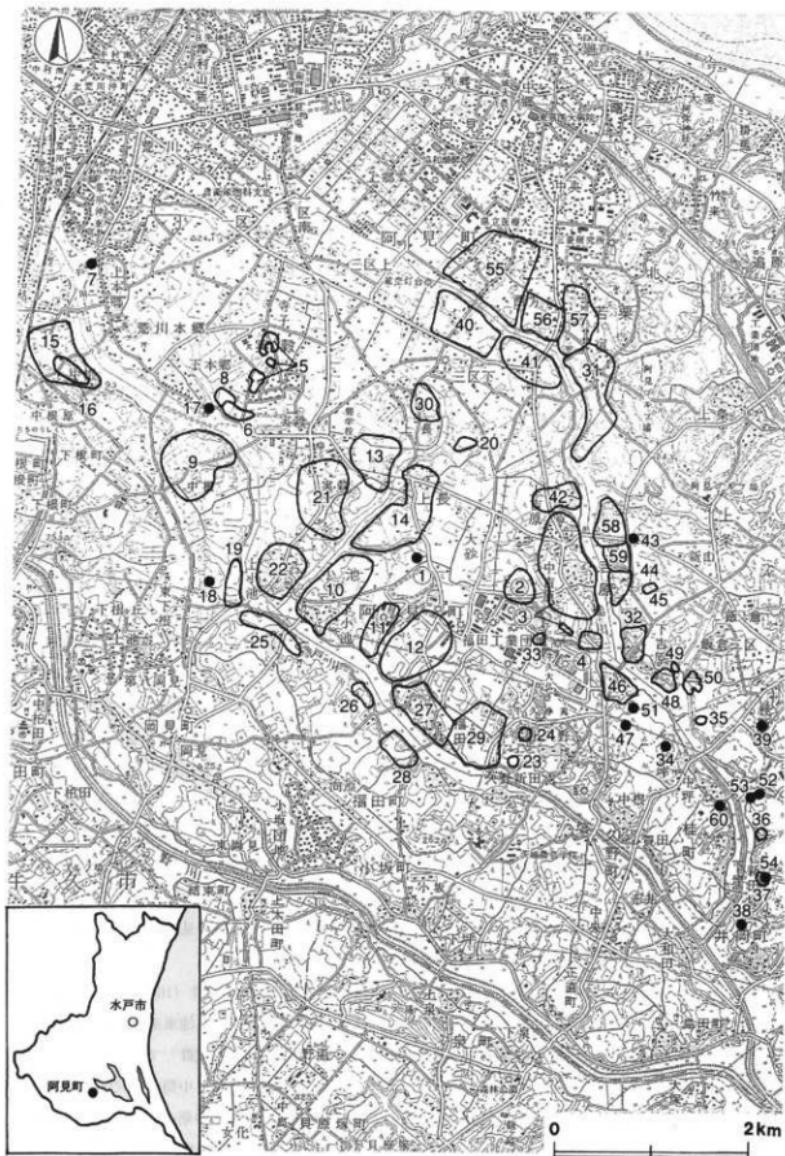
乙戸川は、上漣市の乙戸沼を水源とし幾筋かの支流を合わせつつ小野川に合流している。

この流域での旧石器時代の遺跡は、細石刃が出土している実穀古墳群¹⁾（6）、ナイフ形石器などが出土している実穀寺子遺跡²⁾が周知されている。

縄文時代の遺跡は、於山遺跡（7）、実穀寺子遺跡（5）、実穀寺子西遺跡（8）、延戸遺跡（9）、下小池遺跡（10）、下小池東遺跡（11）、福田遺跡（12）などがあり、平成5年に発掘調査された於山遺跡³⁾からは、早期~後期にかけての上器片や磨製石斧が出土しており、陥れ穴も確認されている。

弥生時代の遺跡は、町内での確認数は少なく、乙戸川流域では、土器片の散布が見られる道記遺跡（14）だけであり、そのほかには下原遺跡⁴⁾（31）と桜立遺跡⁵⁾がある。

古墳時代の遺跡は乙戸川の両岸に数多く確認されている。於山遺跡、内記古墳群（16）、実穀寺子遺跡、実穀寺子西遺跡、実穀古墳群、反子遺跡（18）、大高田遺跡（19）、下小池遺跡、下小池東遺跡などであり、乙戸川と支流の合流地点の舌状台地には前畠遺跡（22）などが知られている。内記古墳群⁶⁾では、幅2mの周溝をもつ古墳や箱式石棺を有する古墳が確認されている。また、実穀寺子遺跡⁷⁾では、中期の堅穴住居跡48軒が確認され、土師器や石製品が多く出土している。さらに、実穀寺子西遺跡⁸⁾では、中期の堅穴住居跡が6軒確認され、土師器や土製品、石製品、ガラス玉などが出土している。実穀古墳群⁹⁾では、中期の堅穴住居跡7軒、後期の円墳が4基確認され、土師器や須恵器、ガラス小玉、鉄製品（直刀、鐵鎌）などが出土している。



第1図 周辺遺跡分布図

表1 谷ノ沢遺跡、手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡周辺遺跡一覧表

番 号	遺跡名	時代					番 号	遺跡名	時代				
		旧 石 器	绳 文	古 墳	奈 世	中 世			旧 石 器	绳 文	古 墳	奈 世	中 世
①	谷ノ沢遺跡	○	○				31	下原遺跡	○	○	○		
②	手接遺跡	○		○	○		32	高根遺跡	○		○	○	
③	花房遺跡	○	○	○	○		33	吉原遺跡	○		○	○	
④	大日遺跡	○		○			34	長久保道添遺跡			○	○	
5	実穀寺子遺跡	○	○	○		○	35	ナギ山遺跡	○		○		
6	実穀古墳群	○		○		○	36	二本松遺跡	○		○		
7	於山遺跡(於山古墳群)	○		○			37	鍍金遺跡	○				
8	実穀寺子西遺跡	○	○		○		38	伊勢遺跡	○		○		
9	延戸遺跡	○		○	○		39	原山遺跡			○		
10	下小池遺跡	○	○	○			40	南根遺跡			○		
11	下小池東遺跡	○	○				41	柏根前遺跡			○		
12	福田遺跡	○		○	○		42	根崎遺跡			○		
13	向辺田遺跡	○		○	○		43	北原古墳群			○		
14	道記遺跡	○	○	○			44	山中遺跡			○		
15	内記遺跡			○			45	赤太郎遺跡			○		
16	内記古墳群			○			46	腰巻遺跡			○		
17	だめき古墳			○			47	牛頭座古墳群			○		
18	反子遺跡			○			48	猿崎遺跡			○		
19	大高田遺跡			○			49	猿崎A遺跡			○		
20	向田遺跡			○			50	薬師入遺跡			○		
21	実穀神田遺跡			○			51	中道通り遺跡			○		
22	前畠遺跡			○	○	○	52	御山台遺跡			○		
23	延命寺山遺跡	○	○				53	御山台古墳群			○		
24	源台遺跡	○	○	○	○		54	鍍金古墳			○		
25	農場遺跡			○			55	三ヶ尻遺跡			○		
26	砂崎遺跡			○			56	中台後遺跡			○		
27	十郎山遺跡			○			57	地藏窪遺跡			○		
28	向遺跡			○			58	堂山遺跡			○		
29	宮台遺跡			○			59	神田遺跡			○		
30	房地遺跡			○			60	屋敷前遺跡			○		

奈良・平安時代の遺跡は少ないが、上流から見ると、延戸遺跡、実穀寺子遺跡、農場遺跡（25）、下小池遺跡、福田遺跡、十郎山遺跡（27）、宮台遺跡（29）などがある。下小池遺跡では、奈良・平安時代の堅穴住居跡26軒が確認され、土師器の壺や甕、須恵器の壺・盤・蓋などが出土している。また、遺物包含層からは大量の須恵器の壺や蓋などが出土しており、付近に大規模な集落の存在を想定できる資料となっている。

中世では、平成14年に発掘調査された前畠遺跡があり、城館跡は、上小池城跡、下小池城跡、福田城跡などが乙戸川左岸の南を望む台地上に位置しており、いずれの城も戦国期には上岐氏の支配下にあったと伝えられている。

（2）桂川流域

桂川は、阿見一区を水源として町内を南流し、さらに南流して牛久市井ノ岡で乙戸川に合流している。この流域にも乙戸川同様に各時代の遺跡が分布しているが、調査された遺跡はわずかである。

桂川流域には、現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されていない。

縄文時代の遺跡は、下原遺跡（31）、花房遺跡、大日遺跡、高根遺跡（32）などがあり、桂川の支流にも手接遺跡、吉原遺跡（33）が位置している。下流域の牛久市内にも多くの遺跡が確認されており、上流の阿見町内よりも下流に位置する牛久市内に縄文の遺跡は多く分布している。

弥生時代の遺跡は、乙戸川流域と同様に確認数が極めて少なく、町内では下原遺跡と花房遺跡が知られている。

古墳時代の遺跡は、町内には手接遺跡、花房遺跡、高根遺跡、猿崎遺跡（48）、猿崎A遺跡（49）、葉郎入遺跡（50）などがあり、下流の牛久市内でも數遺跡が確認されている。

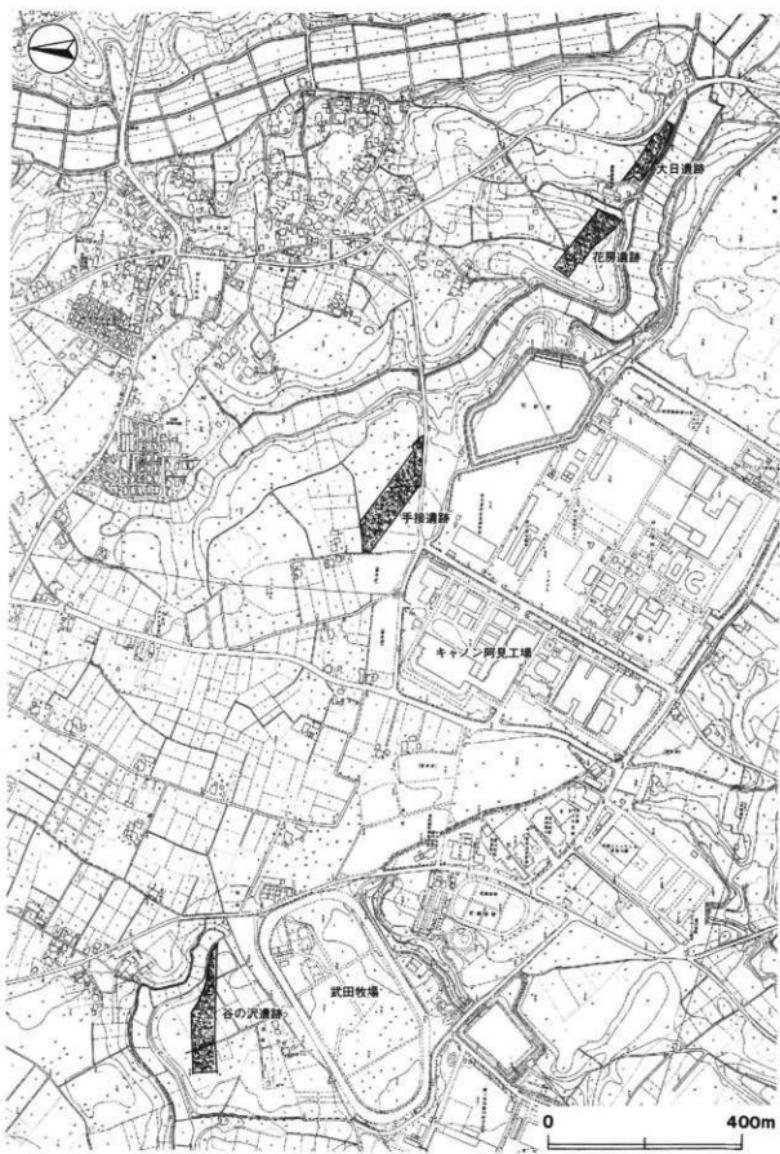
奈良・平安時代の遺跡では、三ヶ尻遺跡（55）、中台後遺跡（56）、地蔵堂遺跡（57）、下原遺跡、堂山遺跡（58）、神田遺跡（59）、花房遺跡、大日遺跡、高根遺跡などが確認されているが、桂川と支流の合流後の牛久市内では、屋敷前遺跡（60）が確認されているだけで、上、中流域に遺跡が多く認められている。

また、中・近世の遺跡は、旧石器時代と同様に今のところ確認はされていない。

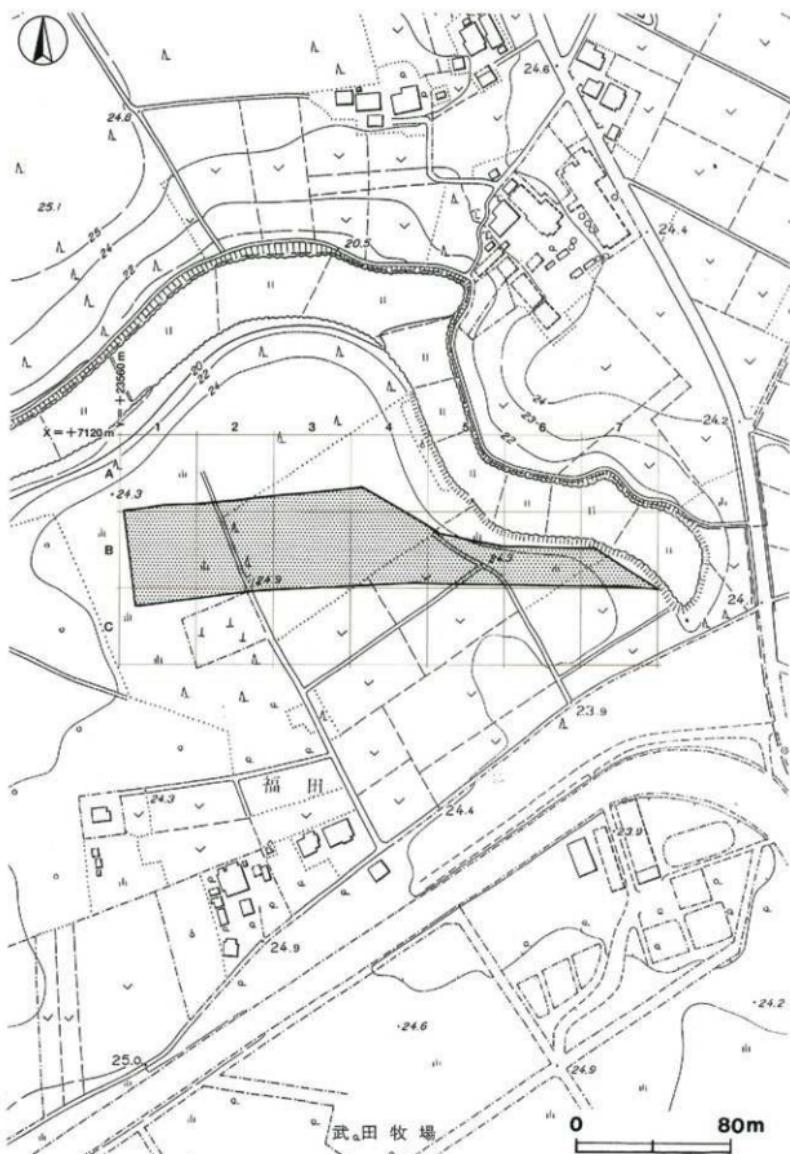
※文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図中の該当番号と同じである。

註

- 1) 浅野和久「荒川本郷地区特定土地面積整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」『実穀古墳群・実穀寺子遺跡』「茨城県教育財团文化財調査報告」第144集 1999年3月
- 2) 註1) に同じ
- 3) 宮崎修士、柴田博行「荒川本郷地区特定土地面積整理事業地内埋蔵文化財調査報告書・火葬寺子遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告』第151集 1993年3月
- 4) 矢ノ倉正男「主要地方道上浦江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書・於山道路」『茨城県教育財团文化財調査報告』第96集 1993年3月
- 5) 註4) に同じ
- 6) 註4) に同じ
- 7) 註1) に同じ
- 8) 宮崎修士、柴田博行「(仮称) 荒川本郷地区面積整理事業地内埋蔵文化財調査報告書・実穀寺子西遺跡」『茨城県教育財团文化財調査報告』第156集 2000年3月
- 9) 註1) に同じ



第2図 遺跡位置図



第3図 谷ノ沢遺跡調査区設定図

第3章 谷ノ沢遺跡

第1節 遺跡の概要

谷ノ沢遺跡は、茨城県稻敷郡阿見町大字福田字谷之沢208番地の25ほかに所在し、牛久市と接する阿見町南西部の乙戸川左岸、標高23~24mほどの台地上に位置している。調査面積は9,399m²で、調査前の現況は畑地である。

谷ノ沢遺跡は、旧石器時代から縄文時代までの遺跡で、今回の調査によって検出された遺構は、石器集中地点が2か所、縄文時代の陥り穴が9基、時期が特定できない土坑8基である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で1箱分が出土した。主な出土遺物は、尖頭器、石核、剥片、鉈片、石器、縄文土器などである。

第2節 基本層序

調査区の西側、B2a1区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は23.5mで、地表面から約2.7mほど掘り下げ、第4図のような堆積状況を確認したが、最上層は耕作により削平されていた。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層 ロームブロックと炭化物を少量含む暗褐色の腐植土層で、層厚は15cmほどで、粘性、しまりともにやや弱い。

第2層 第1層よりもやや明るい褐色の土層で、ロームブロックを少量含むソフトローム層であり、層厚は一定していない。粘性、しまりともに普通である。

第3層 ロームブロックと黒色粒子を微量含む褐色のソフトローム層である。この土層も2層と同じく、堆積状況が一定でないため確認できる部分とできない部分があるが、厚さは概ね15cmで、粘性、しまりはともにやや弱い。

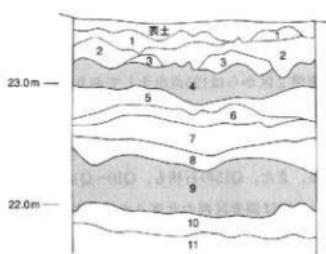
第4層 黒色粒子を中量、赤色粒子を少量含む厚さ12~24.0m—
34cmのやや暗い褐色のハードローム層で、粘性、しまりはともに普通である。第1黒色帯に相当すると考えられる。

第5層 褐色のハードローム層である。厚さは5~30cmで、粘性、しまりはともにやや強い。

第6層 第5層よりもやや明るい褐色のハードローム層で、厚さは10~18cmである。粘性、しまりはともに強く、第5層とともにAT層に相当すると考えられる。

第7層 厚さ10~24cmの褐色のハードローム層で、粘性、しまりはともに強い。

第8層 褐色のハードローム層で、厚さは8~30cmであり、粘性、しまりはともに普通である。



第4図 基本土層図

第9層 第7層より若干暗い褐色のハードローム層で、厚さは30~48cmである。粘性はやや弱いがしまりは普通であり、第II黒色帯に相当すると考えられる。

第10層 ローム粒子を微量含んだ明褐色の軽石を含むハードローム層で、粘土ブロックを中量、黒色粒子、赤色粒子を少量含んでいる。この上層は、同時に粘土粒子も極めて少量含まれているので常総粘土層の漸移層と考えられる。

第11層 にぶい黄褐色の粘土層で、層厚は未掘のため確認できなかったが、常総粘土層と考えられる。

この遺跡では、旧石器時代の遺物は第2層以下では検出されなかつた。また、縄文時代の陥し穴が多く検出され、これらは第11層まで掘り込んで構築されている。

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の遺物

当遺跡では、文化課による試掘の段階で尖頭器や石核、剥片などが確認されていた。そこで、石器集中地点（調査第1・2区）のグリッド調査を行ったところ、旧石器時代から縄文時代にかけての石器集中地点が確認された。以下、接合資料と主な石器について記載する。

石器集中地点

調査第1・2区（第5～9図）

位置 調査第1区は調査区中央部の北側に位置し、A 4 h1区、A 4 i1～A 4 i3区・A 4 j2区、A 4 j3～A 4 j4区（東西16m、南北12mの不整形）である。

調査第2区は調査区中央部の北側で、調査第1区よりやや西側に位置し、東西はA 3 i5区からA 3 i9区まで、南北はA 3 i5～B 3 a5区（東西約20m、南北約12m）である。

出土状況 調査第1区の遺物は、調査区内外にまばらで出土しており、標高は24.1～24.2mの範囲で、遺物が出土した層は基本層序の第1層に相当すると考えられる。

調査第2区の遺物は、調査区全体から出土しているが、特にA 3 j5区とB 3 a5区に密である。標高は23.9～24.3mの範囲であり、遺物が出土した層は基本層序の第1層と第2層に相当すると考えられる。

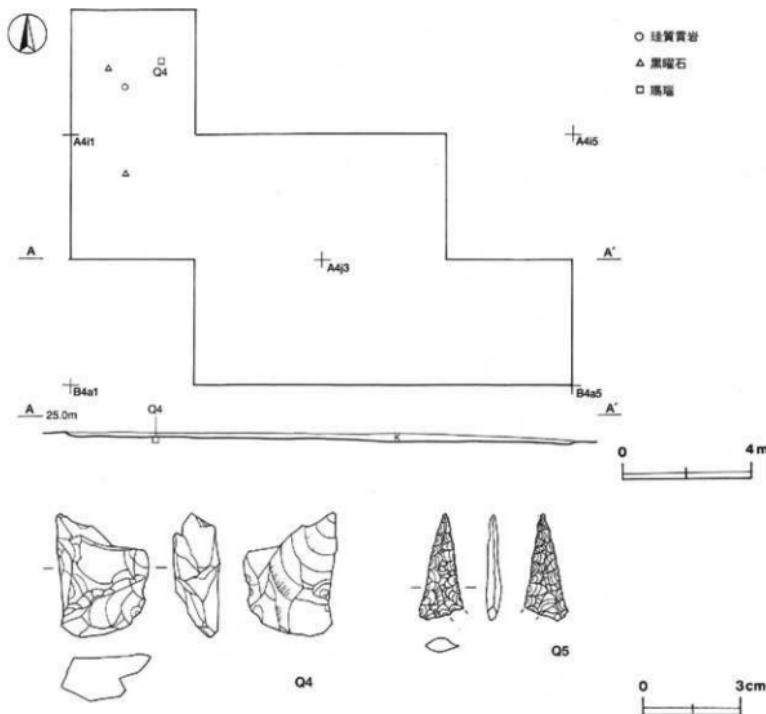
遺物 内調査区の遺物は、尖頭器1点、石鍬3点、石刃2点、網石刃1点、石核9点、剥片34点、碎片82点、蝶1点の他に、縄文土器片17点と土師器片18点が出土している。

調査第1区からの石器類の出土数は少なく8点である。Q 4は調査区の北西、Q 5は最上層の搅乱層からそれぞれ出土している。

調査第2区からは125点出土しており、石材と機種については表2の通りである。石材としては黒曜石が一番多く全体の61.6%を占めており、次いで珪質頁岩が29.3%である。他に流紋岩・瑪瑙・安山岩・硬質頁岩などがある。Q 7・8は調査区西側から出土し、Q 8は第21号土坑から出土したQ 9と接合関係（接合資料1）にある。また、Q 15の石核も、Q 10～Q 14と接合関係（接合資料2）にある。Q 10・11・13・14は調査区西の南寄り、Q 12は調査区西の北寄りからそれぞれ出土しており、Q 6・15は試掘の際の採集資料である。Q 15は両設打面石核で、上部からの打撃によりQ 11が剥離され、Q 10・12の順に分割されたと考えられる。また、下部からの打撃によってQ 13・14も分割されたと考えられる。

所見 遺物は、概ね第1層からの出土と第2層からの出土とに分けることができる。第1層はローム漸移層で

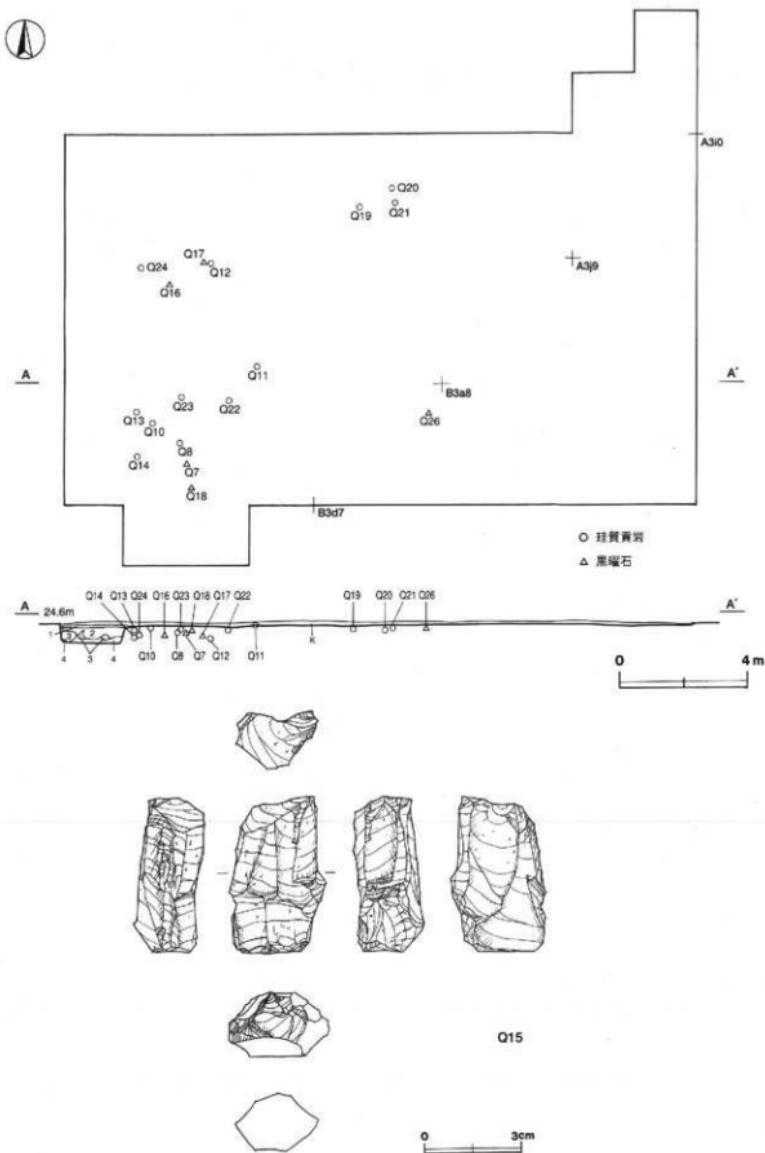
あり、第2層はロームブロックを含むソフトローム層に相当する。実測することはできなかったが、土器片は縄文時代前期の特徴をもっていることやQ25・26が出土していることなどから、第1層から出土した遺物は縄文時代前期頃に比定できる。また、第2層から出土した接合資料1・2及び細石刃・石刃、黒曜石の剥片や多量の碎片などから、第2層は旧石器時代と考えられる。



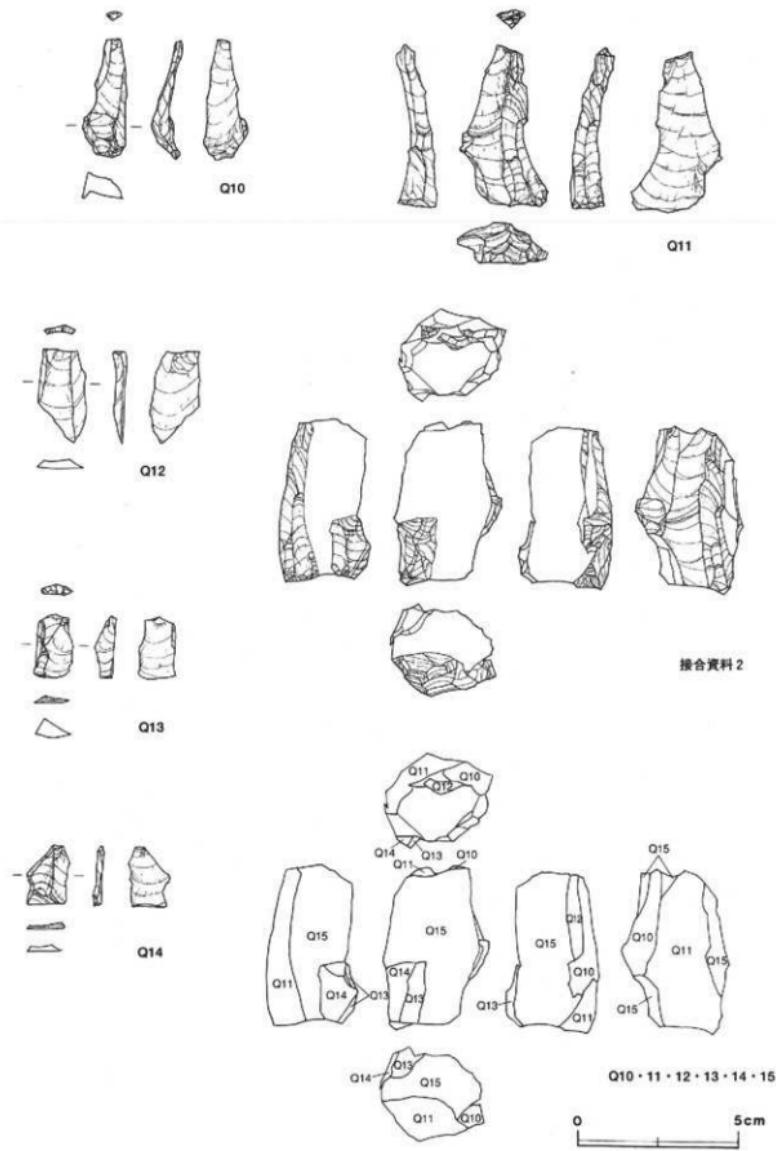
第5図 石器集中地点（調査第1区）・出土遺物実測図

石器集中地点（調査第1区）出土遺物観察表（第5図）

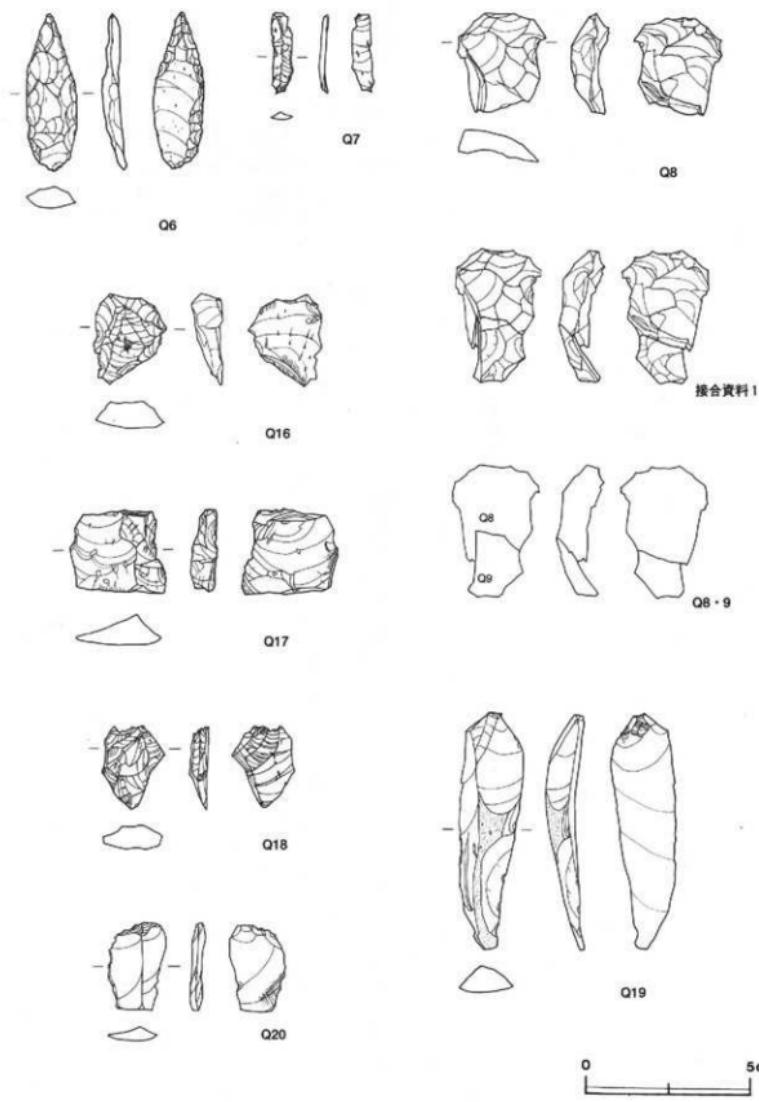
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考
Q4	剥片	38	29	1.5	122	瑪瑙	複長剥片、剥離後折り取り、左側部に自然面	
Q5	石器	33	14	0.4	(1.3)	瑪瑙	四基無茎器、押圧剥離、基部欠損	P1.6



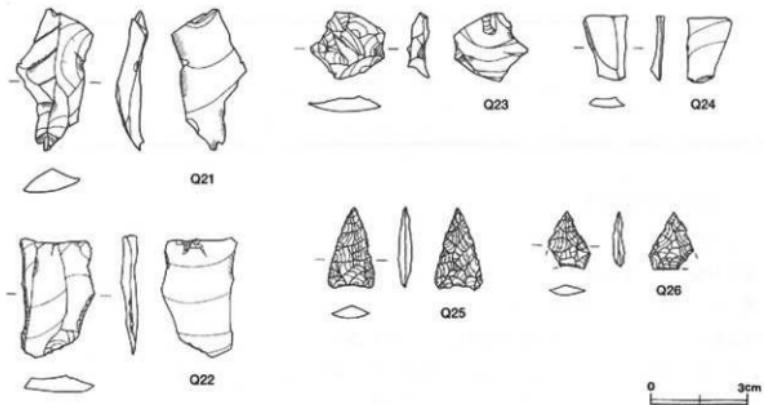
第6図 石器集中地点（調査第2区）・出土遺物実測図



第7図 石器集中地点（調査第2区）出土遺物実測図(1)



第8図 石器集中地点（調査第2区）出土遺物実測図(2)



第9図 石器集中地点（調査第2区）出土遺物実測図(3)

表2 調査第2区出土石器表

石材	器種	尖頭器	石刃	細石刃	石核	縦長剥片	横長剥片	剥片	碎片	禮	石鏃	合計
硬質頁岩								1				1
瑪瑙					1							1
安山岩	1								2			3
龍紋岩					2				2	1		5
珪質頁岩		2			1	11	1	6	18			39
黒曜石			1	4	2	1	9	57		2		76
合計		1	2	1	8	13	2	16	79	1	2	125

石器集中地点（調査第2区）出土遺物観察表（第7・9図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考
Q 6	尖頭器	47	15	0.7	42	黑色安山岩	木彫形、押圧面難、無茎	PL6
Q 7	細石刃	24	0.8	0.3	0.3	黒曜石	單剥離面打面、彎曲	
Q 8	剥片	3.0	2.7	1.2	6.6	珪質頁岩	縦長剥片、複剥離面打面。Q 9と接合関係。被熱を受け変色	接合資料1 PL6
Q 10	剥片	3.7	1.4	0.9	22	珪質頁岩	縦長剥片、彎曲、複剥離面打面。Q 15石核から分離された	接合資料2 PL1
Q 11	剥片	5.0	2.8	1.2	9.2	珪質頁岩	縦長剥片、彎曲、複剥離面打面、表面に剥離痕。Q 15石核から分離された	接合資料2 PL6
Q 12	剥片	2.9	1.5	0.4	1.4	珪質頁岩	縦長剥片、單剥離面打面。Q 15石核から分離された	接合資料2 PL6
Q 13	剥片	1.9	1.2	0.7	1.2	珪質頁岩	縦長剥片、複剥離面打面。Q 15石核から分離されさらにQ 14が分離された	接合資料2 PL6
Q 14	剥片	1.9	1.3	0.4	0.6	珪質頁岩	縦長剥片、複剥離面打面。Q 13から分離された	接合資料2 PL6
Q 15	石核	4.8	3.0	2.2	35.2	珪質頁岩	両設打面石核。Q 10～Q 13が剥離作業によって分離された	接合資料2 PL6
Q 16	剥片	2.7	2.2	1.0	4.4	黒曜石	縦長剥片、單剥離面打面、両面に微縫を含む	PL6
Q 17	剥片	2.5	2.8	0.8	5.0	黒曜石	横長剥片、複剥離面打面、両面に微縫を含む	PL6
Q 18	剥片	2.5	1.9	0.6	2.9	黒曜石	縦長剥片、点状打面、両面に微縫を含む	PL6
Q 19	石刃	7.1	1.9	1.3	9.1	珪質頁岩	縦長剥片、点状打面、彎曲。被熱により変色、ナイフとして使用用カ	PL6
Q 20	剥片	2.4	1.7	0.5	1.7	珪質頁岩	縦長剥片、点状打面、被熱により変色。ナイフとして使用後折り取って再使用カ	PL6
Q 21	石刃	4.4	2.4	0.9	3.8	珪質頁岩	縦長剥片、左側面に自然面、彎曲。上部に折り取り痕	PL6
Q 22	剥片	3.7	2.4	0.5	3.9	珪質頁岩	縦長剥片、右側面に微縫な調整痕。上部に折り取り痕。折り取って再使用カ	PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考
Q23	調片	21	2.8	0.7	2.6	珪質白岩	横長調片、單面削面打面、両面に奥縁を含む	
Q24	調片	20	1.4	0.4	0.7	珪質白岩	横長調片、單面削面打面	
Q25	石版	25	1.5	0.4	1.2	黒曜石	円錐形基盤、押付剥離	
Q26	石版	18	(1.0)	0.4	(0.5)	黒曜石	円錐形基盤、押付剥離、基部欠損	?

1 繩文時代の遺構

陥し穴

第1号陥し穴（第10図）

位置 調査区北西部のB2b1区に位置している。

規模と形状 長径3.26m、短径2.45mの梢円形で、深さは2.20mほどである。長径方向はN~88°~Eであり、長軸の壁は直立ぎみに立ち上がっている。また、短径方向の断面形はU字状で、底面は平坦である。

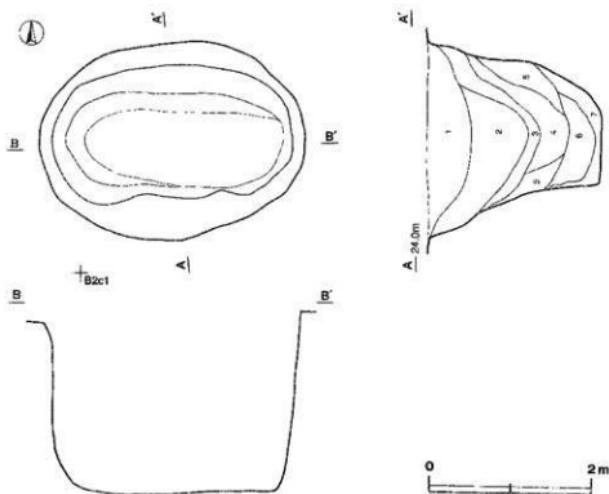
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子小骨、地上種子、炭化物微量	5	褐色	ローム粒子多量
2	黒褐色	ロームブロック、炭化ブロック、炭化物微量	6	黒褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、燒土粒子、炭化粒子微量	7	褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
4	褐色	ロームブロック中量			

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第10図 第1号陥し穴測定図

第2号陥し穴（第11図）

位置 調査区南西部のB 1 j7に位置している。

規模と形状 長径3.75m、短径2.44mの楕円形で、深さは2.30mほどである。長径方向はN-65°-Wで、長軸の壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部はやや外傾している。また、短径方向の断面形は、ほぼV字状で、下部は溝状に狭くなり、底面は平坦である。

覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

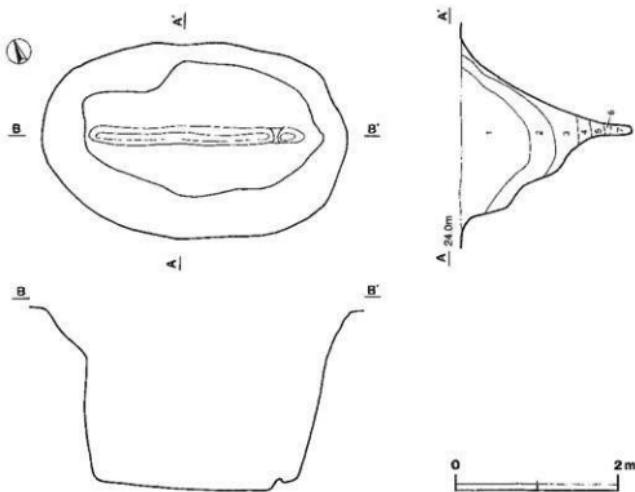
土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・燧上粒子・炭化粒子少量
2 灰色	ロームブロック・炭化物微量
3 浅灰色	ロームブロック多量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量

5 黑褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
6 浅褐色	ロームブロック中量
7 浅褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが造構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第11図 第2号陥し穴実測図

第3号陥し穴（第12図）

位置 調査区南西部の、B 3 e9に位置している。

規模と形状 長径2.70m、短径1.29mの楕円形で、深さは2.10mほどである。長径方向はN-64°-Wで、長軸の壁は下部からオーバーハングして立ち上がり、上部ではほぼ直立する。また、短径方向の断面形は、ほぼV字状で直立し、下部は溝状に狭くなり、底面はほぼ平坦である。

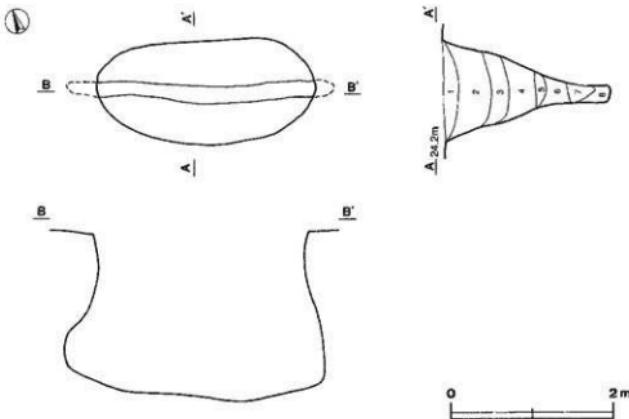
覆土 8 層からなり、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 灰褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黑褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 | 6 深褐色 ロームブロック多量 |
| 3 噴褐色 ロームブロック中量 | 7 浅褐色 ロームブロック多量、粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量 | 8 噴褐色 ロームブロック中量、粘土粒子少量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第12図 第3号陥し穴実測図

第4号陥し穴（第13図）

位置 調査区中央部のB4 g6区に位置している。

規模と形状 長径3.13m、短径1.78mの楕円形で、深さは1.90mほどである。長径方向はN-71°-Eで、長軸の壁はほぼ直立ぎみに立ち上がり、上部では外傾している。また、短径方向の断面形はV字状を呈し、下部は溝状に狹くなり、底面は北東から南西に向けて傾斜しているが平坦である。

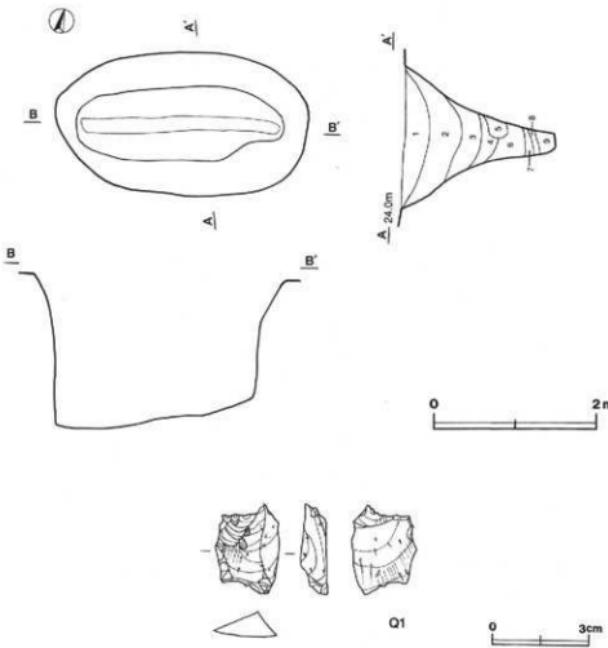
覆土 9 層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|------------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼上ブロック・炭化物微量 | 6 深褐色 ロームブロック多量 |
| 2 極端褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 7 灰褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黑褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 | 8 灰褐色 ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量 | 9 噴褐色 ロームブロック微量 |
| 5 噴褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 黒曜石の剥片1点が出土している。Q1は覆土中からの出土である。

所見 出土遺物が覆土中からの剥片1点であるため時期は明確に特定できないが、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第13図 第4号陥し穴・出土遺物実測図

第16号土坑出土遺物觀察表（第13図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	刮片	28	20	0.9	3.3	黒曜石	板状刮片、正面下部と下辺に微細な剥離面、両面に微窪を含む	覆土中	PL6

第5号陥し穴（第14図）

位置 調査区中央部南のB4 f6区に位置している。

規模と形状 長径2.91m、短径2.52mの楕円形で、深さは2.60mほどである。長径方向はN-34°Wで、長軸の壁はやや内傾して立ち上がり、上部は外傾している。また、短径方向の断面形は、最下部は袋状を呈しているがほぼV字状で、底面は平坦である。

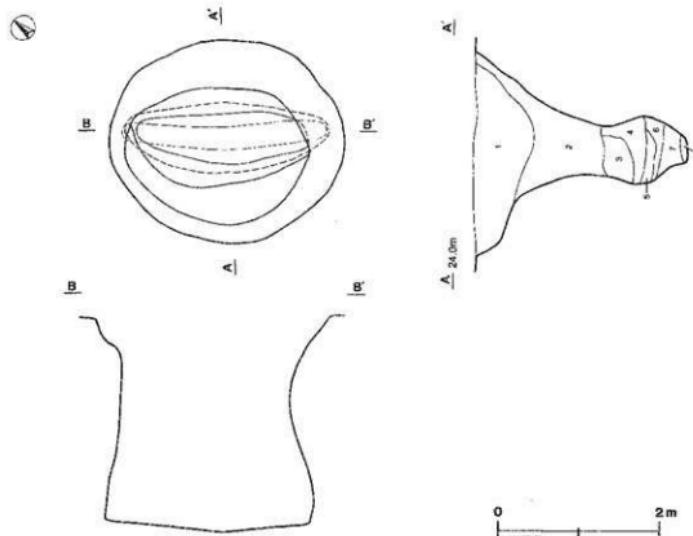
覆土 8層からなり、不規則な堆積状況を示す人为堆積である。

土壤解說

- | | | | |
|-------|--------------------|---------|--------------------|
| 1 黒 色 | ロームブロック・変化物微量 | 5 にぶい褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 2 褐 色 | ロームブロック中量 | 6 褐 色 | ロームブロック多量、粘土ブロック中量 |
| 3 褐 色 | ロームブロック多量 | 7 褐 色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 4 褐 色 | ロームブロック多量、粘土ブロック微量 | 8 黒 褐 色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第14図 第5号陥し穴実測図

第6号陥し穴（第15図）

位置 調査区中央部南のB4号区に位置している。

規模と形状 長径1.81m、短径0.95mの楕円形で、深さは1.40mほどである。長径方向はN-82°-Wで、長軸の壁は、ほぼ直立して立ち上がっている。また、短径方向の断面形状はU字状で、底面は平坦である。

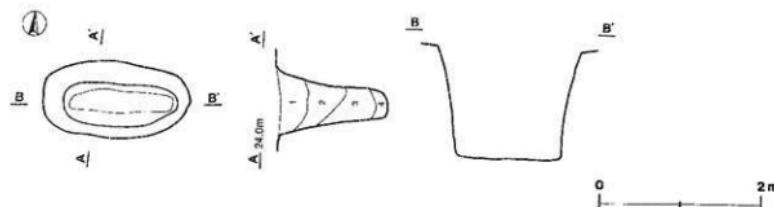
覆土 4層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | |
|----------------------------|----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 3 浅色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック微量 | 4 深色 ロームブロック多量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第15図 第6号陥し穴実測図

第7号陥し穴（第16図）

位置 調査区中央部南のB5 22区に位置している。

規模と形状 長径3.40m、短径1.10mの楕円形で、深さは1.60mほどである。長径方向はN-40°-Wで、長軸の壁は内傾して立ち上がり、上部ではほぼ直立している。また、短径方向の断面形は、下部は垂直ではなくU字状であり、底面は平坦である。

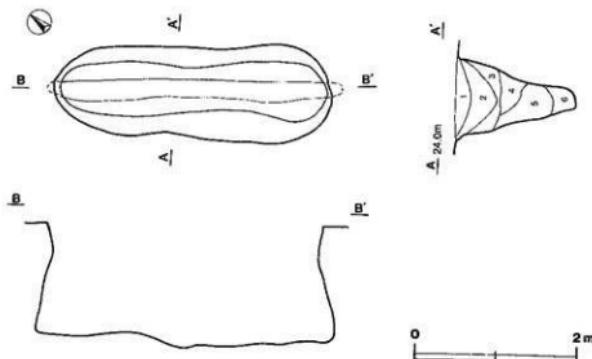
覆土 6層からなり、下部は不規則な堆積状況で、上部は自然堆積の状況を示すことから、人为的に埋め戻された後自然に堆積したと考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量	4 開色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	5 開色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	6 開色	ロームブロック多量、粘土ブロック微量

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが、造構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第16図 第7号陥し穴実測図

第8号陥し穴（第17図）

位置 調査区東部のB5 h5区に位置している。

規模と形状 長径2.84m、短径1.61mの楕円形で、深さは2.20mほどである。長径方向はN-29°-Eで、長軸の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。また、短径方向の断面形はほぼU字状であり、底面は平坦である。

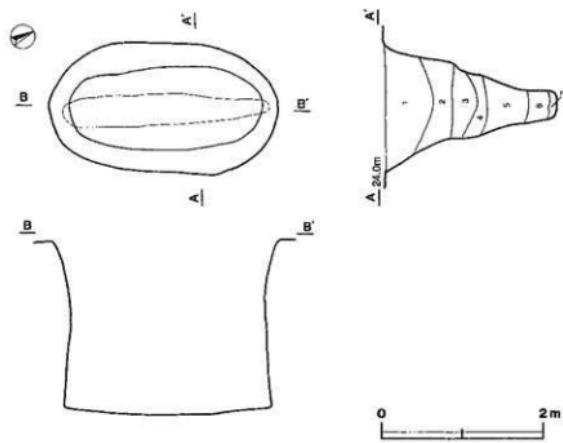
覆土 7層からなり、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒色	ロームブロック・炭化物微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 細暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6 開色	ロームブロック多量
3 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	7 暗褐色	ロームブロック微量
4 開色	ロームブロック中量、炭化物微量		

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが、造構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

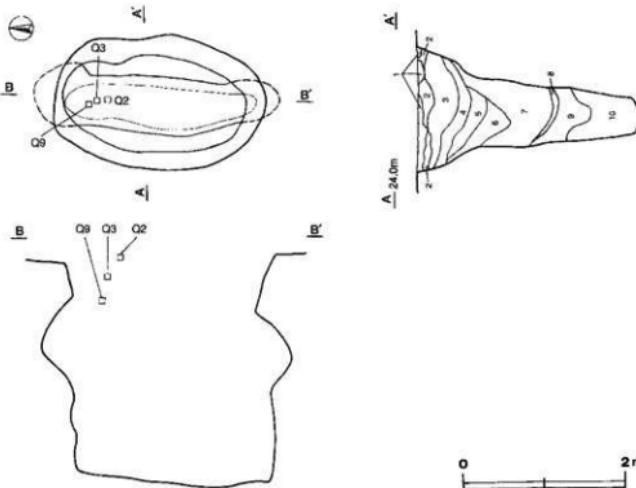


第17図 第8号陥し穴実測図

第9号陥し穴（第18・19図）

位置 調査区中央北部のB 3 b6区に位置している。

規模と形状 長径2.60m、短径1.65mの楕円形で、深さは270mほどである。長径方向はN 0°で、長軸の壁の中央部はやや内傾をしているが、ほぼ垂直に立ち上がっている。また、短径方向の断面形はU字状で、最上部は外傾し、底面は平坦である。



第18図 第9号陥し穴実測図

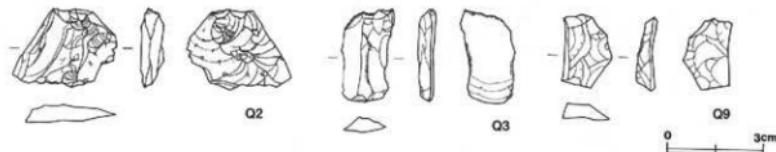
覆土 10層からなり、不規則な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1	褐色	ロームブロック少量、燧上ブロック・炭化物微量	6	褐色	ロームブロック微量
2	褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化物微量	7	黒褐色	ロームブロック・炭化物微量
3	暗褐色	ロームブロック・炭化物微量	8	暗褐色	ロームブロック少量
4	暗褐色	ロームブロック微量	9	褐色	ロームブロック微量
5	褐色	ロームブロック少量	10	暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 黒曜石の剥片3点、碎片24点、珪質頁岩の剥片2点、碎片3点の他に縄文土器片1点が出土している。Q2・3は覆土最上層から出土している。Q9は旧石器調査第2区のQ8と接合関係（接合資料1）にあり、埋め戻しの過程で混入したものと考えられる。

所見 出土遺物は、縄文土器片1点で、他は剥片や碎片などであるため時期は明確に特定できないが、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第19図 第9号陥し穴出土遺物実測図

第21号土坑出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	剥片	25	32	0.6	4.6	黒曜石	横長剥片。正面に微細な剥離面、両面に微細を含む	覆土上層	PL6
Q 3	剥片	29	16	0.6	2.4	珪質頁岩	横長剥片、剥離面打凸。上部左側縁に調整痕	覆土上層	PL6
Q 9	剥片	23	15	0.7	1.4	珪質頁岩	横長剥片、被熱を受け変色、被熱によりQ8から自然剥離か	覆土上層	接合資料1 PL6

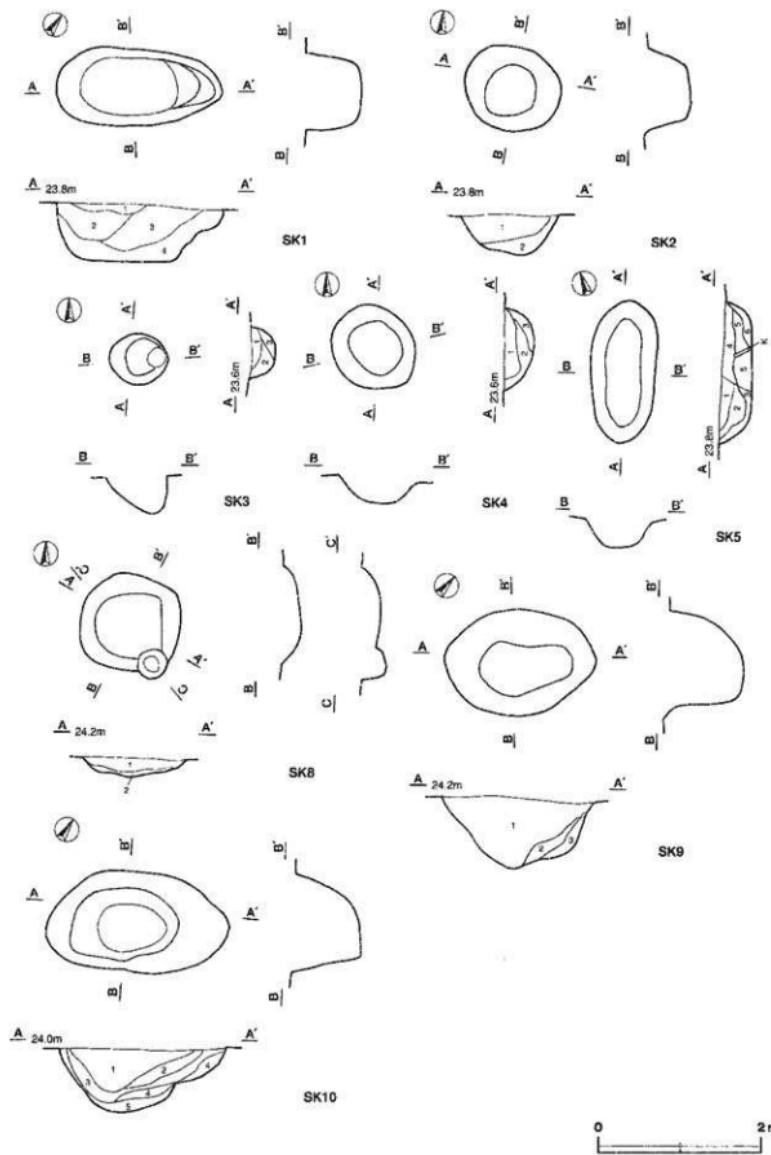
表3 陥し穴一覧表

番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模 (m) (長径×短径)	深 さ (cm)	壁面	底面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 (発掘番号)
1	B 2 b1	N-88°-E	椭円形	3.26×2.45	221	直立	平坦	自然		SK6
2	B 1 j7	N-65°-W	椭円形	3.75×2.44	228	直立	平坦	自然		SK7
3	B 3 a9	N-64°-W	椭円形	2.70×1.29	209	直立	平坦	人為		SK15
4	B 4 g6	N-71°-E	椭円形	3.13×1.78	190	直立	平坦	自然	剥片	SK16
5	B 4 f6	N-34°-W	椭円形	2.91×2.52	263	直立	平坦	人為		SK17
6	B 4 f9	N-82°-W	椭円形	1.81×0.95	137	直立	平坦	自然		SK18
7	B 5 f2	N-40°-W	椭円形	3.40×1.10	157	直立	平坦	自然人為		SK19
8	B 5 h5	N-29°-E	椭円形	2.84×1.61	216	直立	平坦	自然		SK20
9	B 3 b6	N-0°	椭円形	2.60×1.65	274	直立	平坦	人為	剥片	SK21

3 その他の遺構

土坑

今回の調査で、時期不明及び性格不明の土坑が8基確認されている。以下、一覧表で紹介するとともに、あわせて実測図と土層解説を記載する。



第20図 その他の上坑実測図

第1号土坑土層解説

- 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

第2号土坑土層解説

- 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 暗褐色 ロームブロック中量

第3号土坑土層解説

- 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 暗褐色 ロームブロック少量
- 褐色 ロームブロック中量

第4号土坑土層解説

- 褐色 ロームブロック少量
- 暗褐色 ロームブロック中量
- 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第5号土坑土層解説

- 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック中量
- 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
- 褐色 ロームブロック中量
- 褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

第6号土坑土層解説

- 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック微量
- 黑色 炭化物微量、ロームブロック・焼土粒子微量

第9号土坑土層解説

- 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
- 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

第10号土坑土層解説

- 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 暗褐色 ロームブロック少量
- 暗褐色 ロームブロック微量
- 褐色 ロームブロック少量

表4 土坑一覧表

番号	底面	長径方向	平面形	幅員 (m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	参考
1	B 1-4	N-51°-E	扇円形	2.05×0.95	69	外傾	平坦	人骨		
2	H 1-5	N-63°-W	扇円形	1.30×1.05	55	外傾	平坦	自然		
3	B 1-5	N-87°-W	扇円形	0.72×0.64	45	傾斜	圓状	自然		
4	B 1-5	N-51°-W	扇円形	1.13×0.96	35	傾斜	圓状	人骨		
5	B 1-8	N-23°-E	扇円形	1.77×0.83	34	傾斜	平坦	人骨		
8	H 1-6		椭丸方形	1.25×1.20	22	傾斜	平坦	自然		
9	B 2-3	N-40°-E	扇円形	1.88×1.31	96	外傾	平坦	人骨		
10	B 1-9	N-54°-E	扇円形	2.26×1.24	84	直立	平坦	自然		

第4節 まとめ

今回の谷ノ沢遺跡で確認された遺構は、石器集中地点2か所、縄文時代の陥し穴9基、時期不明の土坑8基が確認され、旧石器時代から縄文時代にかけての生活の痕跡を確認することができた。ここでは、当調査区から検出された遺構・遺物についての概観を述べまとめとしたい。

1 旧石器時代

谷ノ沢遺跡では石器集中地点が2か所確認されて、石器や剥片類が133点出土しており、当遺跡の中心をなしている。以下、石器集中地点と出土した石材との関係について述べてみる。

石器集中地点の両調査区は、とともに最上層が耕作によって擾乱されており、試掘の際に出土した遺物はその影響を受けている。また、両調査区の遺物出土状況を基本層序に比定すると、第1層はロームブロックと炭化物を少量含む暗褐色の腐植土の層であり、ローム層漸移層である。第2層は第1層よりもやや明るい褐色の土

層で、ロームブロックを含むソフトロームの層に相当する。

遺物は、尖頭器1点、石鏃3点、石刃2点、細石刃1点、石核9点、剥片34点、碎片82点、塵1点の他に、縄文上器片17点、土師器片18点が出土している。第1層からは縄文上器片を中心に黒曜石の石鏃2点、瑪瑙の石鏃1点と碎片が出土していることから縄文時代の遺物として捉えられる。第2層からは接合資料の2点の他に、珪質頁岩の石刃2点、黒曜石の細石刃1点、さらには大量の剥片や碎片が出土しており、旧石器時代の遺物として捉えた。最上層は耕作による搅乱の影響を受けているが、第2層から出土した剥片が試掘による石核に接合したことから、上層断面には明確な痕跡を見つけることはできなかったが、最上層だけでなく第1層、2層は搅乱層である可能性も考えられる。

石材は、黒曜石、珪質頁岩、流紋岩、安山岩、瑪瑙、硬質頁岩であるが、その中では黒曜石が一番多く、全体の61.6%を占めており、次いで珪質頁岩が29.3%である。黒曜石には信州系のものと高麗山産があり、双方からの搬入が考えられる。

次に、出土遺物からうかがえることについて述べたい。先に述べたように、第1層はローム層漸移層と考えられ、出土している遺物は縄文時代前期と思われる土器片を中心に石鏃と碎片が出土しているが、前述したように搅乱を受けている可能性も想定される。また、第2層はローム層であり、石刃や細石刃などのほかに接合資料(1・2)が出土し、特にA3j5区とB3a5区で碎片の出土状況が密である。このように、剥片や碎片のまとまりが確認でき、石器製作跡を想定することができるが、石器製作に関わる道具類は出土していない為明確な判断はできない。

2 縄文時代

当遺跡からは、縄文時代の陥し穴と考えられる遺構が9基検出されている。平面形はいずれも梢円形で、断面形は、第1・6~9号陥し穴が「U」字状を示し、第2~5号陥し穴が「V」字状を呈しており、二つに分類することができる。「V」字状を呈する陥し穴は、動物を挟み込んで動けなくする意図がうかがえる¹⁾という先史的研究もあり、当遺跡の「V」字状を呈する陥し穴はそれに符合すると考えられる。

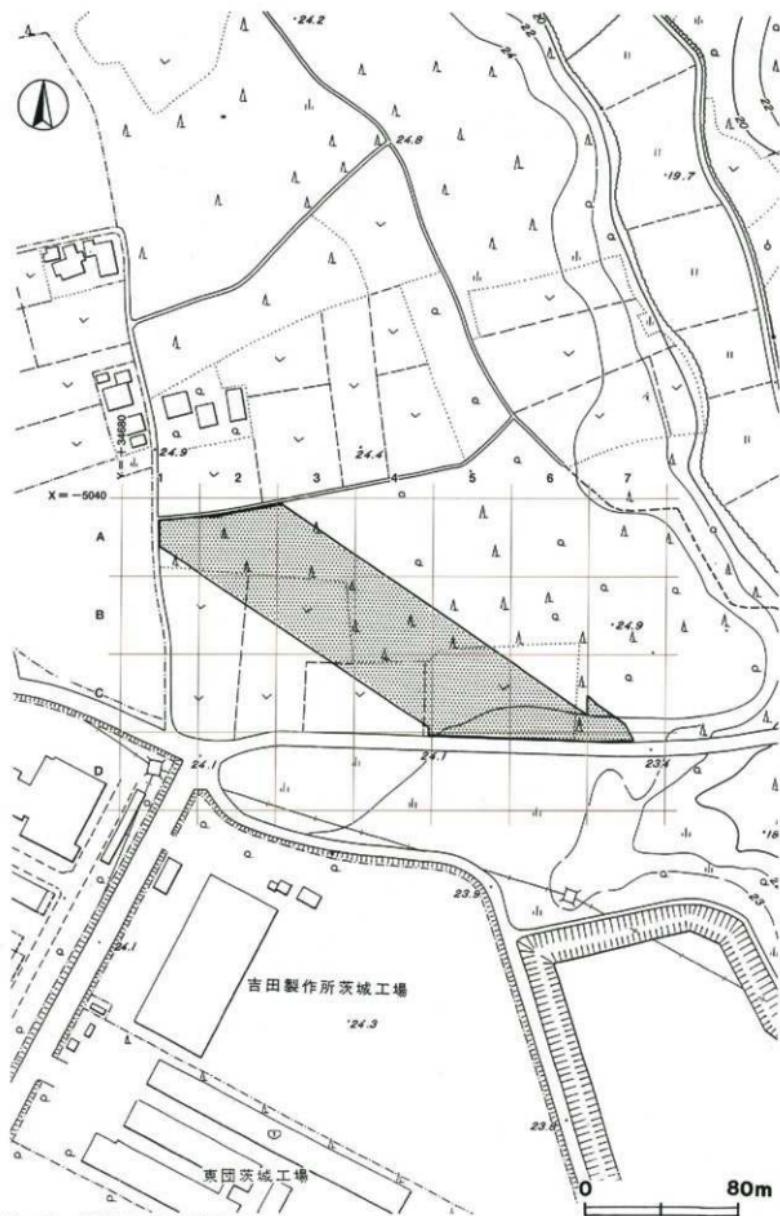
一般的に陥し穴については、形状から用途・目的が想定できても、出土遺物がほとんど無いため、時期を決定することは極めて難しい。当遺跡でも、第4号陥し穴で黒曜石の剥片1点、第9号陥し穴では黒曜石と珪質頁岩の剥片や碎片が32点と縄文時代前期と思われる上器片1点が出土しているだけであるため、時期を明確にすることはできなかった。

註

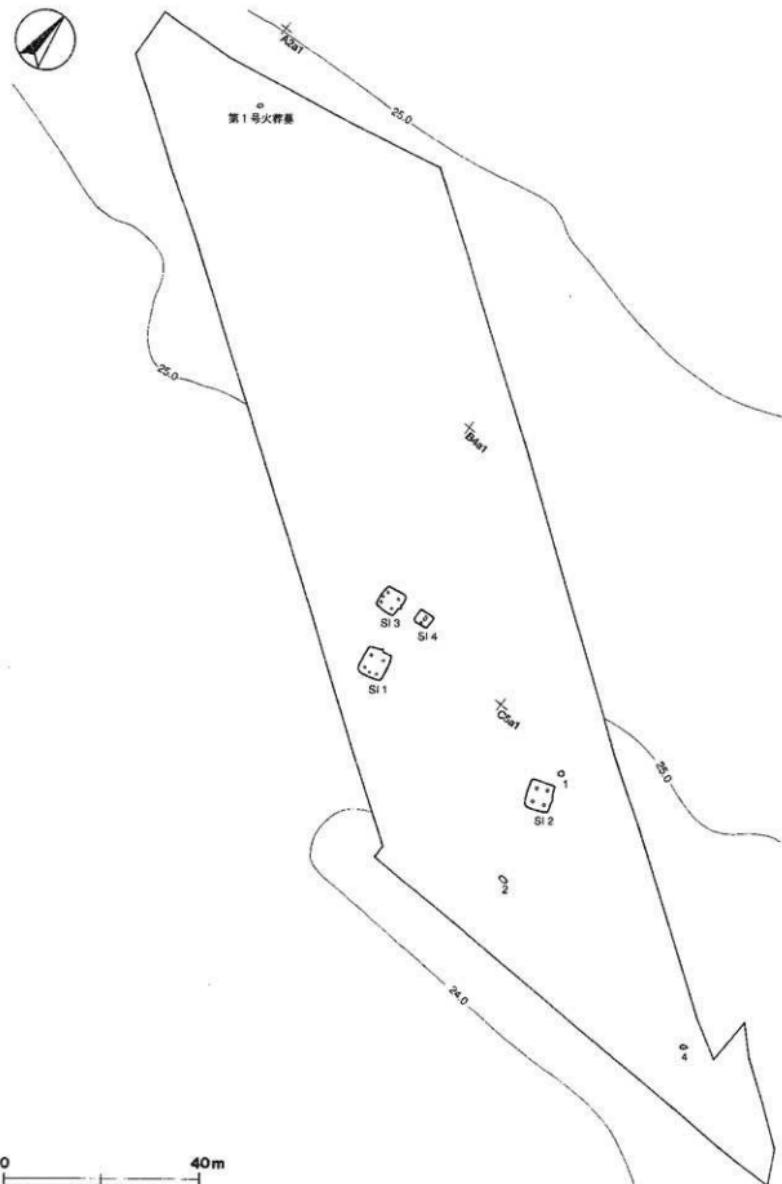
1) 今村啓嗣「陥穴（おとしあな）」「縄文文化の研究（2）牛糞」雄山閣 1983年2月

参考文献

旧石器時代研究班「茨城県南部における立川ローム層の層序区分について」『研究ノート』第6号 茨城県教育財团 1997年6月



第21図 手接遺跡調査区設定図



第22図 手接遺跡遺構全体図

第4章 手接遺跡

第1節 遺跡の概要

手接遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字古原字手接3247番地ほかに所在し、阿見町南東部、桂川に注ぐ支流の右岸、標高25m前後の台地上に位置している。調査面積は10,448m²で、調査前の現況は畠地である。

当遺跡は、縄文時代から平安時代までの複合遺跡で、今回の調査によって検出された遺構は、古墳時代後期の堅穴住居跡4軒、平安時代の火葬墓1基である。また、時期が特定できない土坑3基も調査されている。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で3箱が出土した。主な出土遺物は、縄文土器片、土師器(壺・碗・小型甕・甕・手捏土器)、須恵器(鉢)、土製品(紡錘車・小玉・管玉)、石製品(紡錘車)などである。

第2節 基本層序

調査区北側のA3e7区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は25.5mで、地表から約2.9mほど掘り下げ、第23図のような堆積状況を確認した。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層 ローム粒子を少量含む厚さ40cm前後の黒褐色の耕作土層で、粘性、しまりともに弱い。

第2層 第1層よりも明るく、ローム粒子を中量含み、厚さ6~20cmの黒褐色の層であり、粘性、しまりともにやや弱い。表土からローム層への漸移層である。

第3層 厚さ14~30cmの褐色のソフトローム層である。粘性は普通であるが、しまりはやや弱い。

第4層 ロームブロックを少量含む厚さ4~36cmの明褐色のソフトローム層である。ロームブロック中に黑色粒子を少量含み、粘性、しまりともに普通である。

第5層 黒色粒子と白色粒子を少量含む厚さ10~40cmの暗褐色のハードローム層である。粘性、しまりともに普通である。

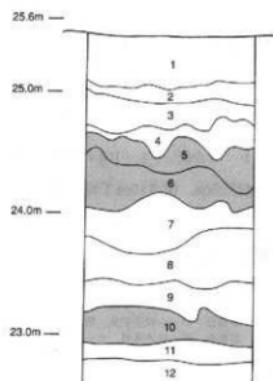
第6層 黒色粒子と白色粒子を少量、赤色粒子を微量含む暗褐色のハードローム層で、厚さは15~50cmである。粘性、しまりともに強く、第5層とともに、第I黒色帯に相当すると考えられる。

第7層 黒色粒子を微量含み、第6層よりやや明るい褐色のハードローム層で、厚さは13~50cmである。粘性、しまりはともに強く、AT層に相当すると考えられる。

第8層 黒色粒子を中量、白色粒子を微量含む厚さ25~47cmの褐色のハードローム層である。粘性は普通であり、しまりは強い。

第9層 第8層よりやや暗い褐色のハードローム層である。厚さは15~35cmで、粘性は普通であり、しまりは強い。

第10層 黒色粒子と赤色粒子を中量、白色粘土粒子を微量含む厚さ13~33cmの暗褐色のハードローム層である。粘性、しまりはとも



第23図 基本土層図

に強く、第Ⅱ黒色帶に相当すると考えられる。

第11層 黒色粒子と白色粘土粒子、褐色粘土粒子を中量含む厚さ12~20cmのやや暗い褐色のハードローム層であり、粘性、しまりはともに強い。

第12層 褐灰色の粘土層で、層厚は未掘のため確認できなかったが、常総粘土層と考えられる。

なお、遺構は、第2層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、古墳時代の堅穴住居跡は4軒が確認された。これらの遺構は、調査区の中央部に位置している。主な遺物としては、土器類のほか、小玉や管玉、筋錐車が出土している。

以下、確認された遺構と主な遺物について記載する。

堅穴住居跡

第1号住居跡（第24~27図）

位置 調査区中央部のC4c4区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一辺が5.50mほどの方形で、主軸方向はN-8°-Wである。壁高は55~60cmほどで、各壁ともほぼ直立している。

床 ほぼ平坦であり、出入り口ピット付近と竈の南側を中心に踏みしめられた面がある。東西方向に耕作による擾乱を受けている。南西コーナーおよび南東コーナーから焼土塊が検出されている。

竈 北側中央部に付設されている。袖部と煙道部は砂質粘土にロームと小砂利を少量混ぜ、壁を10cmほど掘り込んで構築されている。天井部と袖部の一部は、耕作により削平されている。規模は、焚口部から煙道部まで90cm、袖部幅85cmである。火床面は住居の主軸方向に長い楕円形で、床面から5cmほど掘り込まれている。袖部内面及び燃焼部は、被熱のため赤変硬化している。

竈土層解説

1 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子少量	4 壁 褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子少量、コーム粒子微量
2 茶褐色	後上ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	5 灰褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
3 楠褐色赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック少量	6 壁赤褐色	ロームブロック・焼土粒子少量

ピット 5か所。P1~P4は径50~60cmの円形で、深さ35~66cmである。配置や規模から主柱穴と考えられる。

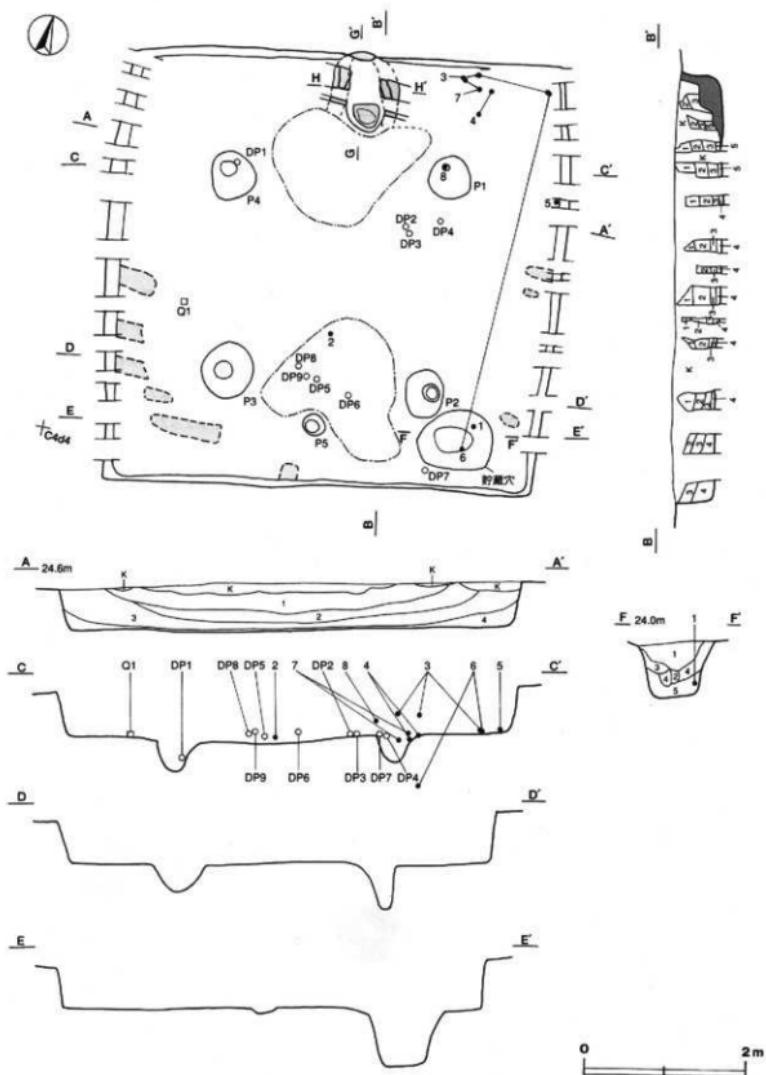
P5は径25cm、深さ10cmで南側寄りの中央に位置し、その北側に床の硬化面が広がっていることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯藏穴 南東コーナー部に付設されている。長径95cm、短径70cmの楕円形で、深さは76cmである。

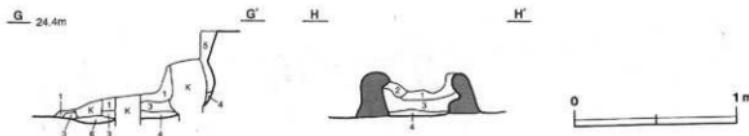
貯藏穴土層解説

1 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	4 褐色	ロームブロック多量
2 茶褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	5 褐色	ローム粒子多量
3 壱褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子中量		

覆土 5層に分層される。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含み、レンズ状の堆積状況を示している自然堆積である。



第24図 第1号住居跡実測図(1)



第25図 第1号住居跡実測図(2)

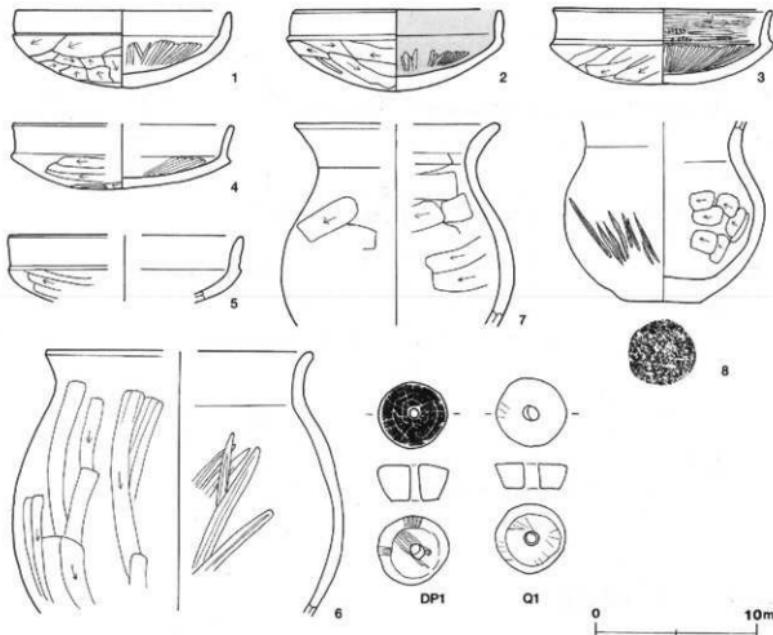
土層解説

- 1 黒 色 燃土粒子中量、ローム粒子少量
- 2 黒 色 ロームブロック・燃土粒子中量
- 3 黒褐色 ロームブロック・燃土粒子中量

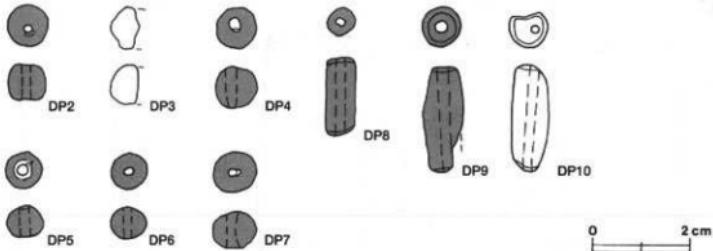
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、燃土粒子微量

遺物出土状況 土師器片543点(壺類196、甕類344、瓶類3)、土製品10点(紡錘車1、管玉3、小玉6)、石製品1点(紡錘車)が出土している。1と6は貯蔵穴の覆土下層、2は中央部寄りの床面から逆位の状態でそれぞれ出土している。3は覆土中層と下層の破片が接合したものである。4・7は竈東側の床面から破片で出土し、5は東側壁際の覆土下層、8は竈手前の覆土下層からそれぞれ出土している。また、土製紡錘車はP4の覆土中層から出土し、土製の小玉や管玉は出入り口付近及び竈付近の床面に散らばった状態で出土している。石製紡錘車は、西壁側中央部付近の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期(6世紀後葉)と考えられ、土製の小玉や管玉は祭祀具の可能性がある。



第26図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第27図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表(第26・27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土器	环	13.1	4.7	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口沿部横ナギ、底部外面へラ削り、内面へラ削り	貯藏穴内	95% PL12
2	土器	环	12.7	5.0	-	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口沿部横ナギ、底部外面へラ削り、内面へラ削り	中央部床面	100% 赤色 PL12
3	土器	环	13.5	4.7	-	長石・雲母	明赤褐色	普通	口沿部外曲面横ナギ、内面積立ラヘラ磨き、底部外曲面へラ削り、内面へラ削り	北東コナー下層	65% PL12
4	土器	坏	[13.6]	4.1	-	雲母・砂粒	明赤褐色	普通	口沿部横ナギ、底部外面へラ削り、内面へラ削り	北東コナー下層	35%
5	土器	坏	[14.4]	(4.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口沿部横ナギ、底部内・外曲面へラ削り、内面剥離	東壁下層	10%
6	土器	坏	[16.6]	(16.2)	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	口沿部横ナギ、底部内・外曲面へラ削り、内面剥離	貯藏穴内	20% PL12
7	土器	坏	[12.4]	(12.5)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口沿部横ナギ、底部内・外曲面へラ削り	東東側床面	20% PL12
8	土器	坏	-	(11.1)	4.7	長石・石英・雲母	橙	普通	底部外面剥離、内面へラ削り	東手前下層	80% 長石軽削痕 PL12

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	纺锤草	4.4	2.2	0.6	42.5	土製	上面削側による放射状線文様、側面・下面一部へラ磨き	柱穴中層	100% PL14
DP2	小玉	0.9	0.8	0.2	0.6	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	東東側床面	100% PL14
DP3	小玉	0.9	0.8	-	(0.4)	土製	ナデ	東東側床面	50% PL14
DP4	小玉	0.9	0.9	0.2	0.6	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	東東側床面	100% PL14
DP5	小玉	0.7	0.6	0.2	0.3	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	中央部床面	95% PL14
DP6	小玉	0.7	0.7	0.1	0.3	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	中央部床面	95% PL14
DP7	小玉	0.9	0.7	0.3	0.5	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	貯藏穴南側床面	100% PL14

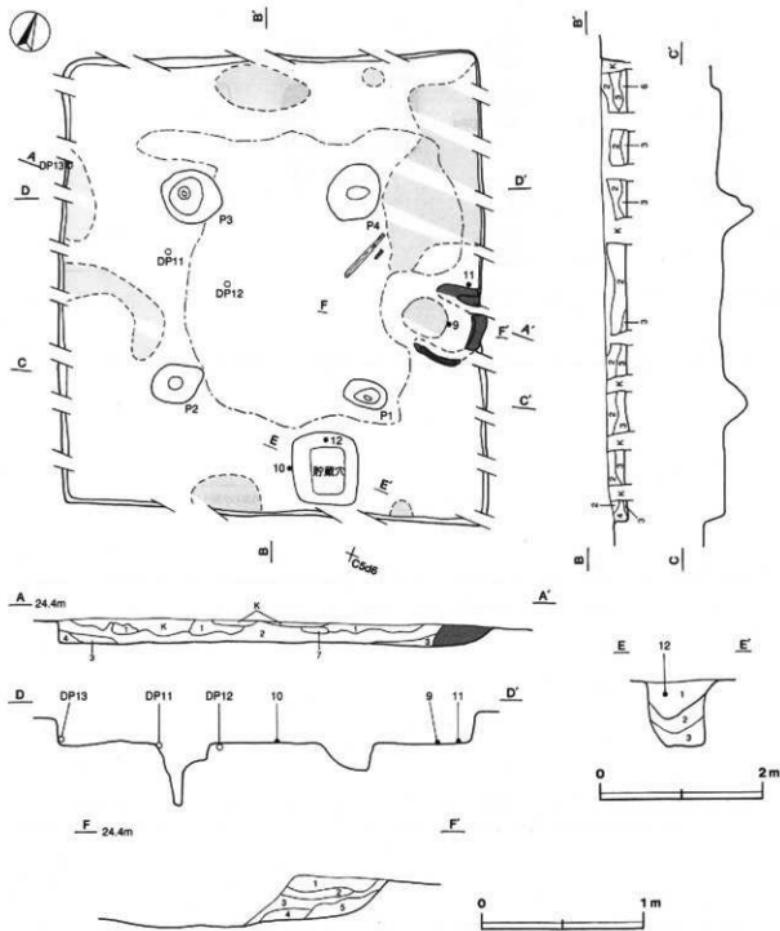
番号	器種	径	長さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP8	管玉	0.7	1.6	0.2	0.9	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	中央部床面	95% PL14
DP9	管玉	0.8	2.2	0.2	(1.6)	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	中央部床面	80% PL14
DP10	管玉	0.8	2.1	0.2	1.2	土製	ナデ・片面穿孔	覆土中	100% PL14

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	纺锤草	4.4	1.5	0.8	48.7	滑石	上面・側面・下面に微細な鋸歯	西壁床面	100% PL14

第2号住居跡(第28・29図)

位置 調査区北東部のC5c5区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一辺が5.50mほどの方形で、主軸方向はN-68°-Eである。壁高は13~40cmで、各壁ともほぼ直立して立ち上がっている。



第28図 第2号住居跡実測図

床 ほぼ平坦であり、中央部から竈付近に踏みしめられた面がある。また、竈北側の床面から炭化材が出土し、各壁沿いの床面からは焼土塊が検出されていることから、焼失住居と考えられる。東西方向に耕作による搅乱を受けている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに付設されている。袖部と煙道部はロームに砂質粘土を少量混ぜ、壁を10cmほど掘り込んで構築されている。天井部と両袖部のはほとんどは、耕作により削平されている。規模は、焚口部から煙道部まで約90cm、袖部幅約95cmである。火床部は主軸方向に長い楕円形で、床面から10cmほど掘り込まれている。袖部内面及び火床面は、被熱のため赤変硬化している。

竪土層解説

- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1 灰褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 明赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 灰褐色 粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 灰褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | |

ピット 4か所。P1～P4は、配置や規模から主柱穴と考えられる。P1・P2・P4は深さ29～35cmであり、P3だけが深さ80cmである。

貯蔵穴 南壁中央部から、やや南東コーナー部に寄って付設されている。長軸90cm、短軸80cmの長方形で、深さは85cmである。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------------------|---------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・ローム粒子少量 | |

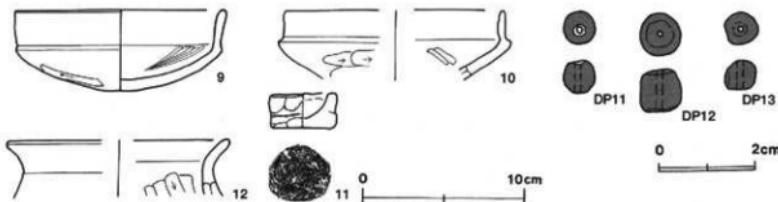
覆土 7層に分層される。下層にロームブロックや炭化物・焼土粒子を多く含む、人為堆積である。

土層解説

- | | |
|------------------------------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量 | 5 褐色 焼土粒子・白色粘土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 極暗褐色 ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子少量 |
| 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子中量 | |

遺物出土状況 土師器片179点（坏類76、甕類103）、土製品3点（小玉）が出土している。9は竪の火床部から逆位の状態で出土し、10は貯蔵穴西側の床面、11は竪左袖外側の床面、12は貯蔵穴の覆土上層からそれぞれ出土している。また、DP11～DP13は、西壁側北西コーナー部付近から中央部の床面にかけて出土している。

所見 本跡は、焼土塊及び炭化材の検出状況から焼失住居と考えられ、出土土器から時期は後期（6世紀中葉）と考えられる。



第29図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
9	土師器	坏	12.8	4.9	—	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	[1]辺部削りナデ、一部外斜板有り、体部外側へラブリ、内面有り	竪火床部	90% PL12
10	土師器	坏	[13.4]	(4.2)	—	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	[1]辺部削りナデ、体部外側へラブリ、内面ヘラブリ、内面有り	若窓穴西側床面	15%
11	土師器	手捏坏	4.0	2.1	3.7	長石・雲母	褐	普通	[1]辺部削り直角、押圧、体部外側輪積み板、指壓乳、内面ナデ	竪北側床面	100% PL12
12	土師器	壺	[13.6]	(3.5)	—	長石・雲母・赤色粒子	褐	普通	[1]辺部横ナデ、体部内・外側へラブリ	貯蔵穴上層	5%

番号	器種	絶	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP11	小玉	0.7	0.7	0.1	0.3	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	中央部床面	100% PL14
DP12	小玉	0.8	0.9	0.1	0.7	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	中央部床面	100% PL14
DP13	小玉	0.7	0.6	0.1	0.2	土製	ナデ・漆塗布、片面穿孔	北西コーナー床面	100% PL14

第3号住居跡（第30・31図）

位置 調査区中央部のB4j3区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 反軸5.10m、短軸4.60mの長方形で、主軸方向はN-85°-Eである。壁高は60~80cmほどで、各壁ともほぼ直立して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であり、出入り口付近から中央部にかけて、踏みしめられた面があり、出入り口付近は周りの床面よりやや高まりをもっている。また、出入り口と考えられる西壁沿いには、焼土塊とともに炭化材が検出され焼失住居と考えられる。壁清は、北東コーナー付近から窓のある東壁、南東コーナー付近を除いては半周している。

炉 住居中央部に位置した長径45cm、規徴35cmの楕円形の地床炉である。周りの床面と同じ高さで礎化していることから、炉としての使用がなされなくなつて、かなりの時間が経過していると考えられる。

窓 東壁中央部からやや南寄りに付設されている。袖部はロームに砂質粘土を少量混ぜ、壁を15cmほど掘り込んで構築されている。規模は、焚口部から煙道部まで約120cm、袖部幅約95cmである。火床部は主軸方向に長い椭円形で、床面から4cmほど掘り込まれている。袖部内面及び火床面は、被熱のため赤変礎化している。

土壤層解説

1 淡褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 黄褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	地上粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土の微量	5 にぶい赤褐色	地上ブロック中量、炭化粒子微量
3 にぶい赤褐色	地上粒子中量、炭化粒子・粘土粒子微量	6 にぶい赤褐色	ロームブロック・地上粒子・炭化粒子少量

ピット 5か所。P1~P4は径30~35cmの円形で、対角線上に位置するP1・P3が深さ36cm、P2・P4が70~72cmである。配置や規模から主柱穴と考えられる。P5は径30cm、深さ60cmで、西壁寄りの中央に位置し、その東側にやや高まりのある床の礎化面が広がっていることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に付設されている。主軸方向に長い椭円形で、長径80cm、短径60cm、深さは59cmである。

貯蔵穴土壤解説

1 断面褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子中量		

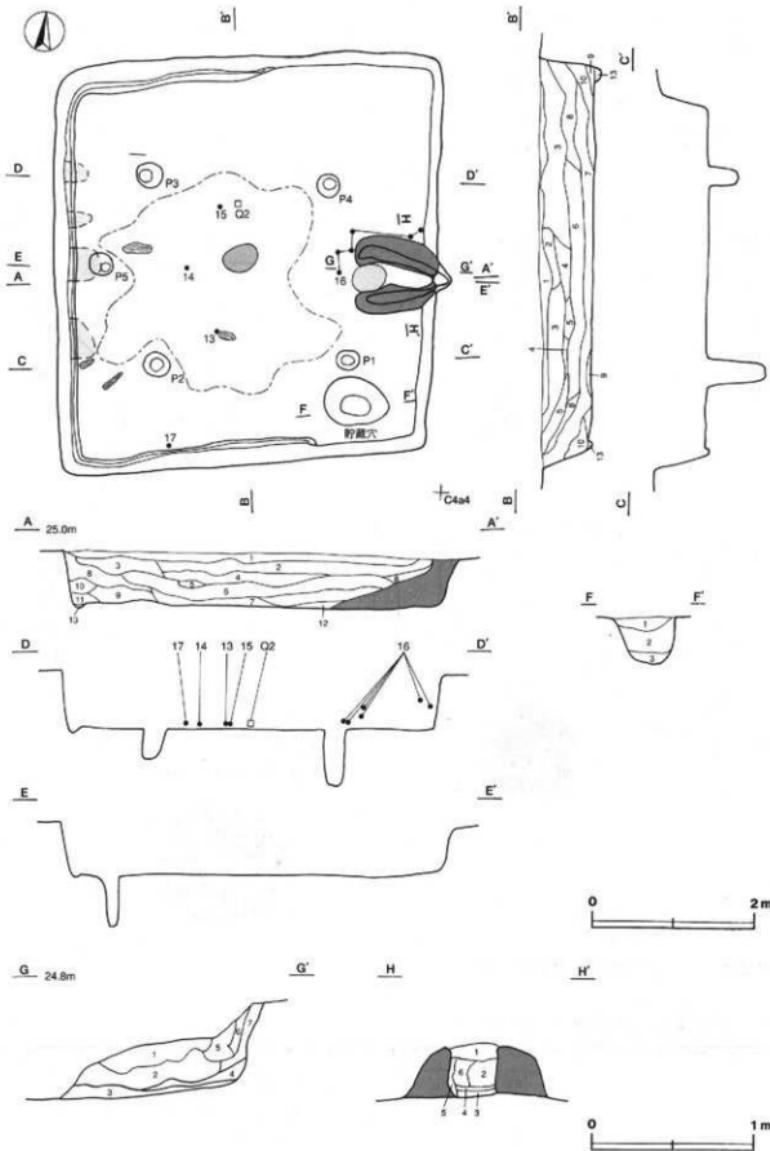
覆土 13層に分層される。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含み、不自然に堆積した人為堆積である。

土壤層解説

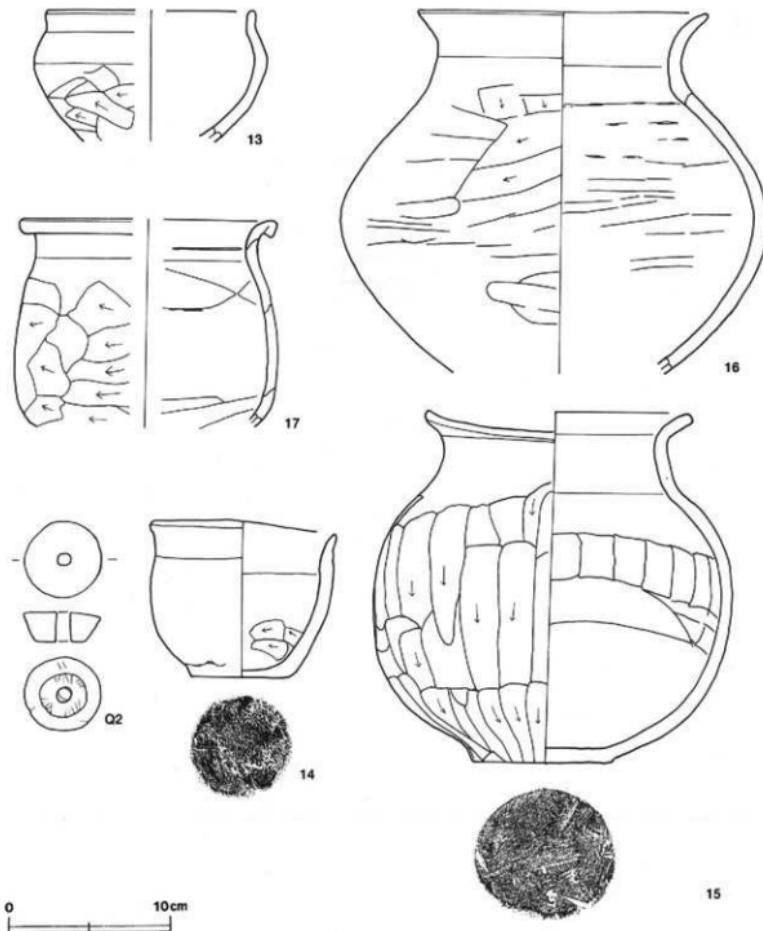
1 黒褐色	ローム粒子少量	8 暗褐色	ロームブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	9 黄褐色	ロームブロック微量
3 黑褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	11 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
5 暗赤褐色	焼土粒子少量	12 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
7 黑褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量		

遺物出土状況 土師器片129点（坏類64、甕類65）、石製品1点（鍛錘車）が出土している。13~15は、中央部のほぼ床面からそれぞれ出土している。16は、竈左袖側の覆土中層から下層の破片が接合したものであり、17は南壁際の床面から破片の状態で出土している。また、鍛錘車は、中央部のほぼ床面から出土している。

所見 本跡は、焼土及び炭化材の検出状況から焼失住居と考えられる。出土土器から時期は後期（6世紀中葉）と考えられる。



第30図 第3号住居跡実測図



第31図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
13	土師器	碗	[12.6]	(8.1)	—	長石・雲母・赤色粒子	棕	普通	L1追部横ナギ、体部外面ヘラ削り、内面ナギ	中央部床面	70% PL12
14	土師器	小型甌	11.4	9.6	6.2	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	L1追部横ナギ、体起ナギ、内面上部ナギ、下部ヘラ削り、底部一部ヘラ削り	中央部床面	95% PL12
15	土師器	甌	16.2	21.7	8.5	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	門追部横ナギ、体部外面ヘラ削り。	中央部床面	95% PL13
16	土師器	甌	17.9	(22.2)	—	長石・石英・雲母	明褐色	普通	L1追部横ナギ、体部内・外表面ヘラ削り。	竈手前下層	60% PL13
17	土師器	甌	[15.4]	(12.8)	—	長石・雲母・赤色粒子	棕	普通	L1追部横ナギ、体部内・外表面ヘラ削り、内曲輪削込み	南壁床面	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 2	紡錘車	4.8	1.8	0.8	49.2	粘板岩	側面・下面に微細な縦刻	中央部床面	100% PL14

第4号住居跡（第32図）

位置 調査区中央部のB4j5区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸3.25m、短軸2.75mの長方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は40~50cmで、各壁ともほぼ直立して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であり、中央部から南側にかけて、踏みしめられている。

炉 長径45cm、短径33cmの梢円形で、床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。

炉土層解説

1 暗赤褐色 燐土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。P1は径20cmの円形で、深さ14cmであり、南壁寄りの中央に位置している。その北側には硬化面が広がっていることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。主柱穴は検出されなかった。

覆土 9層に分層される。第9層が投げ込まれたような人為的堆積状況を示し、その後第8層からレンズ状に堆積した自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子・燒上粒子少量

3 黒褐色 燐土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量

4 暗褐色 ローム粒子・ロームブロック少量

5 褐色 ロームブロック微量

6 暗褐色 ローム粒子少量、燒上粒子・炭化粒子微量

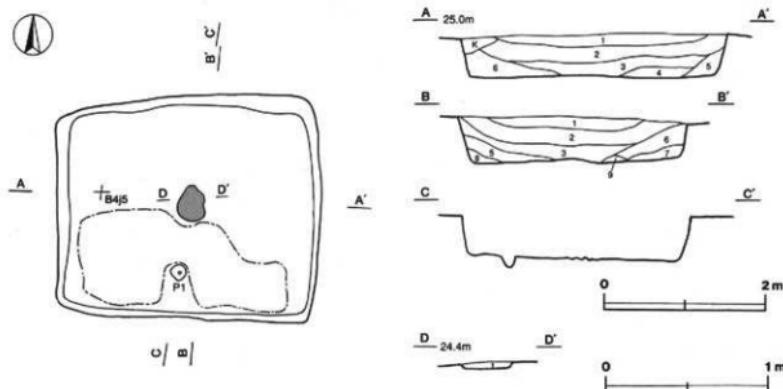
7 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

8 褐色 ローム粒子微量

9 褐色 ローム粒子少量、燒上粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片8点（坏類1、壺類7）が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 出出土器が少ないため時期を判断することが難しいが、覆土中の遺物がすべて土師器であることや炉を使用したことなどから、古墳時代と考えられる。



第32図 第4号住居跡実測図

表5 堅穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設		覆土	出土遺物	時代	備考
								柱穴	壁・床溝				
1	C 4 c4	N 8° W	方形	5.65×5.35	35~60	平坦	—	4	1	—	鐵1 自然	土師器、小玉、管玉、轎輪車	6世紀後葉
2	C 5 c5	N 68° E	方形	3.75×3.25	13~40	平坦	—	4	1	—	鐵1 人骨	土師器、小玉	6世紀中葉
3	B 4 j3	N 85° E	長方形	5.10×4.60	60~80	平坦一部	4~1	—	鐵1 人骨	土師器、轎輪車	6世紀中葉		
4	B 4 j5	N 1° W	長方形	3.25×2.75	40~50	平坦	—	1	—	如1 自然	土師器	古墳時代	

2 平安時代の遺構と遺物

今回の調査で、調査区の西部で平安時代の火葬墓1基が確認された。

以下、遺構と主な遺物について記載する。

(1) 火葬墓

第1号火葬墓（第33・34図）

位置 調査区西部のA2d2区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸97cm、短軸56cmの不定形で、確認面から底面までの深さは38cmほどである。壁はいずれも外傾しながら立ち上がっており、底面は中央部が一段低く掘り込まれている。

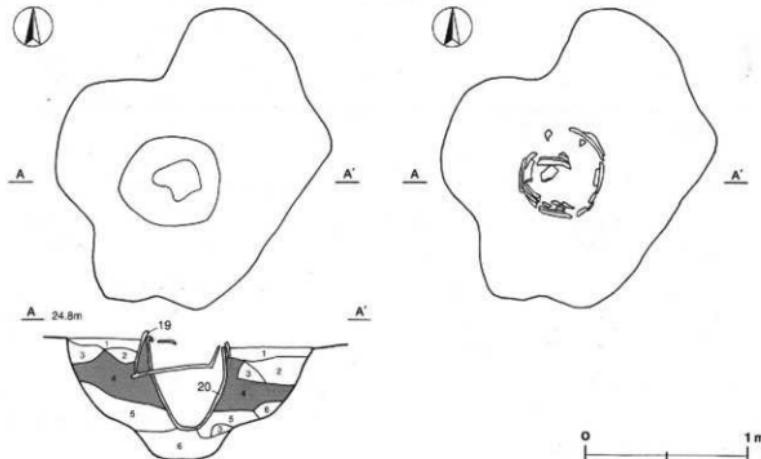
覆土 6層からなり、骨蔵器の周りに木炭が多量に詰め込まれている。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 3 砂褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

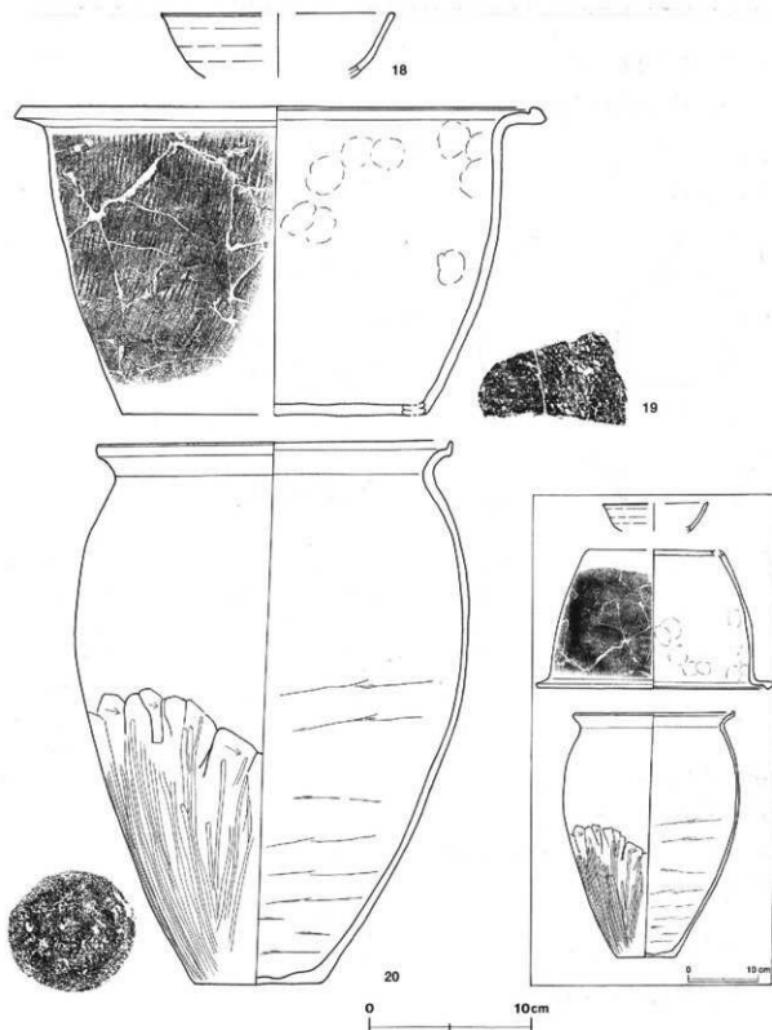
- 4 黒 色 炭化粒子多量、炭化材・炭化物中量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 6 黄 色 ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器11点（壺）、須恵器3点（鉢1・壺類2）が出土している。鉢は、耕作により底部が欠損しているが、逆位で骨蔵器（壺）に被せられた状態で出土した。火葬骨が納められた壺は正位の状態で出土しているが、鉢と同様に上部は耕作によって欠損しており、内部に土や根が混入した状態で出土した。鉢の上に置かれていたと考えられる壺は、鉢や壺と同様に欠損した状態で骨蔵器上部から出土している。また、骨蔵器の中からは多少の骨片と骨粉が確認されているが、各部位を確認することはできなかった。



第33図 第1号火葬墓実測図

所見 骨蔵器は、土坑を掘り込んで埋納されている。埋納法は、掘り込んだ土坑に木炭を入れ、次に納骨した甕を置いてから全体に木炭を加え、鉢を被せた後に甕を置いたものであり、このような形態の埋納法は土浦市八幡脇1号墓や同手野町骨蔵器2でも確認されている。本米、埋納用の土坑の深さは40cm以上と考えられ、木炭を入れた後に土を被せたと想定される。出土土器から時期は9世紀中葉と考えられる。



第34図 第1号火葬墓出土遺物実測図

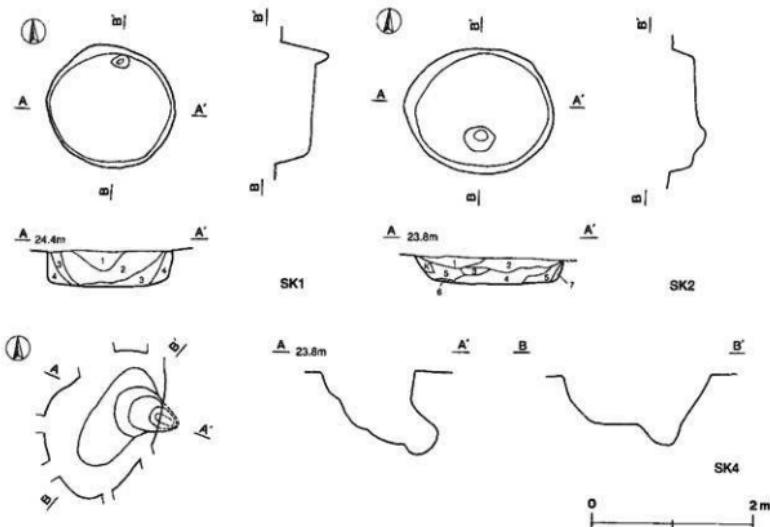
第1号火葬墓出土遺物觀察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	断上	色調	焼成	手法の特徴	高さ位置	備考
18	須恵器	杯	[14.4]	(4.0)	-	長石	浅黄	普通	ロクロナデ	覆土下層	10%
19	須恵器	鉢	31.8	19.1	[18.6]	雲母-長石	褐灰黄	普通	円筒的形器體で底盤は空洞の平底、内面は磨出	覆土上層	40% PL13
20	土器等	甕	21.8	33.8	7.9	長石-石英-雲母	にぶい棕	普通	口部蓋板ナデ、底部外曲へテ脚(後へラ金き)内面ハラナデ	覆土下層	70% PL13

3 その他の遺構

ここでは、時期及び性格が不明な3基の土坑について一覗表で紹介し、あわせて実測図と土層解説を記載する。

土坑（第35図）



第35図 土坑実測図

第1号土坑土層解説

- 1 出色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

- 3 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック少量

第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ロームブロック微量
3 黑褐色 ロームブロック微量
4 黑褐色 ロームブロック少量

- 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
6 黑褐色 ローム粒子少
7 暗褐色 ロームブロック微量

第4号土坑土層解説

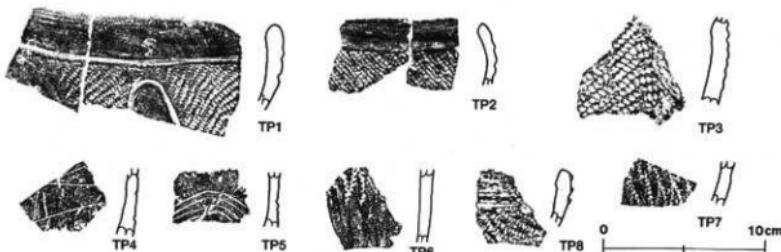
擾乱が著しかったため、土層は記録できなかった。

表6 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
1	C 5 a5	—	円形	1.58×1.50	60	外傾	平坦	自然	土舞器、顎器	
2	C 5 g6	N-83°-W	橢円形	1.87×1.54	45	外傾	平坦	人為	土舞器	
4	C 6 h9	—	不整円形	1.58×1.50	103	外傾	凸凹	不明	土舞器	

4 遺構外出土遺物

当遺跡から出土した遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び出土遺物観察表で記載する。



第36図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	—	(5.4)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	L1右部直下に沈縫を含むし、R1単縫 縄文を沈縫区画内の範囲に施文	調査区西部	中期後業 PL14
TP2	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	R1右部は輪状の無文帶を微隆帯で区画、 L1単縫縄文を横方向に施文	調査区西部	中期後業 PL14
TP3	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	R1単縫縄文を縱方向に施文	調査区西部	中期後業 PL14
TP4	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	疊なる沈縫による施文	調査区西部	後期前業 PL14
TP5	縄文土器	深鉢	—	(3.2)	—	長石・石英・雲母	にぶい豊	普通	平行な沈縫による施文	調査区西部	後期前業 PL14
TP6	縄文土器	深鉢	—	(4.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	目打縫文を施文	調査区中央部	前期後業 PL14
TP7	縄文土器	深鉢	—	(2.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	貝殻復縫文を施文	調査区中央部	前期後業 PL14
TP8	縄文土器	深鉢	—	(3.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい豊	普通	L1右部直下に沈縫が沿う、R1単縫縄文 を縦方向に施文	調査区東部	中期後業 PL14

第4節 まとめ

今回の調査によって、当遺跡からは古墳時代の竪穴住居跡4軒、平安時代の火葬墓1基、時期及び性格不明の土坑3基が検出された。また、縄文時代と古墳時代の遺物が遺構外から出土している。

ここでは、それぞれの時期ごとに遺構と遺物について概要を述べ、まとめとしたい。

縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文土器片（前期後業、中期後業、後期前業）が80点余り採集されている。今回調査の行われた手接遺跡は、桂川に注ぐ支流によって開析された台地の縁辺部に位置し、比較的水場にも恵まれていることを考えると、当遺跡周辺に居住の場があった可能性が高い。

古墳時代の遺構は住居跡4軒（6世紀中葉2、6世紀後葉1、不明1）が、調査区のほぼ中央部から北東部

にかけて確認されている。6世紀中葉の第2・3号住居跡は、いずれも東庭であり、竈の構築材もロームに砂質粘土を少量混ぜるだけの比較的簡単なものであった。それに対して6世紀後葉である第1号住居跡は北庭で、竈の構築材に砂質粘土にロームと小砂利を少量混ぜ、堅牢に作られていた。また、この第1号住居跡では、竈手前の覆土下層から出土した壺の体部外面に砥石転用痕が幾筋も確認できた。調査区が台地の縁辺部であることから、集落の中心は調査区北部に広がっている可能性が考えられる。

平安時代の遺構は、火葬墓1基（9世紀中葉）が調査区の西部で検出されている。骨蔵器の器種構成は、耕作によって火葬墓の上部が搅乱を受けて、鉢の底部が欠損し、壺の上部に須恵器环片が混入して出土しているために推測の域を出ない部分がある。しかし、骨蔵器として使用された土師器壺の口径と須恵器环の口径が大きく異なり、壺を塞ぐ蓋代わりにはなり得ないこと、近隣の土浦市八幡脇遺跡1号火葬墓や同じく土浦市手野町出土骨蔵器-2¹⁾の出土例などから判断すると、当遺跡の火葬墓は、土師器壺を骨蔵器として須恵器鉢を被せて蓋にし、その上に須恵器环が乗せられていたものと考えられる。

今回、発掘調査が行われたのは手接遺跡全体の一部分である。遺跡はさらに台地上の北方及び谷津にかけての南方に広がっており、谷を挟んで隣接する花房遺跡とともに大規模な集落が展開されていた可能性も考えられる。今後、手接遺跡の発掘調査が実施される際には、この調査報告が生かされれば幸いである。最後に平成14年度から発掘現場や整理作業で御指導・ご助言を賜った方々、実際に発掘及び整理作業に当たられた補助員の方々に改めて感謝の意を表したい。

註

- 1) 吉澤一悟「茨城県における古代火葬墓の地域性－土浦市立博物館保管の骨蔵器の資料紹介及び県内事例の集成から－」『土浦市立博物館紀要』第6号 土浦市立博物館 1995年3月

参考文献

- ・石野博信「日本原始・古代住居の研究」 吉川弘文館 1990年3月
- ・桜村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2号 茨城県教育財團 1993年7月
- ・福田義弘「熊の山遺跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財整理報告書』『茨城県教育財團 文化財調査報告』第190集 茨城県教育財團 2002年3月

第5章 花房遺跡

第1節 遺跡の概要

花房遺跡は、茨城県猿島郡阿見町大字吉原字馬立1633番地ほかに所在し、牛久市と接する阿見町南東部、桂川に注ぐ支流の左岸、標高24m前後の台地上に位置している。調査面積は6.109haで、調査前の現況は畠地及び山林である。

花房遺跡は、縄文時代から平安時代までの複合遺跡で、今回の調査によって検出された遺構は、弥生時代後期の堅穴住居跡2軒、古墳時代中期の堅穴住居跡3軒、奈良・平安時代の堅穴住居跡14軒、平安時代の大葬墓1基、土坑2基である。また、時期が特定できない溝跡1条、土坑34基、不明遺構1基も調査されている。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で15箱分が出土した。主な出土遺物は、縄文土器片、弥生土器(広口壺・手握土器)、土師器(高壺・高台付壺・高台付皿・器台・壺・鉢・甕・小形甕)、須恵器(壺・高台付壺・高盤・鉢・甕・瓶)、墨書き器、灰釉陶器(短頸甕・高台付椀・水瓶)、上製品(支脚・紡錘車)、石製品(勾玉・管玉)、石器(打製石斧・砥石・碧玉剥片)、金属製品(刀子・釘)などである。

第2節 基本層序

調査区西側のB1c2区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は24.3mで、地表から約2.5mほど掘り下げ、第37図のような堆積状況を確認した。テストピット付近は、北東方向から南西方向の筆境に沿ってトレンチャーで耕作されており、テストピット上層は擾乱を受けている。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層 ローム粒子を中量含む厚さ40cm前後の暗褐色の表土層で、粘性、しまりとも普通である。

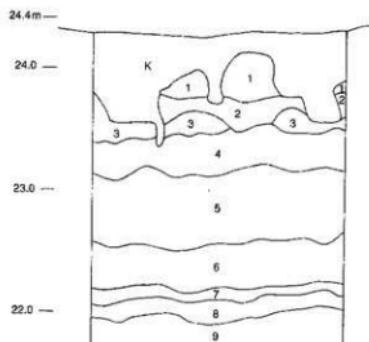
第2層 第1層よりもやや明るくロームブロックを少
量含み、厚さ10~24cmの褐色のローム層への漸移層であ
り、粘性は普通であるが、ややしまりが強い。

第3層 明褐色のソフトローム層である。この層は、
堆積上部が波うっているため厚さは一定していない。粘
性は普通であるが、しまりがやや強い。

第4層 黒色粒子と赤色粒子を少量含む厚さ23~34cm
の褐色のハードローム層で、粘性はやや強く、しまりは
強い。

第5層 第4層よりも若干明るい褐色のハードローム
層である。黒色粒子と赤色粒子、白色粒子をそれぞれ微
量含み、厚さは48~60cmで、粘性、しまりともにやや強
い。

第6層 黒色粒子を微量含む褐色のハードローム層で、第37図 基本土層図

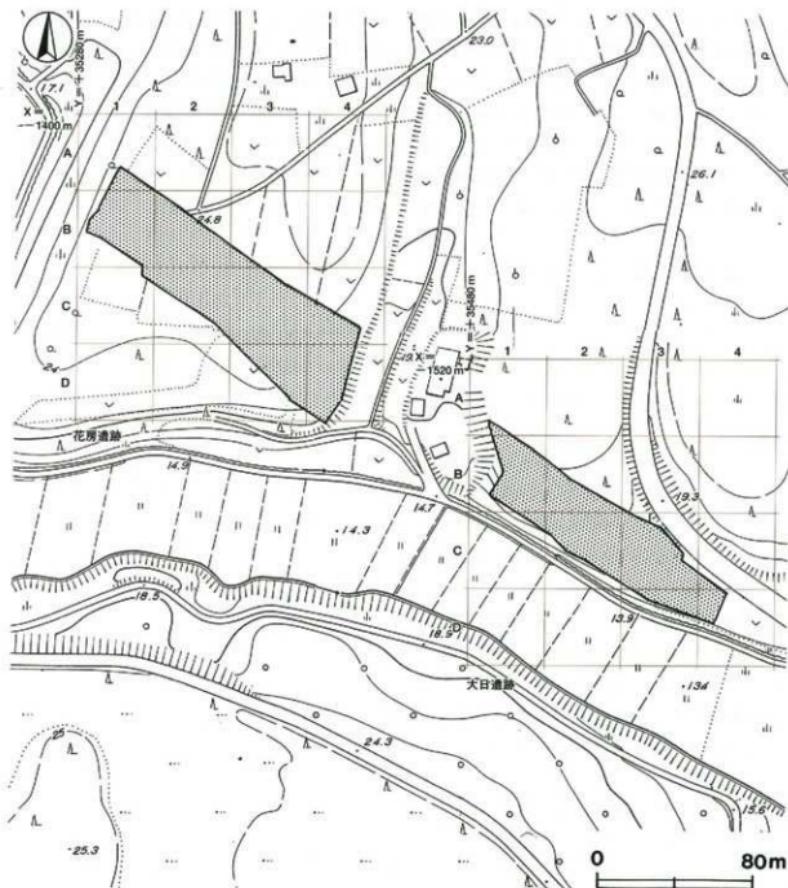


厚さは28~38cmであり、粘性、しまりともに強い。

第7層 赤色粒子を微量含む淡い褐色のハードローム層で、厚さ8~14cmであり、粘性、しまりともに強い。この層は、同時に粘土粒子も極めて少量ではあるが含まれるので常総粘土層の漸移層と考えられる。

第8層 赤色粒子を少量含むと同時に、鉄分を含んだ明褐色の粘土層である。厚さは12~20cmで、硬く締まっている。第7層よりも粘土の含有量が多いことから常総粘土層と考えられる。

第9層 鉄分が酸化した粒子を中量含んだオリーブ黄色の粘土層で、層厚は未掘のため確認できなかった。遺構は、時代により異なるが第2層及び第3層上面から確認された。



第38図 花房遺跡・大日遺跡調査区設定図

第3節 遺構と遺物

1 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は竪穴住居跡2軒が確認され、いずれも調査区の北西部に位置している。出土した遺物から2軒とも時期は弥生時代後期と思われる。以下、確認された遺構と主な遺物について記載する。

竪穴住居跡

第3号住居跡（第39・40図）

位置 調査区北西部のBla0区に位置し、台地縁辺部の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸5.90m、短軸4.80mの長方形で、主軸方向はN-46°-Wである。壁高は36cmほどで、やや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部と出入り口ピット付近がよく踏み固められている。また、住居跡北側と西側コーナー付近も硬く締まっている。

炉 中央部に1か所確認された。長径75cm、短径60cmの楕円形の地床炉で、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめて使用しており、炉床面は凸凹で、被熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量

2 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子微量

ピット 17か所検出された。P1-P4は深さ41~87cmであり、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ17cmで、南東壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6とP9は深さ32~40cmで、P1・P4間に横並びで位置し、ほぼ軸線も同じであることから補助柱穴の可能性が考えられる。また、P7は深さ17cmで、P1とP2の中間に、P8は深さ22cmで、P3とP4の中間に互いに相対する形で位置することから補助柱穴の可能性が考えられる。P10-P17は深さ14~36cmで、性格は不明である。

覆土 4層に分層される。ロームブロックや焼土ブロック、炭化物などを含んでいる人為堆積である。

土層解説

1 黒色 ロームブロック・焼土ブロック、炭化粒子微量

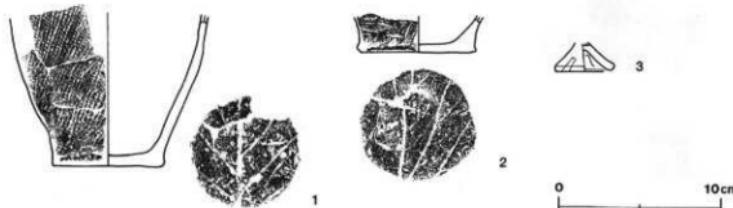
3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子、炭化物微量

2 褐色 ロームブロック中量

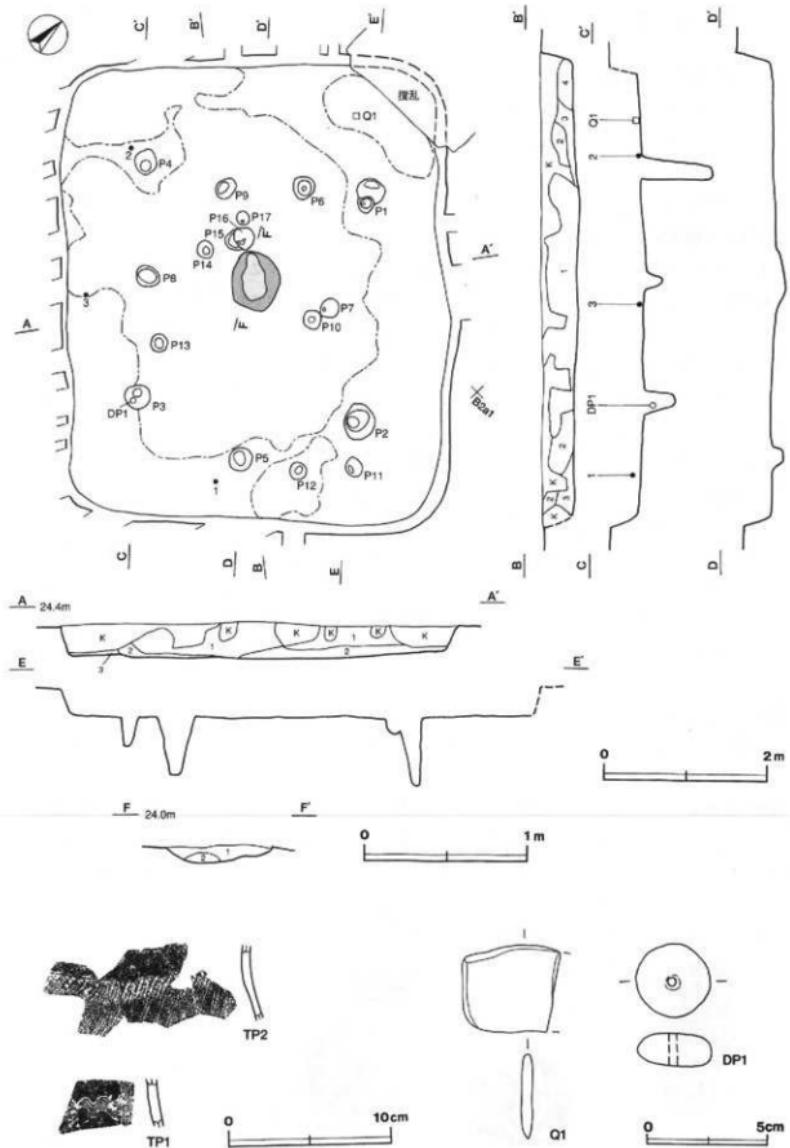
4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片76点（壺類）の他に、耕作機械による搅乱のため混入したと考えられる繩文土器片1点、土師器片70点（壺類21、甕類49）、須恵器片3点（壺類）が出土している。南西部は耕作機械による縱横の搅乱を受けている。3は南西壁中央部の壁際から、Q1は北部コーナーから付近からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期と考えられる。



第39図 第3号住居跡出土遺物実測表



第40図 第3号住居跡・出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
									附加条1種(附加2条)の模文模文。	附加条2種(附加2条)の模文模文。		
1	弥生土器	壺	-	(9.4)	6.6	長石・雲母	にぶい褐色	普通			覆土下層	33%
2	弥生土器	壺	-	(2.3)	7.0	長石・石英・雲母	桙	普通	附加条1種(附加2条)の模文模文。	附加条2種(附加2条)の模文模文。	覆土下層	5%
3	手探土器	高环カ	-	(1.8)	3.5	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	全面ナデ。指痕直		覆土下層	80%
TP1	弥生土器	壺	-	(2.9)	-	長石・雲母・赤色粒子	桙	普通	6本櫛面による板区画後、区画内に		覆土中	5%
TP2	弥生土器	壺	-	(4.8)	-	長石・雲母	灰褐色	普通	横走線状文模	附加条1種(附加2条)の模文模文。	覆土中	5%

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
							附加条1種(附加2条)の模文模文。	附加条2種(附加2条)の模文模文。		
DPI	鋸歯車	3.0	0.36	1.3	12.3	土製	全面ナデ		P 3 覆土上層	100%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
							附加条1種(附加2条)の模文模文。	附加条2種(附加2条)の模文模文。		
Q1	植木具	(4.1)	3.5	0.5	(13.1)	泥岩	断面の青い自然縫を加工し、刃部に両側からの研磨痕		覆土下層	PL28

第7号住居跡（第41～43図）

位置 調査区中央部の北側のB2 g4区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸6.16m、短軸5.23mの長方形で、主軸方向はN-56°-Wである。壁高は12～20cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であるが、中央部に向かって緩やかな傾斜を示している。炉跡を調べる位置と出入り口ピット付近が踏み固められている。

炉 中央部に1か所確認された。長径58cm、短径42cmの楕円形の地床炉で、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめて使用している。炉床面は凸凹で、被熱のため赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 にぶい赤褐色 楊土ブロック・炭化物少量
- 2 暗赤褐色 楊土ブロック中量、炭化物微量

3 暗赤褐色 楊土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量

ピット 8か所検出された。P 1～P 3は深さ16～51cmで、配置から主柱穴と考えられるが、北側の柱穴は検出されていない。P 4は深さ53cmで南東壁際のはば中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ37cmで、P 1に隣接していることから補助柱穴の可能性を考えられ、また、P 5・P 7・P 8は、深さ20～33cmで、性格は不明である。

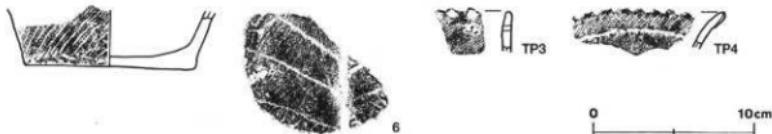
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積を示す自然堆積である。

土層解説

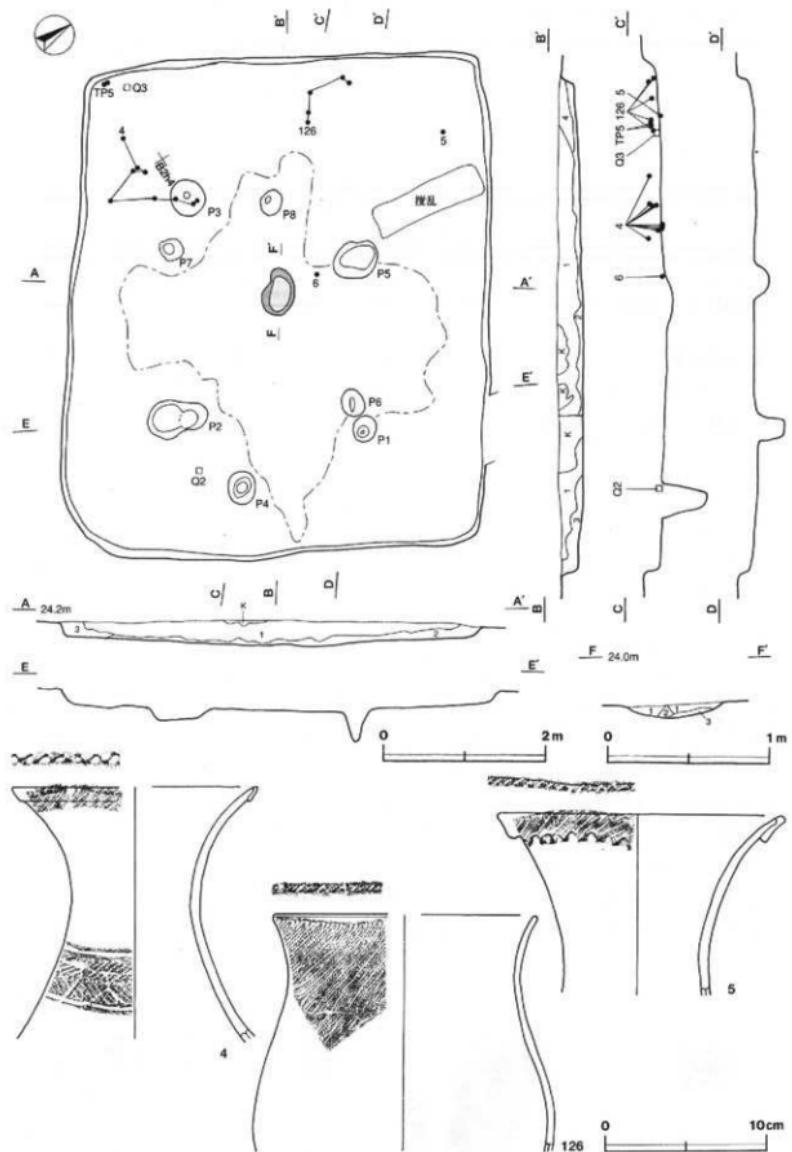
- 1 黒色 ロームブロック・楊土ブロック・炭化物粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量
- 4 黑褐色 ロームブロック少量、楊土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片182点（壺類）、石製品3点の他に、耕作機械による搅乱のため混入したと考えられる縄文土器片18点、土師器片113点（壺類18、甕類95）、須恵器片12点（壺類）が出土している。本跡南東部は耕作機械による搅乱の影響を受けている。5は北部コーナー近くの床面から正位の状態で出土している。

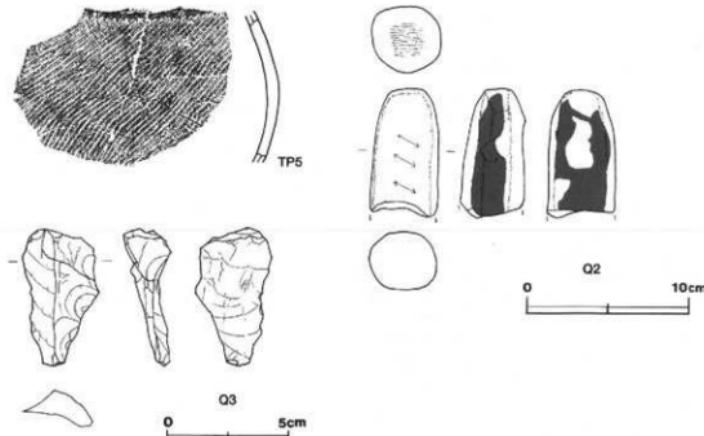
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期と考えられる。



第41図 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



第42図 第7号住居跡・出土遺物実測図



第43図 第7号住居跡出土上遺物実測図(2)

第7号住居跡出土上遺物観察表（第41～43図）

番号	種別	器種	LHF	高さ	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
4	弥生土器	壺	[152]	(157)	—	長石・石英・赤鉄	桙	普通 後部附加条1種(附加2条), 口邊部沉線区画 にぶい模	口邊部附加条1種(附加2条), 底付加条1種(附加2条), 口邊部下端ハラによく押付	覆土下層～床面	35% - 基本部 PL21
5	弥生土器	壺	17.5	(111)	—	長石・石英・雲母	にぶい模	普通 口付加条1種(附加2条), 口邊部下端ハラによく押付	口付加条1種(附加2条), 底付加条1種(附加2条), 口邊部下端ハラによく押付	床面	30% - 基本部 PL21
6	弥生土器	壺	—	(3.5)	10.4	長石・石英・雲母	にぶい模	普通 割振附加条1種(附加2条), 底部木葉板	口付加条1種(附加2条), 底部木葉板	床面	5%
125	弥生土器	壺	[162]	(146)	—	長石・雲母	黒糊	普通 口付加条1種(附加2条), 口邊部附加条1種(附加2条), 口付加条1種(附加2条), 底付加条1種(附加2条)	覆土下層	10%	
TP3	弥生土器	壺	—	(2.5)	—	長石・雲母	桙	普通 底底筋の穿孔	覆土中	5% PL28	
TP4	弥生土器	壺	—	(2.5)	—	長石・雲母	にぶい模	普通 口邊部附加条1種(附加2条), 1口付加条	覆土中	5% PL28	
TP5	弥生土器	壺	—	(9.4)	—	長石・石英・雲母	にぶい模	普通 底底筋無し, 制部附加条1種(附加2条)	覆土下層	10%	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	砂石	(8.0)	4.2	4.0	(18.9)	砂岩	端付着, 烧熱による剥離痕	床面	
Q3	削片	5.6	3.1	2.0	14.0	チャート	細長削片, 上部からの打撃による剥離	床面	PL28

2 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の堅穴住居跡は3軒確認され、調査区の北西部と南東部にそれぞれ位置している。主な遺物としては、土師器のほか、勾玉や管玉が出土している。

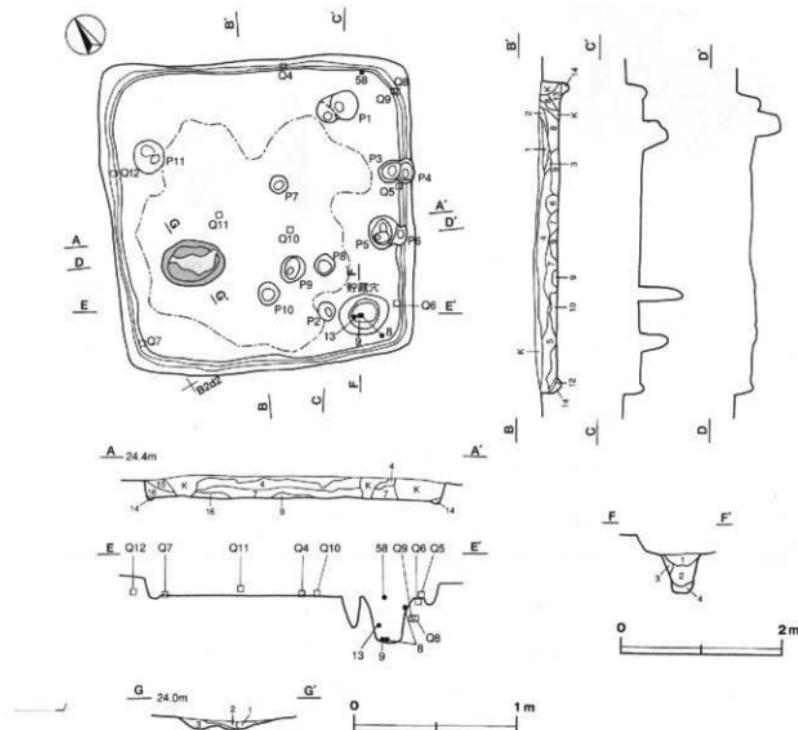
以下、確認された遺構と主な遺物について記載する。

堅穴住居跡

第4号住居跡（第44～46図）

位置 調査区北西部のB2 c2区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一边が3.80mほどの方形で、主軸方向はN-29°-Eである。壁高は18cmほどで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がっている。



第44図 第4号住居跡塞測図

床 ほぼ平坦であり、特に出入り口ピット付近から中央部にかけて踏み固められている。

炉 西側コーナー付近に1か所検出された。長径74cm、短径56cmの楕円形の地床炉で、床面を7cmほど皿状に掘りくぼめて使用している。炉床面は凸凹で、被熱のため赤変硬化している。

伊士慶解說

- 1 桁暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 3 にぶい赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック
2 明赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少、ロームブロック微量

ピット 11か所検出された。P1・P2は深さ30~34cmで、配置から主柱穴と考えられるが、その他の対応する柱穴は検出されていない。P3~P6は、深さ22~30cmで、南東壁に対してP3・P4とP5・P6はそれぞれ並列していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7~P11は深さ22~54cmであるが、性格は不明である。床面を精査したが対応するピットは確認されなかった。

貯藏室 東コーナー部に付設されている。長径60cm、短径46cmでの楕円形で、深さは52cmである。

陰虛穴+腎經

- | | | | | |
|-------|------------------------|-----|---|-----------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量 | 3 塗 | 色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 | 4 塗 | 色 | ローム鉢子中量 |

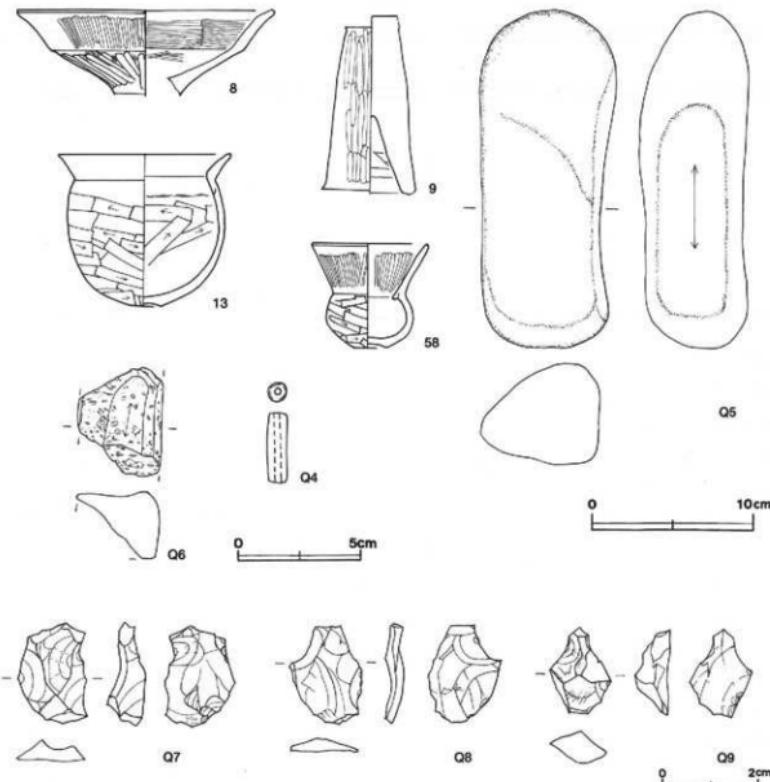
覆土 16層に分層される。ロームブロックや焼土粒子粒子、炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示して
いる人為堆積である。

土層解説

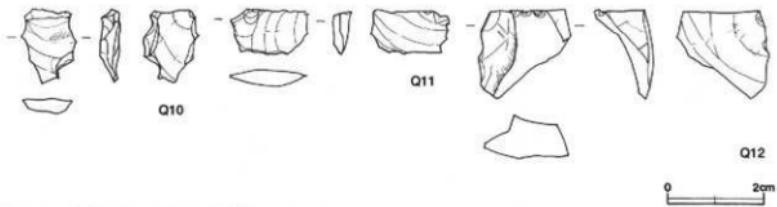
- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-------------------------|
| 1 桂暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量・炭化粒子微量 |
| 4 黑褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 細褐色 | 焼土粒子中量・ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量・焼土粒子微量 | 13 褐色 | ロームブロック中量・炭化粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子微量 | 14 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 7 褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 褐色 | ロームブロック中量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 8 黑褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 16 暗褐色 | ロームブロック中量・焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片166点(壺類26、甕類126、壠1、高环13.)、石製品9点(管玉1、砥石2、剥片6)の他に、混入したと考えられる繩文土器片7点、弥生土器片16点、須恵器3点が出土している。58は東側コ一
ナー部の壁際から、13は貯蔵穴からそれぞれ出土している。また、Q4は、北東壁側中央部付近の壁溝内から
出土している。

所見 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第45図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第46図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)

第4号住居跡出土遺物観察表 (第45・46図)

番号	種別	器種	L径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	土器器	高环	15.8	(3.3)	-	貝石・雲母	にぶい黄橙	普通	环部前面ハケ目焼割後ヘラナダ。 口辺部内・外側へラ削き	貯藏穴	40% PL22
9	土器器	高环	-	(11.2)	-	貝石・雲母・赤色粒子	橙	普通	部外側へラ削り後ヘラ削き	貯藏穴	20%
58	土器器	壺	7.2	6.5	1.9	長石・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内外曲面へラ削き、底部外側へラ削り後 ヘラナダ、内面ヘラナダ	覆土下層	100% PL21
13	土器器	小形壺	10.8	9.4	2.0	長石・石英・雲母	橙	普通	口辺部横ナダ、底部外側へラ削り後 ヘラナダ、内面ヘラナダ	貯藏穴	100% PL21
番号	器種	長さ	往	孔径	重量	材質			特徴	出土位置	備考
Q4	管玉	2.8	0.8	0.3	3.3	鈍棱岩	両端からの穿孔			埋没	PL28
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質			特徴	出土位置	備考
Q5	砾石	20.8	8.6	6.8	1931.4	安山岩	灰面1面			覆土下層	
Q6	砾石	(4.6)	3.5	2.7	(4.8)	輝石	灰面1面			床面	
Q7	調片	1.5	2.1	0.7	1.3	碧玉	縱長調片。上部に後剥離面打面、表面に剥離痕			床面	PL28
Q8	調片	1.5	2.0	0.6	0.7	碧玉	縦長調片。両面に剥離面を含む			覆土下層	PL28
Q9	調片	1.8	1.3	0.7	0.8	碧玉	縦長調片。上部・底面に自然面の打面、表面に微細な剥離痕			覆土下層	
Q10	調片	1.5	1.1	0.4	0.5	碧玉	縦長調片。上部に平坦な打面、右側面に微細な剥離痕、左側面取り除き			覆土下層	
Q11	調片	1.6	0.9	0.4	0.4	グリーンタフ	縦長調片。調整調節によるものか			覆土下層	
Q12	調片	2.3	1.8	1.1	1.7	グリーンタフ	縦長調片。上部に单剥離打面、主要剥離面に剥離痕			覆土下層	PL28

第5号住居跡 (第47・48図)

位置 調査区北西部のB22区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一辺が3.50mほどの方形で、主軸方向はN-4°-Eである。壁高は22~26cmほどで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦であり、特に南東側の貯藏穴ピット付近から中央部にかけて踏み固められている。

炉 中央部西側に1か所検出された。長径48cm、短径44cmの梢円形の地床炉で、床面を6cmほど皿状に掘りくぼめて使用している。炉床面は被熱のため赤変硬化している。

炉土層解説

1. 暗赤褐色 地土ブロック中量、炭化物少量、ロームブロック微量 2. 暗暗赤褐色 地土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

ピット 7か所検出された。P1~P4は深さ10~42cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ38cmで東側壁際のはば中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ20~28cmであるが、性格は不明である。

貯藏穴 南東コーナー部に付設されている。直径70cmほどの円形で、深さは44cmほどである。

貯藏穴土層解説

1. 黒褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量 3. 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2. 黑褐色 ロームブロック少量、燒土ブロック、炭化物微量

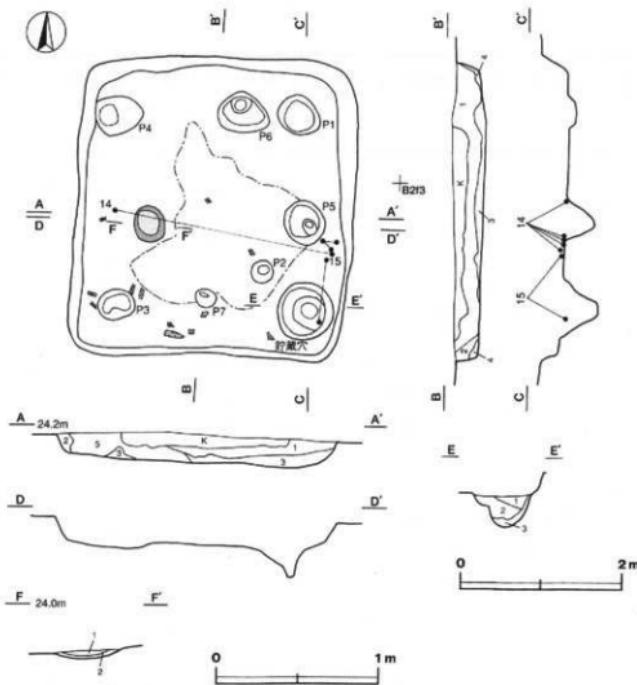
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示しているが、ロームブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説

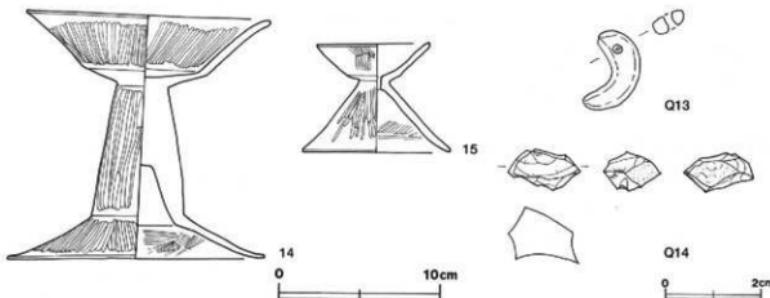
- | | |
|------------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 桃土ブロック・炭化物中量、焼土粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 墓褐色 ロームブロック微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量、焼土ブロック微量 | |

遺物出土状況 土師器片297点（坏類110、甕類187）、石製品2点（勾玉1、剥片1）の他に、流れ込みと考えられる繩文土器片3点、弥生土器片44点が出土している。14は覆土下層の遺物が接合したものであるが、坏部から脚部は西側中央部の床面から出土している。また、15は南東側コーナー付近から出土した接合資料である。全体の床面から炭化材や焼土塊が散在した状態で検出され、火災に遭遇していると考えられる。また、第4号住居跡と同様に、1点ではあるが投棄と考えられる碧玉の剥片が出土している。

所見 本跡は、覆土中に焼土ブロックや粒子・炭化物を含まないことや床面などから多量の炭化材が検出されたことから、住居廃絶後の早い時期に焼失したもと思われる。時期は、出土遺物などから5世紀中葉と考えられる。



第47図 第5号住居跡実測図



第48図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	性成	手法の特徴	出土位置	備考
14	土器部	高杯	14.9	13.5	16.0	赤褐色・素面・非粘	に赤い赤褐色	普通	环底口近部横子手、环底・脚部・底部内、外沿ハケ口整形後へラ筋き	覆土下層～底面	60% PL21
15	土器部	器台	7.0	6.6	9.2	灰石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口沿部・体部外縁ハケ口整形後へラ筋き、内面摩擦調整不規則	覆土下層	100% PL21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q13	勾玉	1.6	1.2	0.3	0.8	蛇紋岩	C字形、全面丁寧な研磨	覆土中	PL28
Q14	滴片	0.9	1.5	1.2	0.9	碧玉	上部に複数側面打面	覆土中	-

第19号住居跡（第49図）

位置 調査区南東部のC 3 d6区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一边が5.25m前後の方形で、主軸方向はN-36°-Wである。壁高は35cmほどで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部が踏み固められており、壁溝は全周している。

竈 北西壁の中央部に付設されているが、耕作機械による搅乱のため袖材と思われる砂質粘土の散らばりと、火床面が残存するだけである。火床面の中央部には砂質粘土製の支脚が据えられていた。袖部は砂質粘土の散らばりから、床面と同じ高さの地山面に構築されていたと推定できる。また、火床面も袖部と同様に地山面を使用しており、被熱のため赤変しているが硬化はしていない。竈土層は確認されなかったが、住居跡覆土の第10層が相当する。

ピット 4か所検出された。P 1～P 4 は深さ31～50cmであり、配置から主柱穴と考えられる。出入り口施設の位置を考えて床面を精査したが確認できなかった。

覆土 13層からなる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

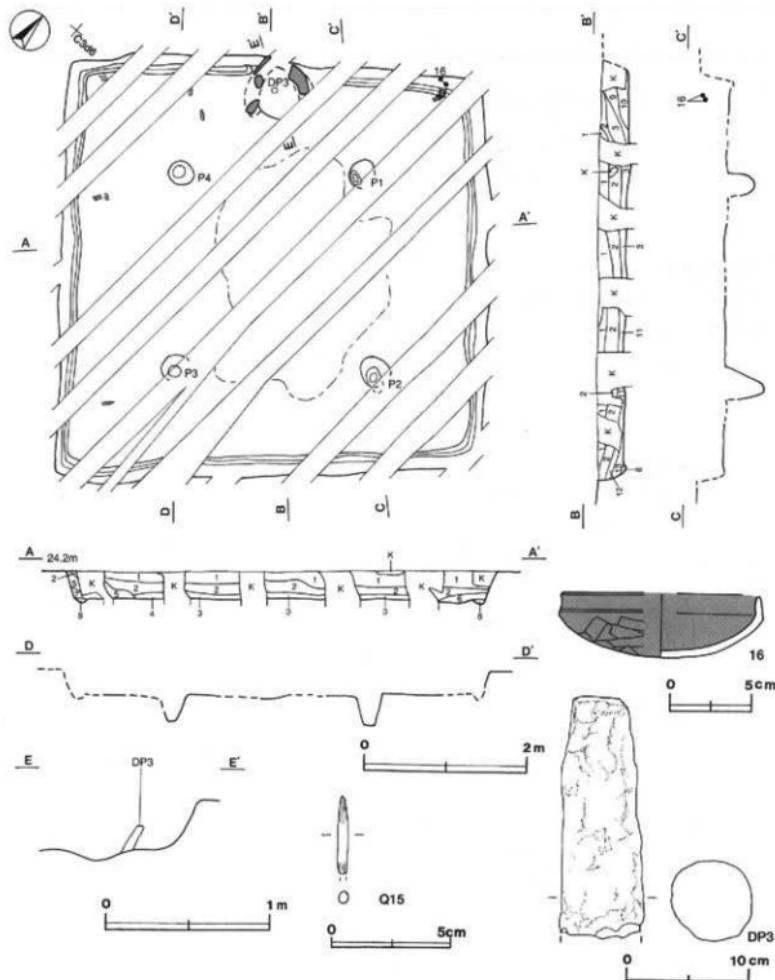
土層解説

1	褐 色	ローム粒子中量、燒土粒子微量	8	明 褐 色	ローム粒子中量
2	褐 色	ローム粒子中量、燒土粒子・炭化粒子微量	9	褐 色	ロームブロック・燒土ブロック少量、炭化粒子微量
3	灰 褐 色	ロームブロック少量、燒土ブロック・炭化粒子微量	10	暗赤褐色	燒土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
4	褐 色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	11	褐 色	ローム粒子・炭化物少量、燒土粒子微量
5	明 褐 色	ローム粒子多量、燒土粒子・炭化粒子微量	12	暗赤褐色	ロームブロック・燒土ブロック・炭化粒子少量
6	褐 色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	13	褐 色	ローム粒子中量、燒土ブロック・炭化粒子微量
7	褐 色	ローム粒子中量、燒土ブロック・炭化粒子微量			

遺物出土状況 本跡全体が耕作機械による搅乱の影響を受けて床面が壊されており、竈についても袖や煙道部

など若干の痕跡が確認されたにすぎない。遺物としては、土師器片178点（環頬12、甕頬166）、土製品1点（支脚）、石製品1点（不明）の他に、耕作機械の搅乱により混入したと考えられる縄文土器片3点、弥生土器片2点、須恵器片15点、陶器片1点が出土している。

所見 耕作による削平が激しいため時期を判定する遺物が少ないが、遺構の形態や出土土器から時期は6世紀後葉と考えられる。



第19号住居跡出土遺物観察表（第49図）

番号	種類	器種	口径	高さ	底径	加工	色調	地皮	手法の特徴	出土位置	備考
16	土師器	杯	[12.3]	3.9		赤色粒子	褐	帯邊	体部外側ヘラ削り、内面微ナデ	覆土中層	70%
<hr/>											
番号	器種	大きさ	径	高さ	底径	材質		特徴		出土位置	備考
DP3	支脚	(19.8)	7.2	74.25		土製		折頭脚、ナデ		竪穴床面	
<hr/>											
番号	器種	大きさ	径	高さ	底径	材質		特徴		出土位置	備考
Q15	不明	(4.6)	0.5	(4.6)	粘板岩		内邊部失る			覆土中	P1.28

3 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構は、調査区域の北東部を除くほぼ全城から竪穴住居跡14軒、火葬墓1基、土坑2基が確認された。以下、確認された遺構と主な遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第6号住居跡（第50・51図）

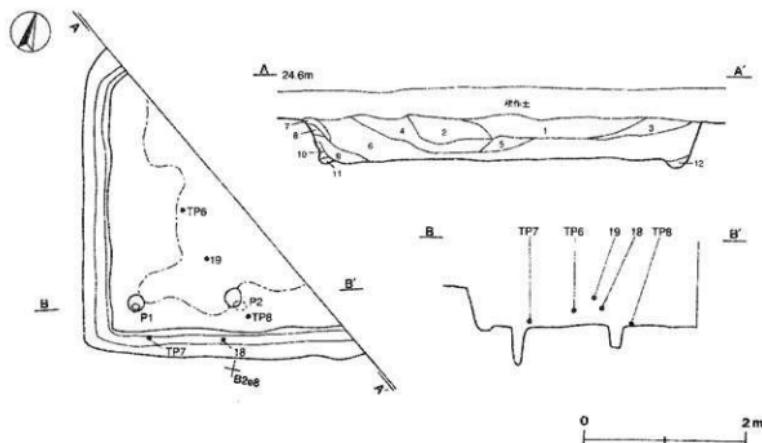
位置 調査区中央部北側のB2 d7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 北東側は調査区域外へ延びているため遺構全体の規模は確認できないが、南・西壁が確認されたことから、一辺が3.55mほどの方形または長方形と推定される。主軸方向はN-12°-Wであり、壁高は50cmほどで、確認された壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部南側から北側にかけてが硬く踏み固められ、埋溝が周回している。

竪 調査区域内では確認されなかったが、出土遺物の形態から竪をもつ住居跡であると推定される。

ピット 2か所検出された。P1は深さ46cmであり、規模や配置から主柱穴と考えられる。P2は深さ28cmであり、配設から出入り口施設に伴うピットと考えられる。



第50図 第6号住居跡実測図

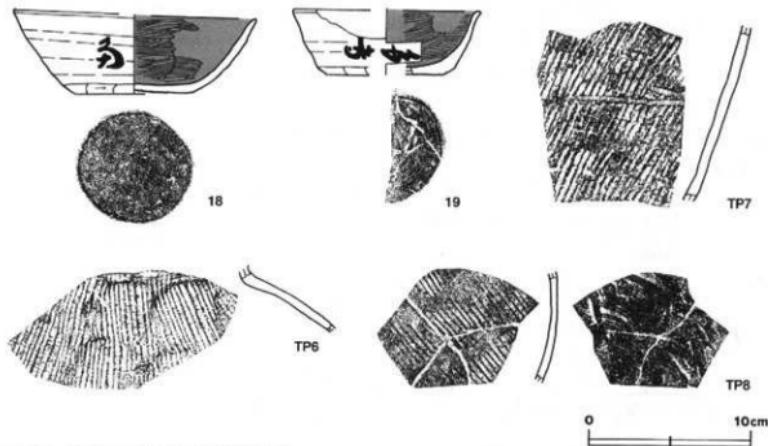
覆土 12層からなる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	7 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	10 褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	11 褐色	ロームブロック中量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	12 海色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片132点(坏類40、甕類92)、須恵器片40点(坏類8、甕類19、鉢13)の他に、流れ込みと考えられる弥生土器片7点が出土している。覆土中層から出土した18は「多」、19は「多寺」とそれぞれ墨書きされており、埋没段階で投棄されたものと考えられる。また、「多」・「多寺」と墨書き土器の存在は、当遺跡が村落内寺院が存在した可能性を示唆している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第51図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表（第51図）

番号	種 別	器 横	器 高	底 径	粘 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
18 土師器	坏	[148]	3.1	7.0	長石・石英・赤色粒子	褐	普通	底面削面へラ削り、側面へラ削り、底部手持らへラ削り、内面へラ磨き	覆土中層	60%須恵器 多 PL22・27
19 上師器	坏	[115]	4.0	7.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	底面削面へラ削り、側面へラ削り、底部手持らへラ削り、内面へラ磨き	覆土上層	30%須恵器 多 PL32
TP6 須恵器	甕	-	(4.1)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	良好	体部外面網格子の叩き後横板の沈殿、体部内面網格子の叩き	覆土中層	5%
TP7 須恵器	甕	-	(11.1)	-	長石・石英・雲母	灰	良好	体部外面網格子の叩き後横板の沈殿、体部内面網格子の叩き	覆土下層	5%
TP8 須恵器	甕	-	(7.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部外面網格子の平行叩き、体部内面同心内弧の叩き	未測	5%

第8号住居跡（第52・53図）

位置 調査区中央部西側のB2 j2区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一边が2.90mほどの方形で、主軸方向はN-21°-Wである。壁高は30cmほどで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部の南側から北側にかけて硬く踏み固められ、壁溝がほぼ全周している。

竈 北西壁のやや東寄りに付設されており、焚き口から煙道部まで70cmほどである。壁外への掘り込みは50cmほどで、袖部は遺存しておらず、竈右側の床面に砂質粘土の散らばりが確認できたことから右袖部の一部と考えられ、床面と同じ高さの面に砂質粘土で構築されているたと想定できる。火床部は、被熱の痕跡を確認することはできなかったが、袖部と同様に床面と同じ面を使用している。

竈土層解説

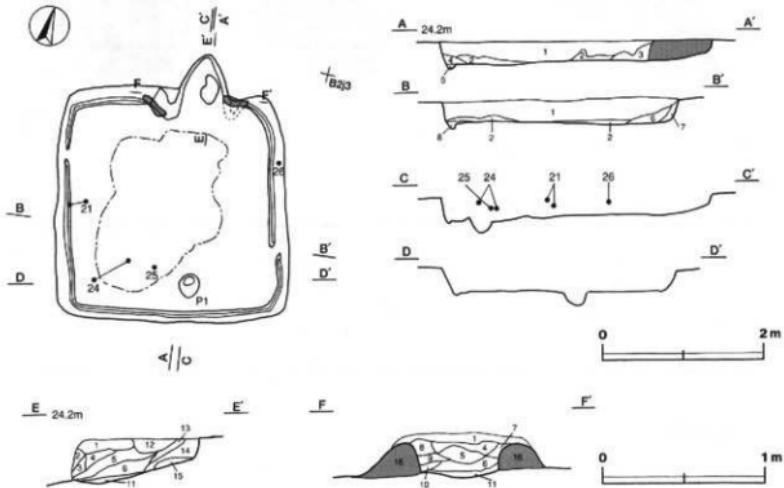
1	暗褐色	色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	ロック・炭化物微量
2	褐色	色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロ	焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロッ
			ク・炭化粒子微量	ク・炭化粒子微量
3	暗褐色	色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量、ロームブ
			土粒子・砂粒微量	ロック・炭化粒子微量
4	褐色	色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブ
			粘土粒子・砂粒微量	ロック・炭化粒子微量
5	にい赤褐色	色	焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量、ローム	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
			ブロック・炭化物微量	
6	暗褐色	色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロ	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
			ク・炭化粒子微量	
7	にい赤褐色	色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、焼土ブ
8	褐色	色	粘土粒子・砂粒微量、ロームブロック・焼土ブ	ロック・炭化物微量

ピット 1か所検出された。P1は深さ18cmであり、規模や配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。しかし、柱穴は確認できなかった。

覆土 8層からなる。レンズ状の堆積状況を示しているが、ロームブロックを含む人為堆積である。

土層解説

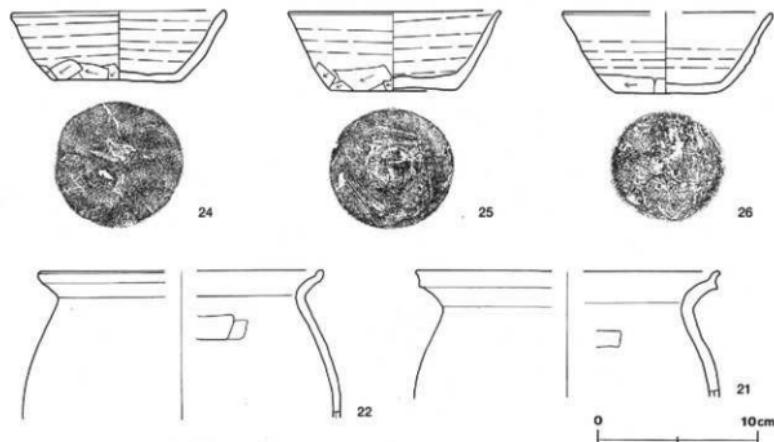
1	黒褐色	ロームブロック・炭化物・粘土ブロック少量、焼土粒	4	暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
		子微量	5	褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック少量、炭化物微量	6	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3	暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・	7	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
		炭化物微量	8	暗褐色	ロームブロック少量



第52図 第8号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片221点（坏類33、甕類188）、須恵器片36点（坏類24、甕類12）の他に、流れ込みと考えられる繩文土器片2点、弥生土器片21点が出土している。遺物のはとんどは覆土第1層から出土しており、埋没の最終段階で投棄されたものと思われる。24は南西コーナー寄り、25は南壁寄り、26は東壁際付近の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 本跡の時期を明確に決定づける遺物が床面から出土していないが、投棄された土器などから9世紀前葉以前と考えられる。



第53図 第6号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
24	須恵器	环	13.1	4.3	7.7	長石	にぶい黄	良好	底部内側ヘラ切り格多方向のヘラ削り、全体縁下端持らべツク削り	覆土中層	75% PL.22
25	須恵器	环	13.1	4.9	7.9	長石・石英・雲母	灰白	良好	底部内側ヘラ切り後多方向のヘラ削り、全体縁下端持らべツク削り	覆土中層	60% PL.22
26	須恵器	环	[13.0]	5.0	6.9	長石・石英・雲母	灰	普通	底部内側ヘラ切り後多方向のヘラ削り、全体縁下端持らべツク削り	覆土中層	60% PL.22
21	土師器	甕	[18.8]	(7.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部内側面積ナギ、全体外面ヘラ削り	覆土中層	5%
22	土師器	甕	[17.5]	(9.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口辺部内側面積ナギ、全体外面ヘラ削り 底へリナギ、全体外面ヘラ削り	覆土中層	5%

第9号住居跡（第54～56図）

位置 調査区中央部西側のC 2 a3区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 長軸3.71m、短軸3.26mの長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は64cmほどで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部の南側から北側にかけて硬く踏み固められ、壁溝がほぼ全周していいる。

竈 北東コーナー部と北壁中央部の2か所から確認された。北壁の竈は、当初から壁外への掘り込みは確認していたが、焚き口は床下にあり、北東コーナー部の竈の建て替え以前の竈である。竈1は、焚き口から煙道部まで125cmで、袖部は、踏み固められた床面上に暗褐色のロームを敷き、その上に粘土を詰めた甕を逆位に置いてから砂質粘土を貼り付けて構築されていた。右袖部の甕は特に強い被熱のため脆くなってしまっており、詰めた粘

土も被熱のため赤変している。左袖部の遺存状態は良くないが、袖部幅は120cmほどと推定できる。火床部は床面を16cmほど畳状に掘りくぼめて使用しており、被熱のため赤変しているが硬化部分は検出されなかった。壁外への掘り込みは35cmほどで、火床部から外傾して立ち上がっている。竈2は、床面の下から焼き口部などを確認することができ、焼き口から煙道部まで110cm、壁外への掘り込みは50cmほどであり、煙道は外傾して立ち上がっている。竈2は破棄されたため天井部は遺存していないが、左袖部は壁面と床面に構築材である砂質粘土の痕跡が確認され、右袖部の一部は竈1の左袖部として再利用されたと考えられる。

竈1 土層解説

1 にぶい赤褐色	焼上粒子少量、ローム粒子・炭化物微量	16 岩 褐 色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子・ローム粒子微量
2 にぶい赤褐色	焼上ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	17 岩 褐 色	粘土粒子・砂粒少量、焼上ブロック・ローム粒子微量
3 赤 褐 色	焼上粒子・粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック微量	18 にぶい赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子・砂粒少量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、焼土粒子・砂粒少量	19 にぶい赤褐色	焼土粒子・砂粒多量、焼土ブロック微量
5 にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量	20 岩 褐 色	焼土粒子中量、粘土粒子・砂粒微量
6 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	21 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量
7 墓 肉 色	焼上ブロック・焼上粒子・砂粒中量	22 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量
8 暗赤褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子・砂粒少量	23 岩 褐 色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、炭化粒子微量
9 墓 肉 色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量	24 岩 褐 色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量
10 にぶい赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量	25 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量
11 にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	26 暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・砂粒微量
12 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒少量、燒土粒子微量	27 岩 褐 色	粘土粒子・砂粒微量
13 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量		
14 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量		
15 墓 肉 色	焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量		

竈2 土層解説

1 褐 色	ローム粒子・焼上粒子・砂粒少量、焼上粒子微量	10 赤 褐 色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量
2 にぶい赤褐色	ロームブロック少量、焼上粒子・炭化粒子微量	11 墓 肉 色	ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
3 褐 色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土プロック微量	12 にぶい赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量
4 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	13 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量
5 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量、ローム粒子微量	14 岩 褐 色	焼上粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
6 墓 肉 色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量	15 にぶい赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
7 にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	16 墓 肉 色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
8 暗 褐 色	ローム粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	17 にぶい赤褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
9 暗 褐 色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子微量	18 墓 肉 色	ロームブロック中量、炭化物微量
10 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子微量	19 岩 褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
11 墓 肉 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	20 岩 褐 色	ロームブロック微量、炭化物微量

ピット2か所検出された。P1は深さ8cmであり、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は深さ8cmであるが性格は不明である。柱穴は確認できなかった。

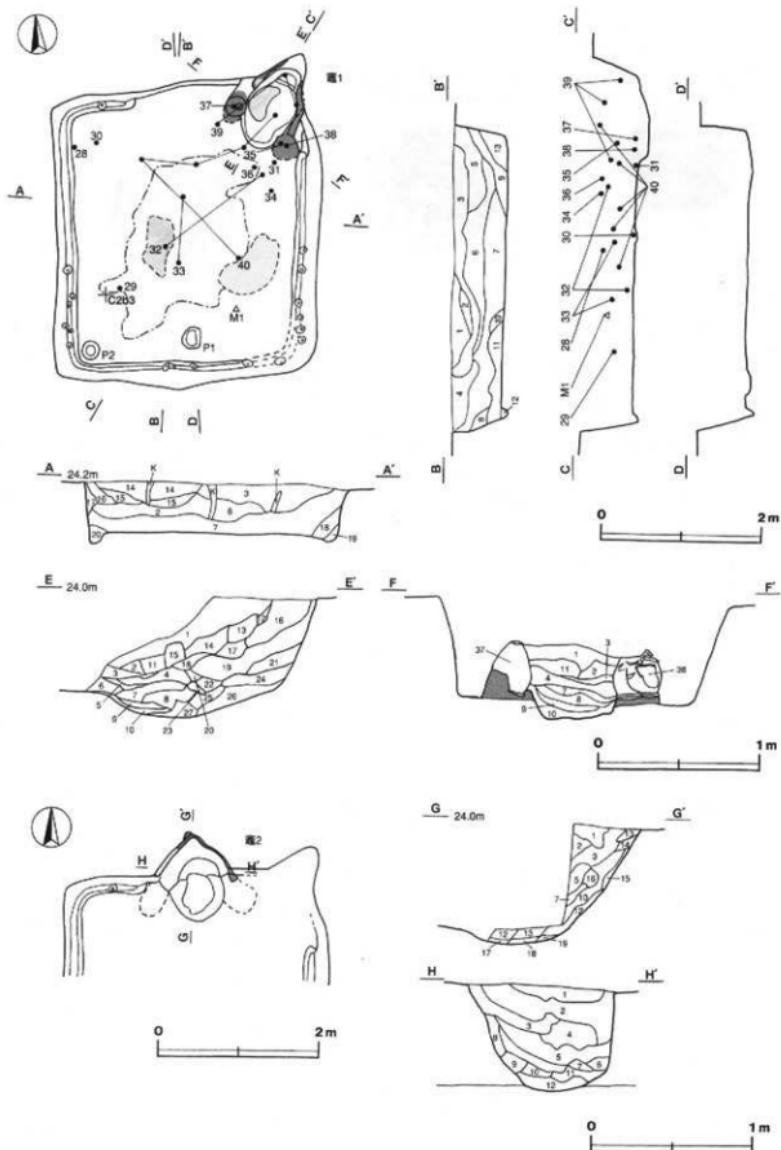
覆土 20層からなる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

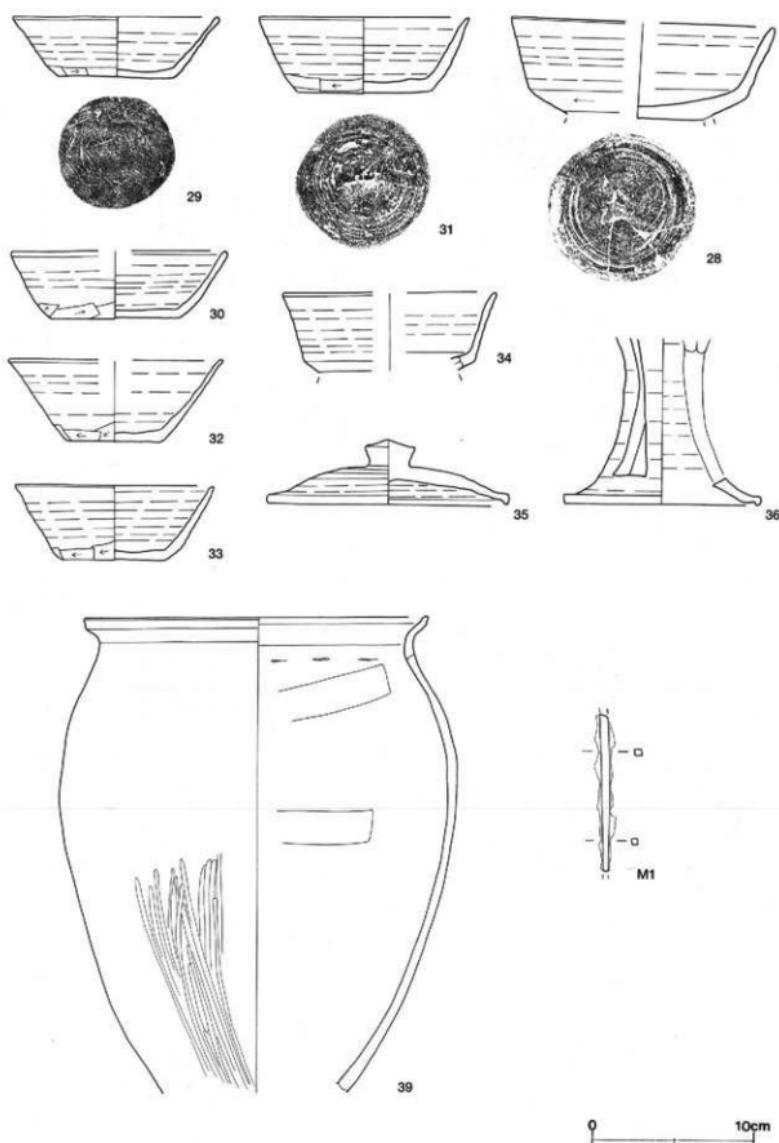
1 暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	12 墓 肉 色	ロームブロック少量
2 暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量	13 墓 肉 色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
3 黒 褐 色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	14 黒 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
4 砂 灰 色	ロームブロック少量、炭化物微量	15 黑 褐 色	ローム粒子・炭化粒子少量
5 灰 色	焼上粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	16 焼 灰 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
6 灰 色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	17 焼 灰 色	ロームブロック中量
7 黑 褐 色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	18 烧 灰 色	ロームブロック中量、炭化物微量
8 暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	19 烧 灰 色	ロームブロック少量、炭化物微量
9 暗 褐 色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子微量	20 烧 灰 色	ロームブロック微量、炭化物微量

遺物出土状況 上部器片691点(坏壊35、甕類656)、須恵器片113点(坏壊32、甕類79、蓋1、高盤1)、鉄製品1点(釣)が出上している。30は北西コーナー付近、31は竈前床面、35は北東コーナー付近からそれぞれ出土している。37・38は竈袖部の芯材として使われており、甕の内部には砂質粘土が詰め込まれていた。遺物の多くは、北東コーナー付近から中央部にかけた覆土中から出土しており、埋没の段階に集中して投棄されたと推察できる。また、隣接する第8号住居跡出土遺物と接合関係にある遺物28もあり、集落形成時期や住居廃絶時期からも興味深い。

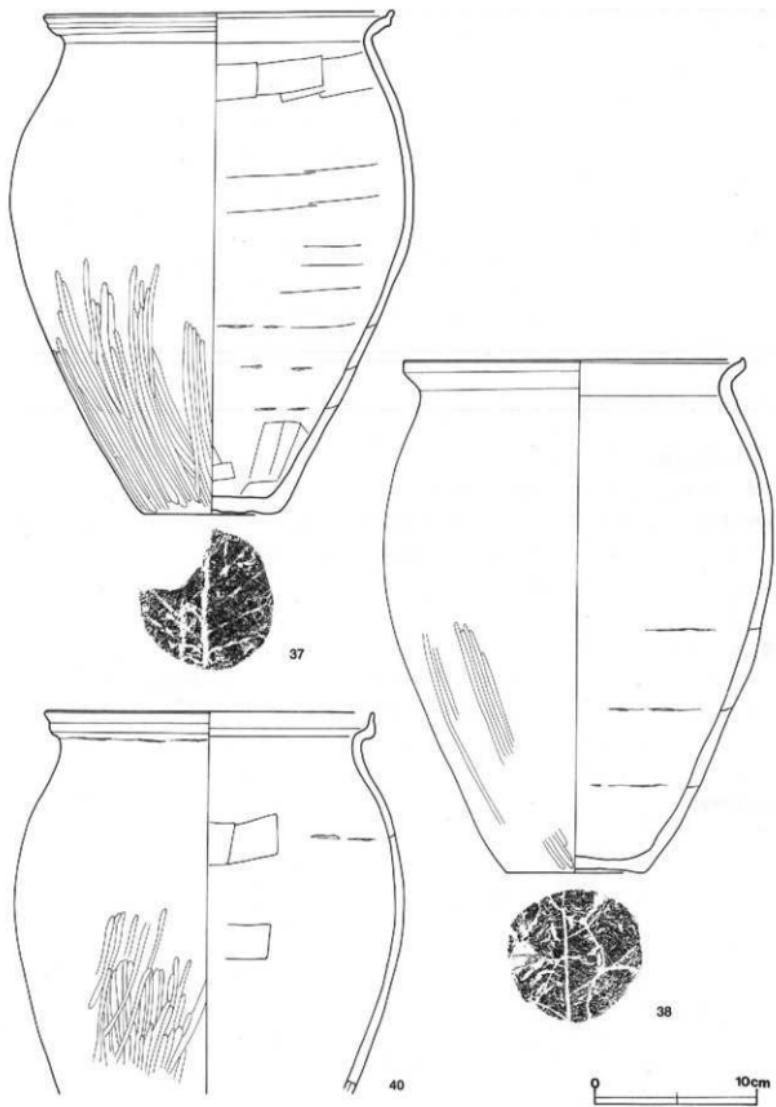
所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第54図 第9号住居跡実測図



第55図 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



第56図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

第9号住居跡出土遺物観察表（第55・56図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	下法の特徴	出土位置	備考
29	鍋窓器	耳	12.7	3.8	7.0	長石・石英・雲母	灰白	良好	直立時斜面へ切り落とし両側面のヘラ削り、	壁土下端	90% PL22
30	鍋窓器	耳	13.2	4.1	7.8	長石・石英	灰白	良好	直立時斜面へ切り落とし両側面のヘラ削り、	床面	70% PL22
31	鍋窓器	耳	13.0	4.6	8.0	長石・石英	灰	普通	底面同様へくら切り落とし軸へラ削り、	床面	70% PL22
32	鍋窓器	耳	13.2	3.0	6.0	長石・石英	灰白	普通	底面同様へくら切り落とし軸へラ削り、	壁土下端	40% PL22
33	鍋窓器	耳	12.8	4.6	6.6	長石・石英	灰白	普通	底面同様へくら切り落とし軸へラ削り、	壁土下端	80% PL22
28	製器器	高台付环	16.2	6.0	-	長石・石英・雲母	灰	良好	底部斜面へくら切り後直角彎り付け	壁土中層	90% PL22
34	燒窓器	高台付环	13.2	(1.7)	-	長石・石英	灰	普通	環状クロマ形、外部外側一部自然縫	壁土中層	20%
35	燒窓器	耳	14.9	3.9	-	長石・雲母	灰白	普通	天井部石回りのヘラ削り	壁土下端	80% PL22
36	燒窓器	高台	-	(10.9)	12.2	長石	灰	普通	底部クロマ底面へ方達かし、邊かし孔	壁土中層	30%
37	土師器	蓋	21.2	31.2	8.4	珪化物質等	灰	普通	底部斜面へくら削り後ヘラ削り、	床面	98% PL22
38	土師器	蓋	21.1	32.0	8.5	珪化物質等	灰	普通	底部斜面へくら削り後ヘラ削り、	床面	90% PL22
39	土師器	蓋	21.1	(28.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	内面ヘナダ、輪筋みれ、底面不整	壁土中層	80% PL22
40	土師器	蓋	20.2	(23.5)	-	長石・石英・雲母	綠	普通	底部斜面へくら削り後ヘラ削り、	壁土中層	60% PL22
香炉	器種	大きさ	幅	厚さ	高さ	材質	色	特徴	出土位置	備考	
M1	灯台	(9.7)	0.5	0.5	(13.0)	珪化物質	灰	頭部欠損、脚部先端欠損	壁土中層	PL22	

第10号住居跡（第57・58図）

位置 調査区中央部のC 2 c7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一辺が3.00mほどの方形で、主軸方向はN-11°-Wである。壁高は45cmほどで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上っている。また、竈の両側に砂質粘土を貼った棚状施設を有している。

床 ほぼ平坦である。中央部の南側から北側にかけて硬く踏み固められ、焼溝は東側と西側で一部確認されたが全周はしない。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで100cmである。袖部は遺存しておらず、付近の床面に甕材の一部と思われる粘土粒子・砂粒がわずかに確認されたことから、袖部は床面と同じ高さの地表面にに粘土で構築されていたと想定される。火床部は10cmほど皿状に掘りくぼめてから粘土を充填して使用しており、被熱のため赤変化している。また、壁外への掘り込みは75cmほどで、通道は火床部から外傾して緩やかに立ち上っている。

遺土層辨別

1	暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物質微量	12	暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物質子・粘土粒子・砂粒微量
2	黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物質微量	13	暗褐色	粘土粒子・焼土中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物質微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物質・粘土粒子・砂粒微量	14	にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック・炭化物質少量、ロームブロック微量
4	暗褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物質微量	15	暗褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化物質微量
5	黒褐色	ロームブロック・焼土中量、焼土粒子少量、炭化物質微量	16	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物質・粘土粒子・砂粒微量
6	暗褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物質微量	17	にぶい赤褐色	焼土粒子・中量、ロームブロック・炭化物質・粘土粒子・砂粒微量
7	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物質・粘土粒子・砂粒微量	18	暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物質・粘土粒子・砂粒微量
8	暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物質・粘土粒子・砂粒微量	19	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物質・粘土粒子・砂粒微量
9	暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物質微量	20	にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、コームブロック微量・炭化物質微量
10	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物質・粘土粒子・砂粒微量			
11	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック炭化物質微量			

棚状施設 北壁中央部の竈を中心として左右に設けられており、奥行40cm前後、幅100cm前後の長方形である。左右ともほぼ同じ大きさで、床面から35cmほどの高さで確認することができた。棚状施設の構築状況は、住居

の掘り込み後に棚状施設部分を掘り込み、覆土第25層に相当する砂質粘土を2cmほど壁全体と棚の掘り込み部分に貼り付け、その後、第24層に相当する砂質粘土をさらに6cmほど貼り付けたと考えられる。また、棚状施設の粘土材は砂粒が多く、砂粒の少ない窓材の粘土との違いが明確である。

ピット 床面や造構の外側を精査したが確認できなかった。

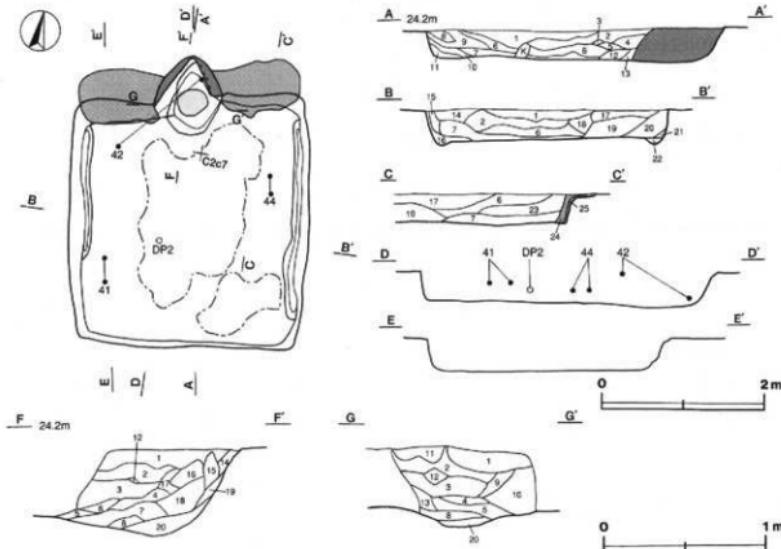
覆土 25層からなる。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

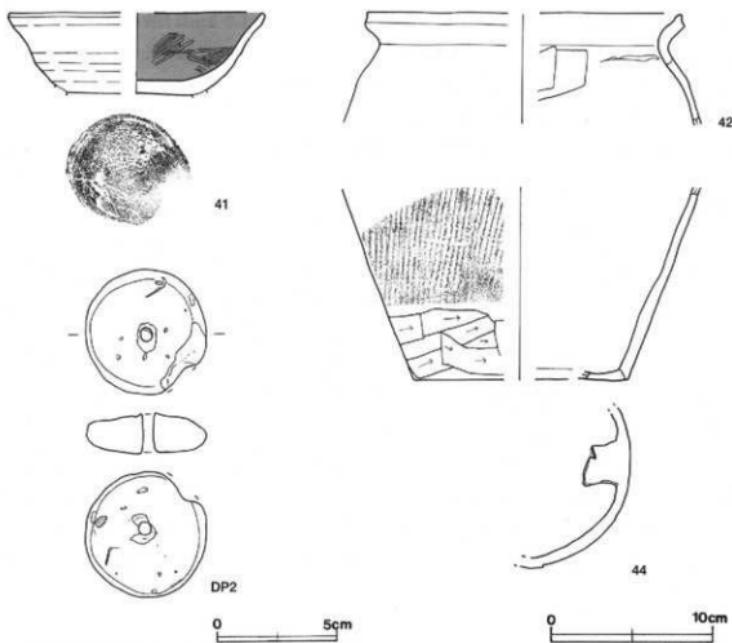
1	暗	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量		ブロック・炭化物微量		
2	黒	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	13	褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化物微量	
3	にぶい	黄褐色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・炭化粒子微量				
4	褐	褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	14	暗	褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
5	黒	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	15	褐	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
6	黒	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	16	褐	褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
7	暗	褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	17	暗	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
8	黒	褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物微量	18	暗	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
9	暗	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	19	褐	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
10	褐	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・砂粒微量	20	褐	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
11	褐	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	21	褐	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
12	暗	褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	22	褐	褐色	ロームブロック少量
				23	黑	褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化物微量
				24	黄	褐色	粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック微量
				25	褐	褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片209点(壺類29、甕類180)、須恵器片99点(壺類29、甕類70)、灰釉陶器片1点、土製品1点(紡錘車)、剥片1点の他に、混入したと考えられる縄文土器片3点、弥生土器片13点が出土している。

所見 本跡の時期を明確に決定づける遺物が床面から出土していないが、覆土中の出土遺物などから9世紀後半であると考えられる。



第57図 第10号住居跡実測図



第58図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
41	土師器	高台付环	[15.7]	(5.3)	-	雲母・赤色粒子	にぶい鈍	普通	底部回転へラ切り後高台貼り付け	覆土中層	30%
42	土師器	甕	[19.5]	(6.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい鈍	普通	[追加]外周縁付テ外部外周ナナ内面ヘラナラ縫隙A直	覆土上層	5%
44	須恵器	瓶	-	[11.0]	[13.4]	長石・石英・雲母	灰	普通	[追加]手取付テ底部外周ナナ内面ヘラナラ縫隙B直	覆土下層	20%
番号	器種	径	孔径	厚さ	重ね	材質	特徴			出土位置	備考
DP2	砂陣車	3.0	3.26	1.3	(43.0)	上質	肉面ナナ。一方向からの穿孔。	表面に刺突痕、表面に移痕		覆土下層	

第11号住居跡（第59～61図）

位置 調査区中央部のC 2 b6区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一辺が4.00mほどの方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は41~44cmで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がっている。また、竈の両側に砂質粘土を貼った棚状施設を有している。

床 ほぼ平坦である。中央部が硬く踏み固められ、壁溝は西側と南側の一部確認されたが全周はしない。

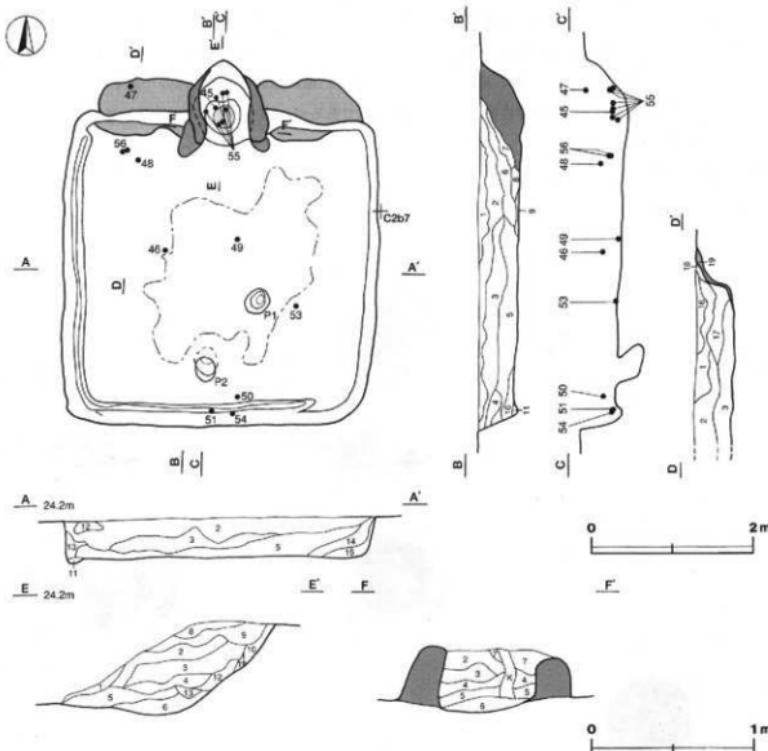
竈 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで115cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築され、袖部幅は100cmである。火床面も同様に地山面を使用されており、被熱のため赤変硬化している。天井部は崩落しており、土層断面中の第2層に粘土粒子や砂粒が多量に含まれていることから天

井部の崩落土にあたると考えられる。壁外への掘り込みは70cmほどで、中央部には土製の支脚が据えられており、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

竪土層解説

1 岩 色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	7 級 色	物少量、粘土粒子・砂粒微量
2 にい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック・炭化粒子微量	8 級 色	ロームブロック・焼土粒子・砂粒微量
3 暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子微量	9 級 色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量
4 暗赤褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	10 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量
5 暗褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	11 にい赤褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量
6 赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化	12 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量
		13 にい赤褐色	粘土粒子・砂粒・ローム粒子少量

棚状施設 北壁中央部の窓を中心として左右に設けられており、奥行45cm前後、幅110cm前後の長方形である。左右ともほぼ同じ大きさで、床面から50cmほどの高さで確認することができた。棚状施設の構築状況は、住居の掘り込み後に棚状施設部分を掘り込み、覆土第18層に相当する砂質粘土を6cmほど北壁全体と棚の掘り込み



第59図 第11号住居跡実測図

部分に貼り付け、その後、第17層に相当する砂質粘土をさらに6cmほど貼り付けたと考えられる。また、棚状施設の粘土材は砂粒が多く、砂粒の少ない竈材の粘土との違いが明確である。

ビット 2ヶ所、P2は深さ35cmで、位置・形状から出入口ビットに伴うビットと考えられる。P1の性格は不明である。

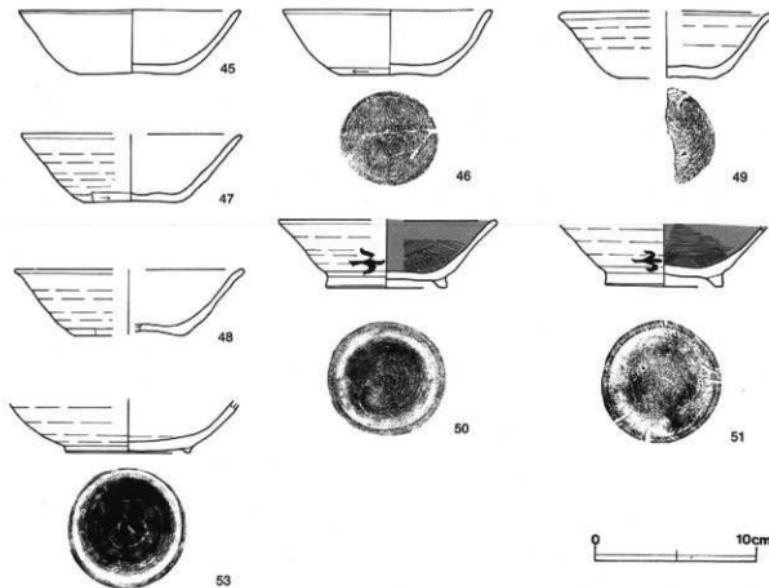
覆土 19層からなる。不規則なブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

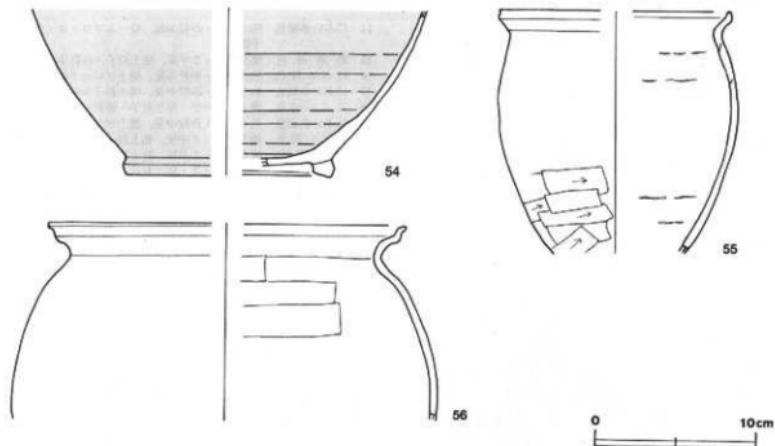
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	10 黒褐色	ローム粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	11 暗褐色	ロームブロック少量
3 黑褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量	12 黑褐色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化物、粘土粒子・砂粒微量	13 黑褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物微量	14 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
6 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック	15 黑褐色	ローム粒子多量、炭化物微量
7	タ・炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック・成土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
8 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
9 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	18 黄褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量
		19 黄褐色	粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック少量

遺物出土状況 土器器片364点（坏類155、甕類209）、須恵器片96点（坏類47、甕類48、蓋1）灰釉陶器片3点の他に、混入したと考えられる弥生土器片19点が出土している。45は、竈の覆土中層から逆位の状態で出土しており、住居廃絶の段階で意図的に廃棄されたものと考えられる。50・51は体部外面にそれぞれ「子」と墨書きされている。また、47は、甕西側の棚状施設から出土しており、棚状施設の使用状況の一端を示している。53（二川産）と54（猿投産）の灰釉陶器は他地域からの搬入品であるが、54（井ヶ谷78号窯式）は年代的に古く、混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第60図 第11号住居跡出土上遺物実測図(1)



第61図 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

第11号住居跡出土遺物観察表（第60・61図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
45	土師器	环	13.6	3.9	6.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部凹面へラ切り後、一方向のヘラ削り、 体部下端手持ちへラ削り	遺構上中層	98% PL23
46	土師器	环	12.9	4.0	6.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部凹面へラ切り後、斜面削へラ削り、 体部下端斜面削へラ削り	遺構下層	60% PL23
47	須恵器	环	[13.6]	4.3	6.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部凹面へラ切り後、斜面削へラ削り、 体部下端手持ちへラ削り	棚上	45%
48	土師器	环	[14.2]	4.3	[6.8]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部凹面へラ切り、体部下端手持ちへラ削り	遺構中層	35%
49	土師器	环	[13.2]	4.1	[5.6]	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄澄	普通	底部凹面切り、体部下端手持ちへラ削り	床面	35%
50	土師器	高台付环	[13.2]	4.1	7.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底部凹面切り後、高台貼り付け	遺構下層	75% 青青「子」 PL23, 27
51	土師器	高台付环	-	(3.9)	7.2	長石・石英・赤色粒子	浅黄澄	普通	底部凹面へラ切り後、高台貼り付け	遺構下層	50% 青青「子」 PL27
52	須恵器	高台付碗	-	(3.3)	7.7	長石・石英	にぶい黄澄	良好	底部凹面へラ切り後、高台貼り付け	床面	5% 二川カ PL26
54	灰陶器	壺	-	(10.4)	[12.5]	長石・石英・黄母	黄褐	良好	底部凹面へラ切り後、高台貼り付け、 底部斜面へラ切り後、高台貼り付け、 体部外側ロクロナメ	遺構下層	10% + 青青「子」 PL26
55	土師器	小形壺	[14.2]	(15.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外側下部へラ削り、体部前面上位 ナデ、内面ヘラナメ、輪積み底	遺構土中層	50% PL23
56	土師器	壺	[22.0]	(12.1)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口部内面、外面糊ナメ、体部外側、 内面へラナメ、輪積み底	遺構下層	10%

第12号住居跡（第62~64図）

位置 調査区中央部のB217区に位置し、台地の平坦部に立地している。

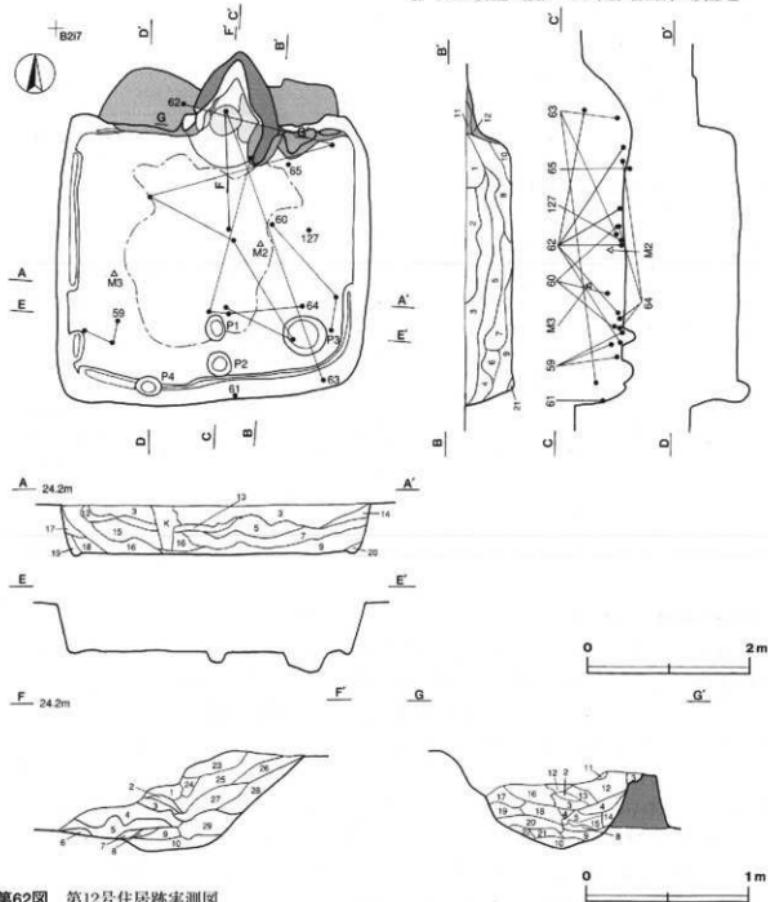
規模と形状 一辺が3.70m前後の方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁高は61cmほどで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がっている。また、竈の両側に砂質粘土を貼った棚状施設を有している。

床 ほぼ平坦である。中央部南側から竈付近にかけて硬く踏み固められており、壁溝は西側の一部と南側から南東コーナー付近まで確認されている。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで145cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。両袖部はわずかに遺存しており、袖部先端の床面に砂質粘土の痕跡が検出されている。火床面は地山面を13cmほど皿状に掘りくぼめて使用しており、被熱のため赤変硬化している。壁外への掘り込みは70cmほどで、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

電土層解説

- | | | | |
|-----------|--------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 にぶい赤褐色 | 焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量 | 14 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒少量・ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック少量・粘土粒子・砂粒微量 | 15 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量・粘土粒子・砂粒少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量・炭化粒子微量 | 16 にぶい橙色 | 粘土粒子・砂粒多量・焼土ブロック微量 |
| 4 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒多量・焼土粒子中量・炭化粒子微量 | 17 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒中量・焼土粒子少量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 | 18 にぶい橙色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量 |
| 6 にぶい橙色 | 粘土粒子・砂粒多量・焼土粒子微量 | 19 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒微量 |
| 7 暗褐色 | 粘土粒子・砂粒少量・焼土ブロック微量 | 20 にぶい橙色 | 焼土ブロック中量・粘土粒子・砂粒少量 |
| 8 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量・粘土粒子・砂粒少量 | 21 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量・粘土粒子・砂粒微量 |
| 9 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量 | 22 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 |
| 10 赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量 | 23 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒少量・ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 11 明褐色 | ローム粒子中量 | 24 にぶい橙色 | 粘土粒子・砂粒中量・焼土ブロック少量 |
| 12 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒中量・ローム粒子少量・焼土粒子微量 | 25 暗褐色 | 粘土粒子・砂粒中量・焼土粒子少量 |
| 13 灰褐色 | 粘土粒子・砂粒多量・焼土ブロック・炭化物微量 | 26 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量・粘土粒子・砂粒少量 |
| | | 27 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量・炭化物微量 |
| | | 28 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 |
| | | 29 にぶい赤褐色 | 焼土ブロック中量・粘土粒子・砂粒少量 |



第62図 第12号住居跡実測図

柵状施設 北壁中央部の竈を中心として左右に設けられており、東側部分は奥行50cm前後、幅80cm前後で、西側部分は奥行60cm前後、幅120cm前後である。大きさに違いはあるが両方ともほぼ長方形で、床面から60cmほどの高さで確認することができた。柵状施設の構成状況は、住居の掘り込みをした後に柵状施設部分を掘り込み、覆土第12層に相当する砂質粘土を6cmほど壁全体と柵の掘り込み部分に貼り付け、その後、第11層に相当する砂質粘土をさらに6cm前後貼り付けたと考えられる。また、柵状施設の粘土材は砂粒が多く、砂粒の少ない竈材の粘土との違いが明確である。

ピット 4か所検出された。P1は深さ17cmである。P2もほぼ同規模であり、双方とも配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3・P4は深さ18~27cmであるが、性格は不明である。柱穴の配列や位置を想定して床面や造構の外側を精査したが確認できなかった。

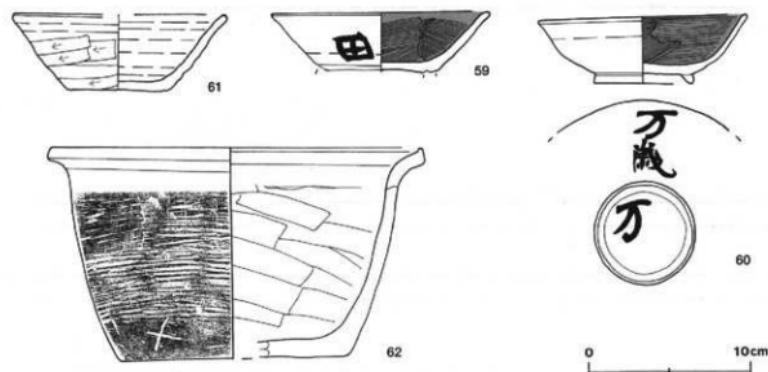
覆土 21層からなる。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

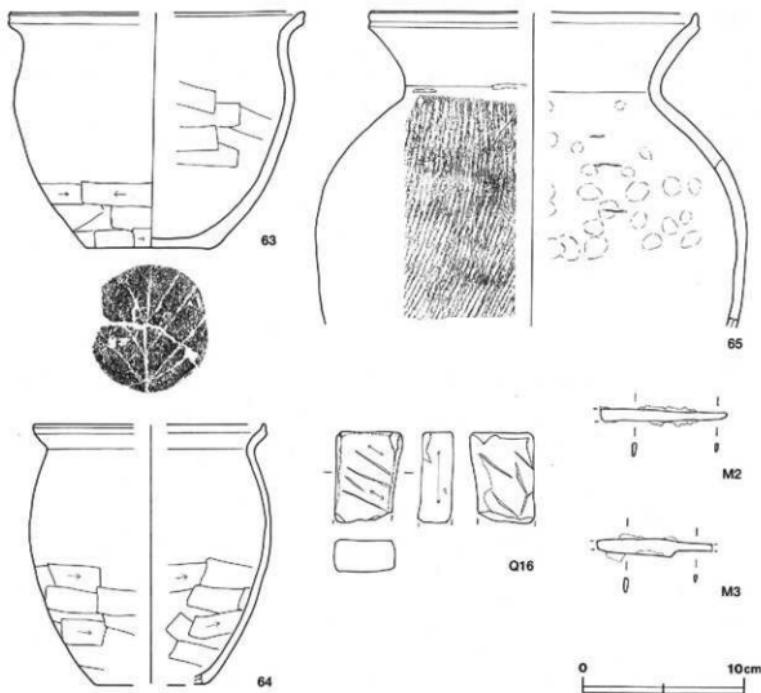
1 黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	11 黒褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土粒微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	12 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック・焼土粒・炭化物微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量	13 黒褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒微量
4 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	14 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量
5 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	15 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
6 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量	16 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
7 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	17 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量
8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	18 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
9 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	19 黒褐色	ロームブロック・炭化物微量
10 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	20 黒褐色	ロームブロック中量
		21 暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片345点（坏類90、甕類255）、須恵器片128点（坏類69、甕類51、鉢8）、石器1点（砥石）、金属製品2点（刀子）の他に、混入したと考えられる弥生土器片10点が出上している。59は南西部コーナー付近の床面から出土し、体部外面に「田」字墨書きされている。また、60は中央部と南東コーナー付近の覆土下層から出土しており、底部外面に「万歳」字墨書きされている。62は、広い範囲から破片で出土しており、竈左側の柵状施設の破片とも接合したことから本跡の廃絶後に遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第63図 第12号住居跡出土遺物実測図(1)



第64図 第12号住居跡出土遺物実測図(2)

第12号住居跡出土遺物観察表（第63・64図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
61	須恵器	环	[13.2]	4.6	6.2	長石・雲母	灰オリーブ	普通	瓶體回転へテ切り後多方向のハラ削り、各縦下端手打ちへラ前り	覆土中層	55% PL23
69	土師器	高台付环	13.4	[3.7]	-	長石・雲母・赤母子	灰白	普通	底部系切り後高台付け	床面	90% 塗刷[田] PL23-22
60	土師器	高台付环	12.8	4.2	6.2	長石-2号赤母子	明赤	普通	底盤削除へテ瓶口後高台付け	覆土下層	80% 塗刷[田] PL23-22
62	須恵器	鉢	22.9	13.3	[14.2]	長石・石英・雲母	灰オリーブ	普通	体部外面へラ前り後高台付け、輪郭の削り	胎土上～覆土下層	55% 塗刷[+]
65	須恵器	鉢	[20.4]	[19.4]	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面へラ前り後高台付け、輪郭の削り	床面	30% PL24
63	土師器	小形甕	[18.2]	14.6	8.6	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外面へラ前り後高台付け、輪郭の削り	覆土中層-蓋裏中層	55% PL24
64	土師器	小形甕	[14.3]	16.0	[7.0]	長石-2号赤母子	灰白	普通	内面摩滅調整不規	床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q16	紙石	(5.6)	4.3	2.1	(85.5)	珪石	紙面 3面	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	刀子	(7.9)	0.8	0.3	(4.5)	鉄	茎部の一部。刃部から先切・茎部欠損	覆土中層	PL28
M3	刀子	(7.2)	1.3	0.2	(5.2)	鉄	刃・茎部の一部。切先・茎部欠損	覆土下層	PL28

第13号住居跡（第65・66図）

位置 満塗区中央部北側のB 2 h 9区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 一辺が3.60m前後の方形で、土軸方向はN-1°-Eである。壁高は40cmほどで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がっている。また、東側は耕作機械による搅乱を受けていたため確認が困難であったが、窓の両側に砂質粘土を貼った棚状施設を有していることが確認された。

床 ほぼ平坦である。中央部南側から竈付近にかけて硬く踏み固められており、壁溝は北側を除く三方向で確認された。

■ 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで110cmほどである。袖部は遺存しておらず、右袖部と思われる砂質粘土の散らばりが床面にわずかに確認されたことから、袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されていたと想定される。火床面は、地山面を7cmほど畳状に掘りくぼめて使用しており、被熱のため赤変硬化している。壁外への掘り込みは45cmほどで、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がってている。

竈土層解説

1 咲褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8 黄褐色	色 燃上ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子微量
2 茶褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	9 黄褐色	燒土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
3 黑褐色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	10 黑褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
4 星褐色	ローム粒子・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒	11 黄褐色	色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
5 咲褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土・砂粒微量	12 黑褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
6 楠色	粘土粒子・砂粒多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	13 雪褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量
7 咲褐色	粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	14 黑褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
		15 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子微量
		16 にぶい赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
		17 星褐色	燒土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量

棚状施設 北壁中央部の窓を中心として左右に設けられているが、東側については搅乱を受けていたため全体の確認が困難であった。西側部分は奥行40cm前後、幅100cm前後のはば長方形であり、床面から40cmほどの高さで確認されたが、中央部は後世の搅乱を受けている。棚状施設の構造状況は、東西とも住居の掘り込み後に棚状施設部分を掘り込み、粘土を北壁全体と棚の掘り込み部分に貼り付けたと考えられる。

ピット 4か所検出された。P 3は深さ16cmであり、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 1・P 2・P 4は深さ10~14cmであるが性格は不明である。柱穴の配列や位置を想定して床面や遺構の外側を精査したが確認できなかった。

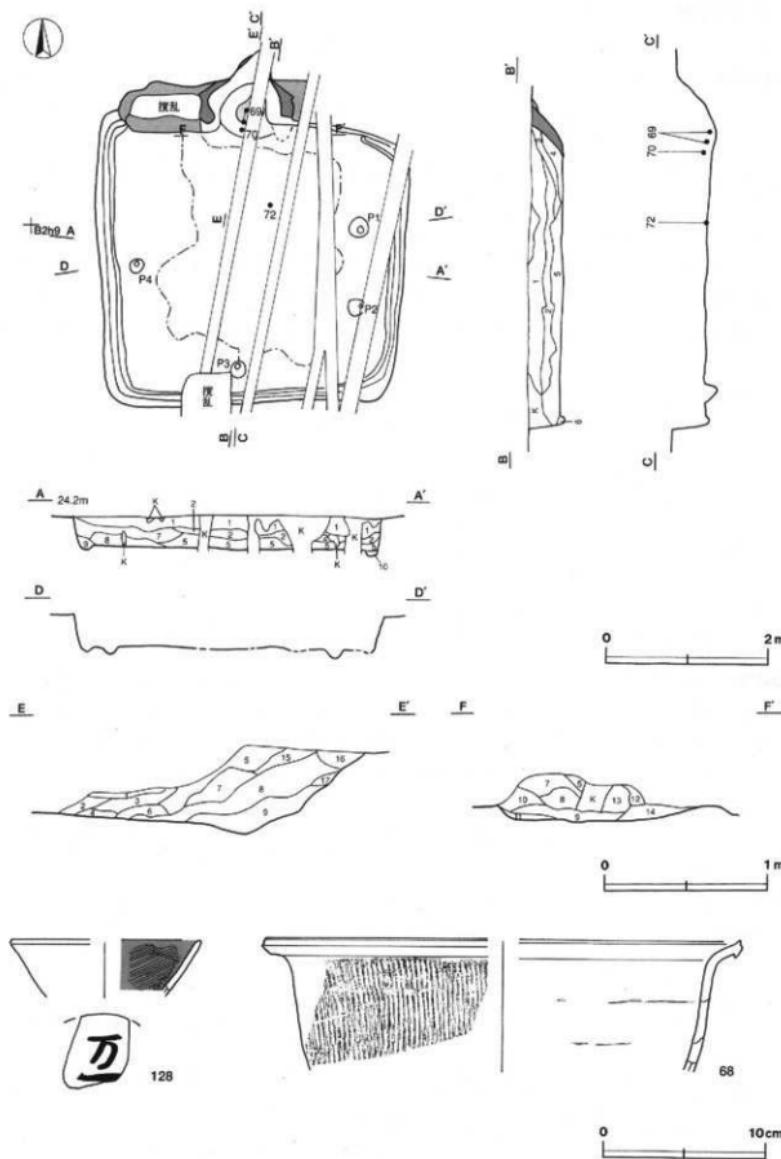
覆土 8層からなる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

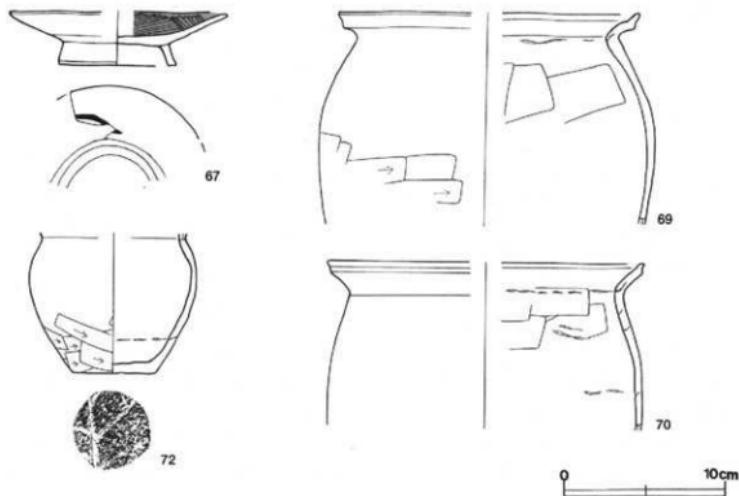
1 咲褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	5 咲褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	6 楠色	ロームブロック少量
3 新褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	7 黑褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
4 咲褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	8 咲褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土器部片392点（坏類55、甕類337）、須恵器片123点（坏類25、甕類98）の他に、流れ込みと考えられる縄文土器片が2点出土している。72は中央部の床面から出土している。

所見 128は体部外面に「方口」と墨書きされており、第12号住居跡出土の墨書「方歳」との関連性も考えられ、本跡は第12号住居跡と同時期の9世紀後葉と考えられる。



第65図 第13号住居跡・出土遺物実測図



第66図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第65・66図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
128	土師器	环	[11.8]	(35)	—	長石・石英	にぶい黄褐	普通	内面ヘラ削き	覆土中	5%墨痕[印] PL.27
67	土師器	高台付皿	[13.4]	3.3	7.4	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	底部側面ヘラ削り後高台貼り付け	覆土中	40%墨痕[印] PL.24
68	須恵器	鉢	[29.6]	(8.1)	—	長石・石英・雲母	閑灰	良好	口沿部外側腹壁に2回接觸ナギ、体部外側 腹壁の項に内面積み痕	覆土中	10%
69	土師器	甕	[18.5]	(13.1)	—	長石・石英・雲母	棕	普通	体部外面上位ナギ、内面ヘラナギ、輪積み痕	遺腹下土層	15%
70	土師器	甕	[19.6]	(10.2)	—	長石・石英・雲母	棕	普通	体部外面上位ナギ、内面ヘラナギ、輪積み痕	遺腹下土層	15%
72	土師器	小形甕	—	(8.6)	4.9	長石・石英・雲母	褐	普通	内面ヘラナギ、輪積み痕、底部火薙痕	未歛	20%

第15号住居跡（第67～69図）

位置 調査区南東部のC 3 h1区に位置し、南へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 南側に位置する第16号住居跡の大部分を掘り込んでいる。

規模と形状 南西部側は調査区域外へ延びているため、全体は確認できないが、北及び東壁と南東コーナーが確認されたことから、一辺が4.40mほどの方形と推定され、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は44cmほどで、確認された壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。また、竈の両側に砂質粘土を貼った棚状施設を有している。

床 軟質でほぼ平坦である。壁溝は確認されなかった。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで170cmである。袖部は遺存しておらず、床面にも砂質粘土の痕跡はないが、床面と同じ高さの地山面に構築されていたと推定される。火床面も地山面を使用しており、被熱のため赤変硬化している。中央部には土製の支脚2本が並列して据えられており、左の支脚には高台付皿が逆位の状態で被せられていた。壁外への掘り込みは55cmほどで、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっていいる。

電土層解説

1 にぶい赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量	14 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量
2 にぶい赤褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量	15 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
3 にぶい赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量	16 にぶい赤褐色	焼土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	17 暗赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化物微量
5 赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック・炭化粒子少量	18 赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
6 にぶい赤褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	19 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・焼土ブロック微量
7 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量	20 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量
8 赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒多量	21 にぶい赤褐色	焼土粒子微量、粘土粒子中量、粘土粒子少量
9 にぶい赤褐色	焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量	22 暗赤褐色	粘土粒子中量、粘土粒子・砂粒微量
10 明赤褐色	焼土粒子多量、粘土粒子・砂粒中量	23 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土ブロック少量
11 赤褐色	粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量	24 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック・ローム粒子微量
12 赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒多量		
13 灰褐色	炭化物、粘土粒子・砂粒少量・ロームブロック微量		

棚状施設 北壁中央部の窓を中心として左右に設けられており、東側部分は奥行70cm前後、幅140cm前後で、西側部分は奥行60cm前後、幅90cm前後である。大きさに違いはあるが両方ともほぼ長方形で、床面から58cmほどの高さで確認された。棚状施設の構築状況は、住居の掘り込みをした後に棚状施設部分を掘り込み、まず、ピット土層第3層に相当する砂質粘土を6cm前後北壁に貼り付け、その後ピット土層第2層に相当する砂質粘土を8cmほど貼り付けている。また、棚の掘り込み部分には覆土第23層に相当する砂質粘土を4cmほど貼り付けた後、覆土第22層に相当する砂質粘土を6cm前後貼り付けたと考えられる。棚状施設の粘土材は砂粒が多く、砂粒の少ない窓材の粘土との違いが明確である。

ピット 窓の左右に2か所検出された。双方とも深さは100cmほどである。床面を精査したがその他の柱穴は確認できなかった。

P2土層解説

1 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
2 灰褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量、焼土ブロック微量	5 褐色	ローム粒子中量、焼土ブロック少量、炭化物・粘土粒子・砂粒微量
3 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒微量	6 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒微量

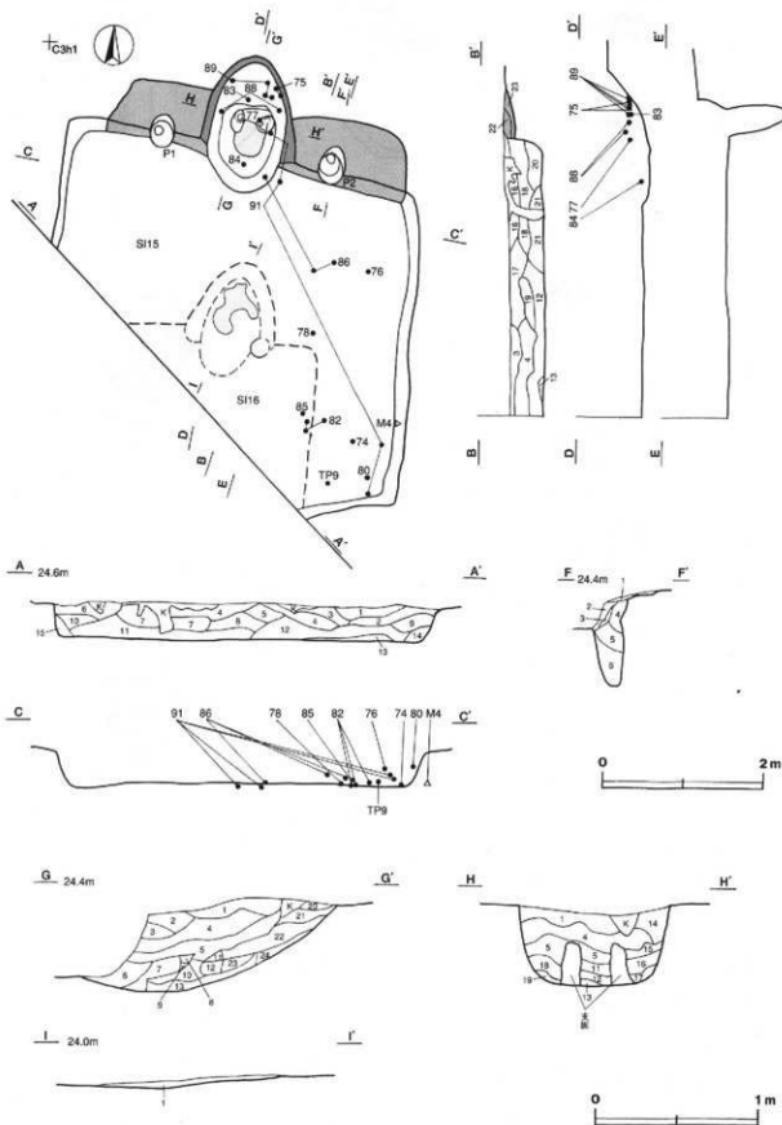
覆土 23層からなる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

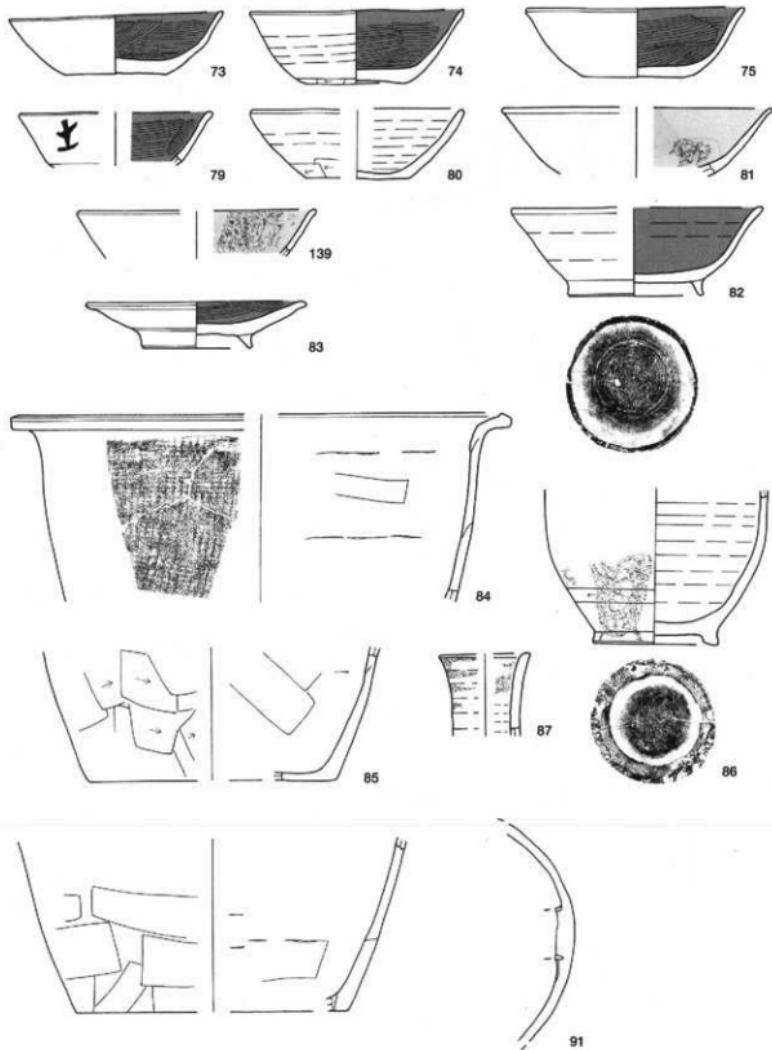
1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	13 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量
2 黑褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂粒微量	14 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック中量、粘土粒子・砂粒微量
3 黑褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂粒微量	15 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・砂粒微量
4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	16 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・砂粒微量
5 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・砂粒微量	17 褐色	ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	18 褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
8 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・砂粒微量	20 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
9 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	21 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
10 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量	22 褐色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子・砂粒微量
11 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒微量	23 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1775点(坏類248、亮類1527)、須恵器片242点(坏類33、亮類206、蓋3)、灰釉陶器片5点、瓦1点(平瓦)、铁製品1点(釘カ)の他に、混入したと考えられる繩文土器片2点、弥生土器片4点が出上している。74と82は南東隅コーナー付近、75と83は竈内からそれぞれ出土している。特に、83は竈内支脚の上から逆位の状態で出土している。86は、底部内面の釉の状況から長頸瓶と考えられ、81・139は尾北產と考えられる高台付瓶である。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。

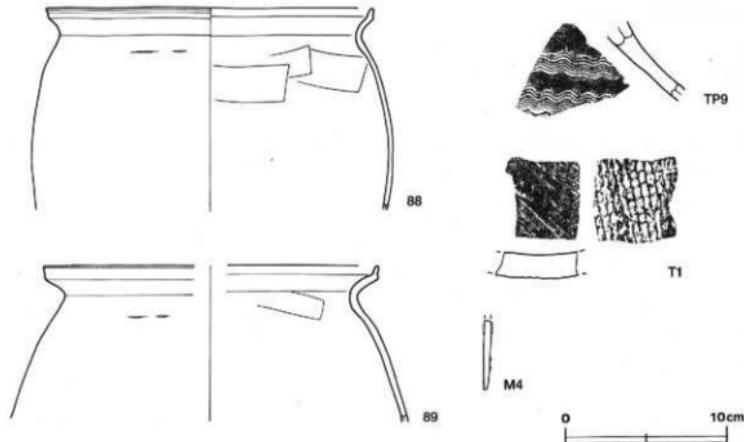


第67図 第15・16号住居跡実測図



第68図 第15号住居跡出土遺物実測図(1)





第69図 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

第15号住居跡出土遺物観察表（第68・69図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
73	土器部	环	13.3	3.7	6.3	長石・雲母	橙	普通	底部内側へラブ切り後、方向へのヘラ削り。 体部下部手扱らべア削り	電梯背面	98% PL24
74	土器部	环	13.2	4.6	6.0	長石・雲母・赤色粒子	にぼい橙	普通	底部内側へラブ切り後多方向のヘラ削り。 底部内側手扱らべア削り	覆土下解	90% PL24
75	土器部	环	13.4	4.2	6.5	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部内側へラブ切り後多方向のヘラ削り。 底部内側手扱らべア削り	電梯背面	40% PL24
79	土器部	环	[12.0]	(3.3)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面クロナダ。内面へラ磨き	覆土中層	5% 植生[□]
80	須恵器	环	[13.0]	4.3	[6.2]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部内側へラブ切り後ヘラ削り。 体部下部手扱らべア削り	覆土下層	25%
82	土器部	高台付环	[15.5]	5.4	8.3	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部内側へラブ切り後高台貼り付け	床面	65% PL24
81	灰陶陶器	高台付輪	[16.8]	(4.2)	—	長石・石英	にぼい黄	良好	体部外側下位側へラ削り。 外表面手ロクロナダ、内面灰釉糊毛刷り	覆土中	5% 蔓葛47号カ
130	灰陶陶器	高台付輪	[14.6]	(2.9)	—	長石・石英	にぼい黄	良好	体部外側クロナダ。内面灰釉糊毛刷り	覆土中	5% 蔓葛47号カ
83	土器部	高台付環	13.2	2.9	6.4	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部内側へラブ切り後高台貼り付け	電梯上中	90% PL24
84	須恵器	鉢	[30.0]	(11.6)	—	長石・雲母・赤色粒子	にぼい橙	普通	体部外側裏位の叩き。内面ヘラナダ。	電梯床面	10%
85	須恵器	鉢	—	(8.3)	[15.5]	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外側下端へラ削り。内面ヘラナダ。 施釉み窓	覆土下層	10%
86	須恵器	長頭瓶	—	(19.5)	7.7	長石・石英	灰黃褐	普通	底部内側へラブ切り後高台貼り付け。体部下部 回転ロクロナダ	床面	20%
87	須恵器	水瓶	[3.5]	(5.1)	—	長石	褐灰	良好	口沿部ロクロナダ。自然釉	覆土中	5%
88	土器部	甕	20.1	(12.5)	—	長石・石英・雲母	にぼい橙	普通	体部外面上位ナダ。内面ヘラナダ。輪様み痕	電梯上中層	15%
89	土器部	甕	[20.6]	(9.5)	—	長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部外面上位ナダ。内面ヘラナダ。輪様み痕	電梯上中層	15%
91	須恵器	甕	—	(10.7)	[16.9]	長石・雲母	灰黄	普通	体部内側下端へラ削り。体部内側ヘラナダ。施釉み窓	床面	10%
TP9	須恵器	甕	—	(4.9)	—	長石・石英	褐灰	普通	体部外側へラブ切り後高台貼り付けの簡易工具による 施釉模様丸孔。内面施釉み痕	覆土下解	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
T 1	平瓦	(5.2)	(4.8)	1.5	(71.0)	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	内面あり板。布目痕。凸面彫印き	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	小明	(4.3)	0.5	3.0	(3.0)	鉄	棒状で断面が方形、刃或いは鍔の基部部	覆土下解	

第16号住居跡（第67図）

位置 調査区南東部のC 3 h1区に位置し、南側に緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

重複関係 ほぼ全体が第15号住居に掘り込まれており、南西部は調査区域外へ延びているため規模は確認できない。

規模と形状 床面の下まで第15号住居に掘り込まれた状態で検出されたため、南北軸2.10m、東西軸3.20mほどしか確認されず、方形または長方形と推定される。竈火床面の遺存状態から判断して主軸方向はN-11°-Eで、壁は第15号住居に掘り込まれているため確認できなかった。

床 確認された部分はほぼ平坦である。壁構は確認されなかった。

竈 第15号住居に掘り込まれているために遺存状態は悪く、北壁の中央部と思われる位置に火床面と右袖部の一部が確認されただけである。火床面は北壁部の外側の床面と同じ高さの地山面を使用したと考えられ、被熱のため赤変硬化している。また、右袖部と思われる砂質粘土の残存部が確認された。

竈土層解説

- | | |
|--------|------------------------------|
| 1. 喧褐色 | 焼上ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量 |
| 2. 黒褐色 | |

ピット 柱穴の配列や出入り口施設の位置を想定して床面と遺構の外側を精査したが確認できなかった。

覆土 第15号住居に掘り込まれたため残存していない。

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺物が出土していないことから判断することが難しいが、9世紀後葉と考えられる第15号住居に掘り込まれているため9世紀後葉以前と考えられる。

第17号住居跡（第70・71図）

位置 調査区南東部のD 3 a4区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 一辺が2.70mほどの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。壁高は25~35cmで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部南側から邊付近にかけて硬く踏み固められているが、壁構は確認されなかった。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで105cmほどである。左袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されているが、右袖部は遺存しておらず、床面に砂質粘土や焼土粒子の散らばりが確認できただけである。火床面も袖部と同様の地山面を6cmほど皿状に掘りくぼめて使用しており、被熱のため赤変硬化している。中央部には土製支脚が据えられており、小形の壺が逆位で被せられていた。壁外への掘り込みは65cmほどで、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がりっている。

竈土層解説

1. 黄褐色	粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量	7. 棕色	ロームブロック中量、焼上ブロック・炭化物、粘土粒子・砂粒微量
2. 棕色	ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量	8. 黑褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・砂粒微量
3. 黄褐色	ロームブロック中量、炭化物、粘土粒子・砂粒微量	9. 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子・砂粒微量
4. 喧褐色	ロームブロック・焼上ブロック・炭化物、粘土粒子・砂粒微量	10. 黑褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
5. 喧褐色	焼上粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	11. 棕色	燒上粒子中量、粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック・炭化物微量
6. 暗褐色	燒上粒子中量、ローム粒子・炭化物、粘土粒子・砂粒微量	12. 海色	燒上ブロック少量、ロームブロック・炭化物、粘土粒子・砂粒微量

ピット 柱穴の配列や出入り口施設の位置を想定して床面と遺構の外側を精査したが確認できなかった。

床面や遺構の外側を精査したが柱穴は確認できなかった。

覆土 3層からなる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

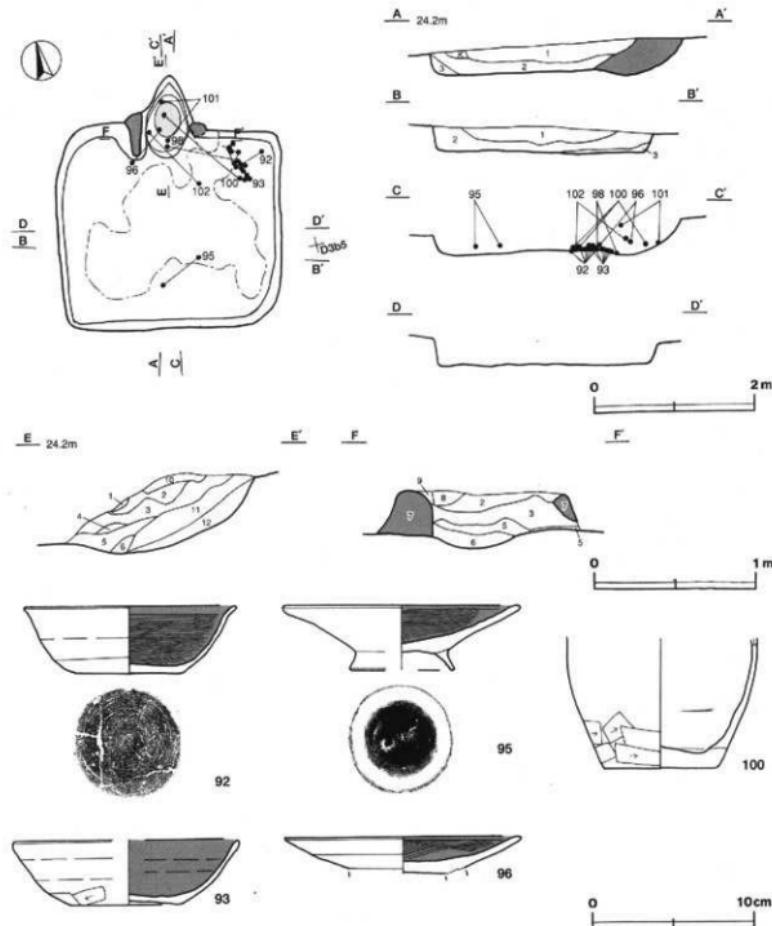
土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

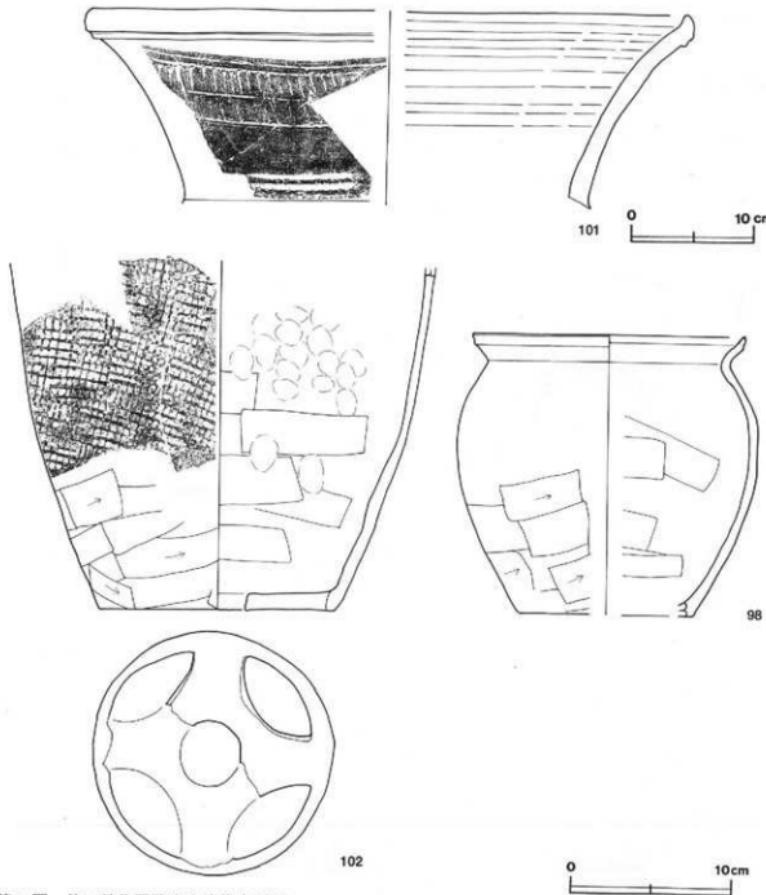
- 3 明褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片171点（坏類75、甕類96）、須恵器片52点（坏類9、甕類43）の他に、流れ込みと考えられる繩文土器片が2点出土している。92・93は北東コーナー付近から出土している。100は支脚の上に逆位で被せられた状態で出土しているが、北東コーナー付近の床面から出土した遺物とも接合関係があり、住居廃絶後の埋没過程の早い段階で竈が崩れ流れ出したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第70図 第17号住居跡・出土遺物実測図



第71図 第17号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡出土遺物観察表（第70・71図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
92	土師器	环	13.0	4.1	6.6	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	底延長部へハラ切り後鉛輪ヘラ削り。体部下端斜削ヘラ削り。	床面	90% PL24
93	土師器	环	[13.9]	3.9	6.8	長石・雲母・赤色粘土	にぶい紅	普通	底延長部へハラ切り後二方向のヘラ削り。体部下端斜削ヘラ削り。	覆土下層	50%
95	土師器	高台付皿	14.5	3.9	[6.2]	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	底部斜削ヘラ削り後高台貼り付け	覆土下層	35%
96	土師器	高台付皿	14.5	(2.3)	-	長石・雲母	橙	普通	底部斜削ヘラ削り後高台貼り付け	覆土上中層	85%
98	土師器	甕	[16.9]	17.2	[10.9]	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	体部表面下位へハラ削り。体部外側上面に子ナデ、内面へナデ	遺火床面・床面	40%
100	土師器	小形甕	-	(8.0)	7.0	長石・雲母	にぶい紅	普通	体部外側下位へハラ削り。内面ヘラナダ	遺火床面上・床面	25%
101	埴輪器	大甕	[24.7]	(16.2)	-	長石・石英	灰	普通	底延長部二上部横位の(四)両後側斜削状工具による横走波状文施文	遺火上中層	10%
102	埴輪器	甕	-	(21.2)	14.8	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外側下位横子状の(四)体部外側下面へハラ削り。内面ヘラナダ。指痕痕	遺火床面上・床面	40% PL25

第18号住居跡（第72・73図）

位置 調査区南東部のC 3 j 7区に位置し、南東へ緩やかに傾斜する台地の縁辺部に立地している。

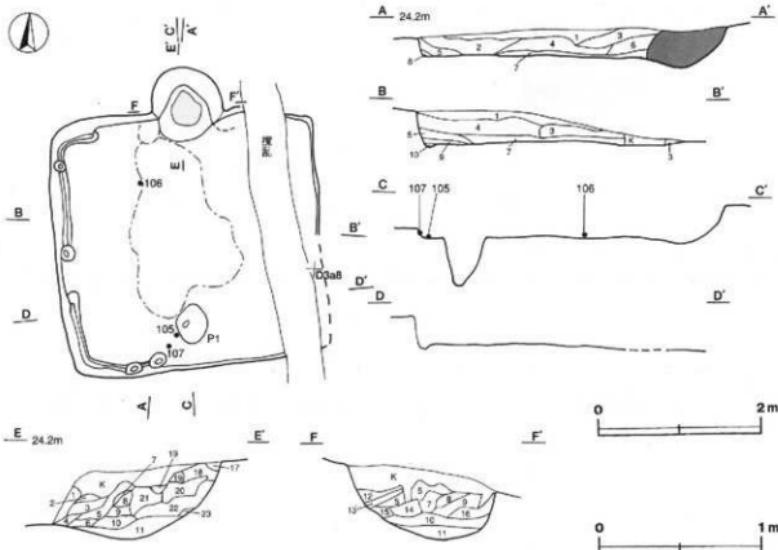
規模と形状 一辺が3.25mほどの方形で、主軸方向はN-7°-Wである。東部分は主軸にはほぼ平行するように北壁から南壁にかけて根切り溝による擾乱を受け、南東コーナー付近は削平されている。確認された壁高は4~40cmで、各壁とも緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。中央部南側から竈付近にかけてよく踏み固められている。壁溝は北西側と南西側のそれぞれのコーナーで一部確認されている。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部まで92cmである。袖部は遺存しておらず、床面にも砂質粘土などの痕跡は見られないが、床面と同じ高さの地山面に構築されていたと推定される。火床面も袖部と同様に地山面を8cmほど皿状に掘りくぼめて使用しており、被熱のため赤変硬化している。壁外への掘り込みは55cmほどで、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

電土層解説

1 細 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	子・炭化粒子微量
2 細 色	ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子微量	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
3 にぶい褐色	ローム粒子・焼土粒子少量・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	焼土ブロック中量・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量・ローム粒子微量
4 明褐色	ローム粒子中量・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	焼土粒子・砂粒少量・ローム粒子微量
5 明赤褐色	粘土粒子・砂粒少量・ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	砂粒微量
6 にぶい褐色	粘土粒子・砂粒少量・ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量	ローム粒子・焼土粒子少量・ローム粒子・炭化粒子微量
7 奈褐色	焼土粒子中量・ローム粒子微量	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量・炭化粒子微量
8 にぶい赤褐色	焼土粒子少量・ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量	焼土粒子・炭化粒子中量・粘土粒子・砂粒微量
9 奈褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量・ローム粒子微量	焼土粒子・炭化粒子中量・粘土粒子・砂粒微量
10 にぶい赤褐色	焼土ブロック中量・粘土粒子・砂粒微量	焼土粒子・炭化粒子微量・粘土粒子・砂粒微量
11 奈褐色	ロームブロック多量・粘土粒子・砂粒微量	ロームブロック中量・炭化粒子少量・粘土粒子・砂粒微量
12 奈褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量・ローム粒子・炭化粒子微量	焼土粒子・炭化粒子微量・粘土粒子・砂粒微量
13 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量・燒土粒子少量・ローム粒子微量	焼土粒子中量・ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量



第72図 第18号住居跡実測図

ピット 1か所検出された。P1は深さ61cmであり、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。柱穴の配列や位置を想定して床面や遺構の外側を精査したが確認できなかった。

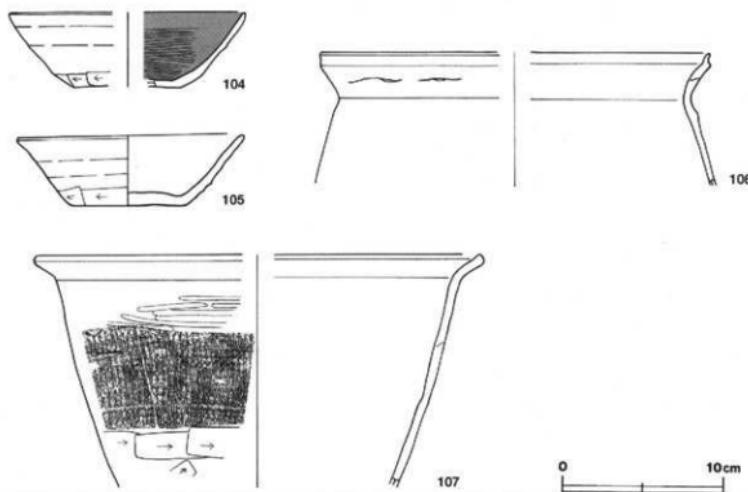
覆土 10層からなる。ロームブロックなどを含んだブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
2 黄色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 黄色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック	8 黄色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	9 黄色	ロームブロック微量
5 黑褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	10 黄色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土器片148点(环頬39、壺頬109)、須恵器片80点(环頬44、壺頬36)の他に、混入したと考えられる繩文土器片6点が出土している。105は南壁側中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第73図 第18号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡出土遺物観察表 (第73図)

番号	性別	器種	口径	器高	底径	動土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
104	土器	杯	[146]	4.6	[6.5]	云母・赤色粒子 にぶい黄褐色	普通	底部回転ヘラ切り、底部下端手持もヘラ削り	覆土中	30%		
105	須恵器	杯	13.7	4.4	7.0	長石・石英・雲母	灰	底部回転ヘラ切り後多方角のヘラ削り、 内側上端ヘラ削り	覆土下層	85%	P1.24	
106	土器	壺	[24.2]	(8.1)	-	長石・石英・雲母粒子	赤褐色	普通 輪郭引張り	11.25部内・外面模様ナデ、 底部外側ナデ	覆土下層	10%	
107	須恵器	鉢	[27.6]	(14.3)	-	長石・石英・雲母粒子	黒褐色	普通 輪郭引張り	11.25部内・外面模様ナデ、 底部既削り底の 部分、輪位のヘラ削り	覆土下層	10%	

第20号住居跡（第74・75図）

位置 調査区南東部のC 3 e7区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 長軸3.34m、短軸2.75mのやや東西に長い長方形で、主軸方向はN-18°-Eである。壁高は24cmほどで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

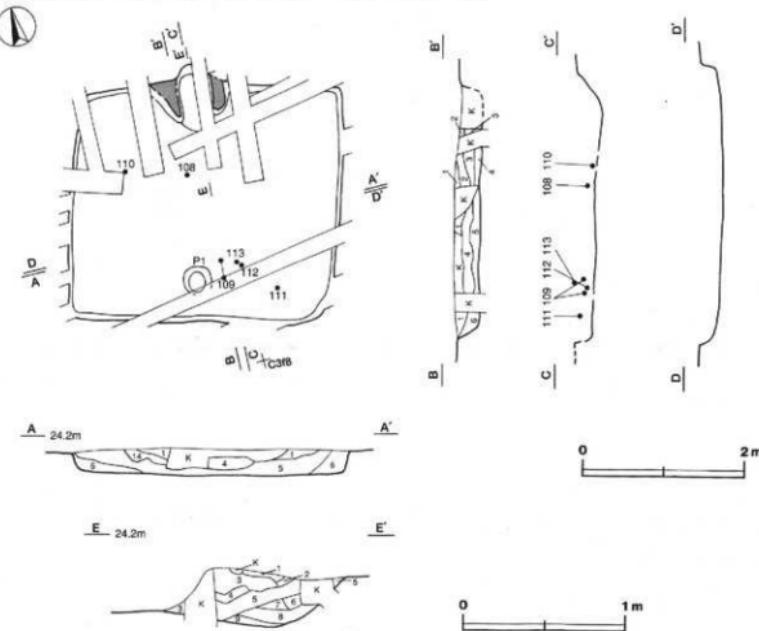
床 耕作機械による擾乱を激しく受けしており、遺存する床はほぼ平坦であるが、硬化面や壁溝などは確認できなかった。

窓 窓の中心部や両袖部を耕作機械によって著しく壊されているが、両袖部のわずかな遺存状態から、北壁の中央部よりやや西寄りに付設されていたと推定できる。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されており、遺存する袖部幅は80cmである。火床面はわずかに遺存しており、袖部と同様の地山面を皿状に掘りくぼめて使用し、被熱のため赤変している。

窓解説

1 にぶい黄褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量	5 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化物微量
2 暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量	6 灰褐色	粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 にぶい赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	7 にぶい赤褐色	焼土粒子多量、粘土粒子・砂粒少量
4 にぶい赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子微量	8 赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック微量

ピット 1か所検出された。P1は深さ24cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。柱穴の配列や位置を想定して床面や遺構の外観を精査したが確認できなかった。



第74図 第20号住居跡実測図

覆土 6層からなる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

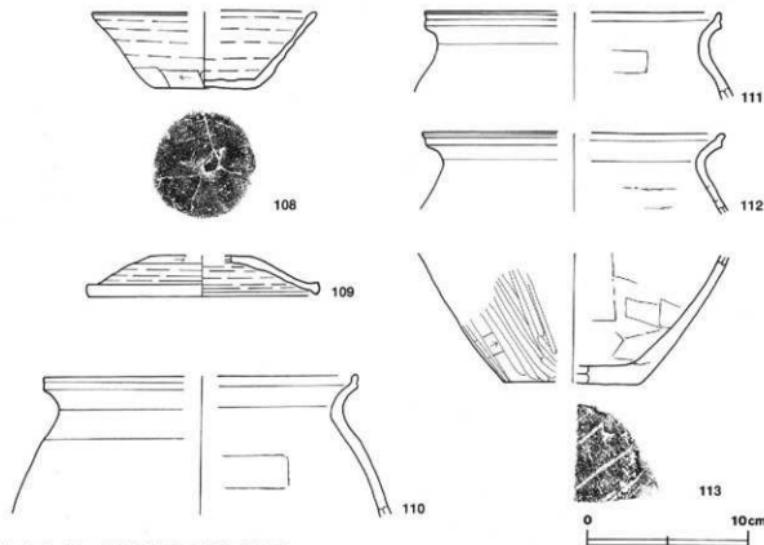
土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------------|-------|---------------------|
| 1 砂褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 5 砂褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 砂褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化物微量 | 6 褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 3 砂褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |
| 4 黒色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・粘土粒子・砂粒微量 | | |

遺物出土状況 土師器片86点（壺類8、甕類78）、須恵器片38点（壺類28、甕類9、蓋1）が出土している。

110は北西コーナー寄りから、112は中央部南東側から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第75図 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土遺物観察表（第75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
108	須恵器	壺	[138]	4.7	6.4	長石・石英・雲母	灰青黒	普通	表面削込み切り後多方向のヘラ削り、全体下端手打ちヘラ削り	覆土下層	70% PL23
109	須恵器	甕	[14.3] (2.5)	-	-	長石・石英・雲母	黄灰	良好	天津部右辺のヘラ削り	覆土中層	75% PL25
110	土師器	甕	[19.2] (8.5)	-	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面削なだ、内面ヘラナダ	覆土下層	5%
111	土師器	甕	[18.4] (5.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面削なだ、内面ヘラナダ	覆土中層	5%	
112	土師器	甕	[18.6] (4.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口辺部内・外面削なだ、内面ヘラナダ	覆土下層	5%	
113	土師器	甕	-	(7.9)	[8.6]	長石・石英・雲母	褐	普通	体底外面下位ヘラ削り後ヘラ削き、内面ヘラナダ	覆土上層	5%

第22号住居跡（第76・77図）

位置 調査区南東部のC 4 g3区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 耕作による削平を激しく受けているため南・東側の壁が確認されなかつたが、南東側の床面が露出した状態で検出されたことや竈の位置・硬化面の広がりなどから判断して、N-18°-Eを主軸方向とする長

軸3.38m、短軸3.00mのやや東西に長い長方形と推定される。確認された壁高は12cmほどで、外傾して立ち上がっている。また、確認面では住居外への砂質粘土の散らばりは検出されなかつたが、竈左壁に砂質粘土が貼り付けられており、棚状施設を有する可能性が考えられる。

床 耕作などで激しく削平されているが、遺存する部分はほぼ平坦で、南西側の中央部から竈付近までよく踏み固められている。壁溝は確認されなかつた。

竈 北側壁が完全に確認されていないが、北壁の中央部に付設され、焚き口から煙道部まで75cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面に構築されていたと考えられるが、砂質粘土の痕跡は確認できなかつた。火床面は、地山面を10cmほど皿状に掘りくぼめて使用しているが、赤変された部分は確認できなかつた。煙外への掘り込みは42cmほどで、煙道は火床部から外傾して立ち上がっていたと推定できる。

遺土層解説

- | | |
|---------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土ブロック微量 | 5 にぶい赤褐色 粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 | 6 にぶい赤褐色 烧土ブロック微量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量 |
| 3 赤褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量 | |
| 4 暗赤褐色 烧土ブロック微量、炭化粒子微量 | |

棚状施設 竈の西側壁に砂質粘土が貼り付けられており、棚状施設を有する可能性が考えられる。しかし、確認面では粘土の広がりを検出できなかつたので平面形については不明である。

ピット 柱穴の配列や出入り口施設の位置を想定して床面と遺構の外側を精査したが確認できなかつた。

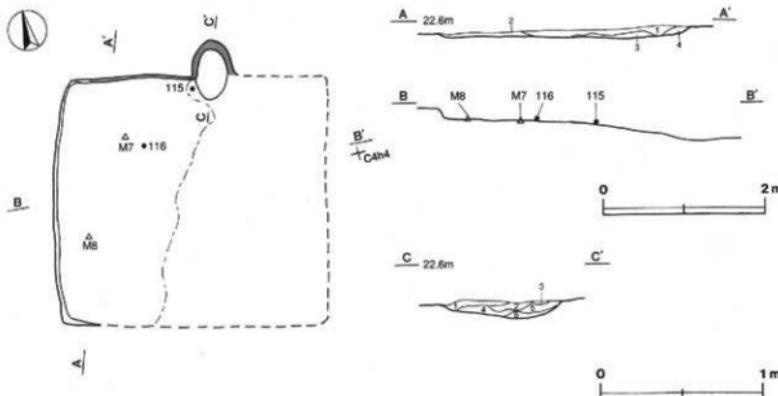
覆土 4層からなる。レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積である。

土層解説

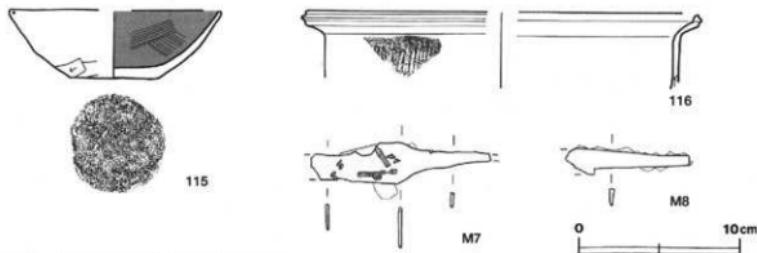
- | | |
|-------------------|------------------------------|
| 1 極色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 3 黒色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 明褐色 ローム粒子中量 | 4 明褐色 ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土器器物27点（壺類8、甕類19）、須恵器片22点（壺類15、甕類7）、鉄製品2点（刀子）が出士している。115は竈前左側の焚き口付近の床面から出土している。

所見 本跡は、耕作による削平が激しいため確認できた覆土はわずかであり、時期を判定する遺物が少ないが、時期は9世紀後半と考えられる。



第76図 第22号住居跡実測図



第77図 第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表（第77図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
115	土師器	环	[13.2]	4.1	5.6	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	光面(輪へ切削後多方向の引出)、胎土(輪付)へ削り	床面	50%
116	埴器	鉢	[24.0]	(47)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口沿部外表面滑ナガ、体部腹窓の平行印加、輪付	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M.7	万子	(11.0)	2.7	0.2	(17.4)	鉄	刀身・茎部の一部、切先・茎尻欠損。一部に織維質付着	床面	100% PL28
M.8	万子	(7.8)	1.5	0.3	(9.0)	鉄	刀身・茎部の一部、切先・茎尻欠損	床面	90% PL28

第23号住居跡（第77・78図）

位置 調査区南東部のC 4 g4区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 耕作による削平を激しく受けているため南・東側の壁が確認されなかったが、南東側の床面が露出した状態で検出されたことや竈の位置・硬化面の広がりなどから判断して、N-33°-Eを主軸方向とする一辺が3.20mほどの方形と推定される。確認された壁高は30cmほどで、外傾して立ち上がっており、確認面では住居外への砂質粘土の散らばりは検出されなかつたが、竈の西側の壁に砂質粘土が貼り付けられており、棚状施設を有する可能性が考えられる。

床 耕作などで激しく削平されているが、遺存する部分はほぼ平坦で、南西側の中央部から竈付近までよく踏み固められている。壁溝は確認することができなかつた。

竈 北東側壁が完全に確認されていないが、北東壁の中央部に付設され、焚き口から煙道部まで85cmである。

袖部は床面と同じ高さの地山面に構築されていたと考えられるが、砂質粘土の散らばりは確認できなかつた。

火床面は、地山面を23cmほど皿状に掘りくぼめて砂質粘土を充填して使用しており、赤変している。壁外への掘り込みは65cmほどで、煙道は火床部から外傾して立ち上がっていと推定できる。

竈土層解説

- | | | | |
|----------|--------------------------|----------|----------------------------------|
| 1 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒少量、燒土ブロック・炭化粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 燒土粒子中量、粘土粒子・砂粒少量 |
| 2 にぶい赤褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、燒土ブロック微量 | 6 にぶい赤褐色 | 燒土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 燒土ブロック中量、粘土粒子・砂粒少量 | 7 暗赤褐色 | 燒土ブロック少量、粘土粒子・砂粒微量 |
| 4 にぶい赤褐色 | 燒土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量 | 8 黒褐色 | 粘土粒子・砂粒中量、燒土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 |

棚状施設 竈の西側壁に砂質粘土が貼り付けられており、棚状施設を有する可能性が考えられる。しかし、確認面では粘土の広がりを検出できなかつたので平面形については不明である。

ピット 柱穴の配列や出入り口施設の位置を想定して床面と遺構の外側を精査したが確認できなかつた。

覆土 3層からなる。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

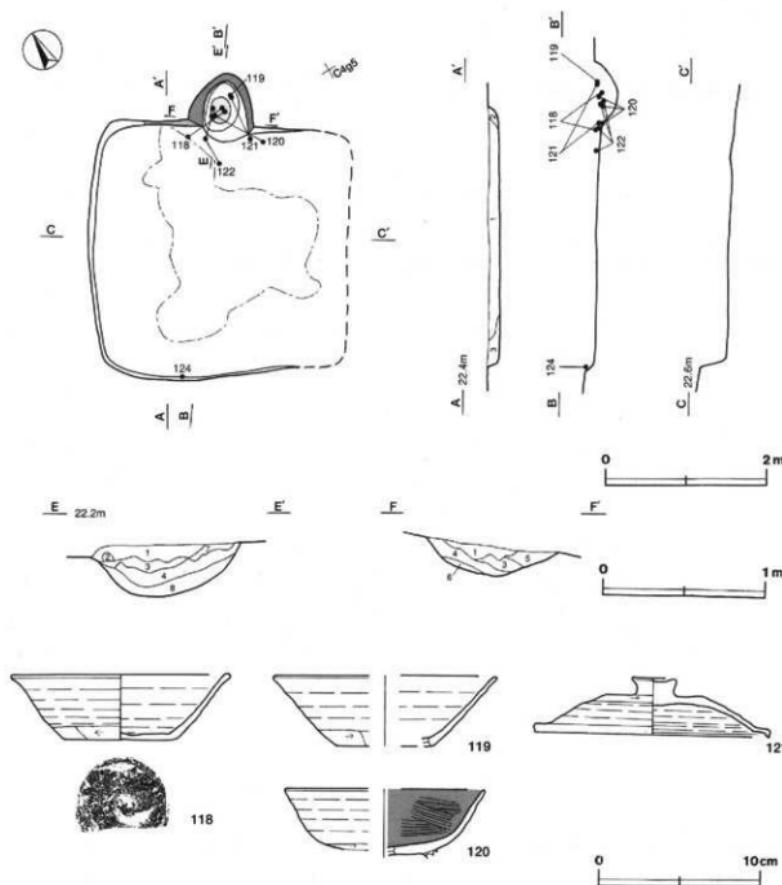
土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
2 靖褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・粘土粒子・砂粒少量

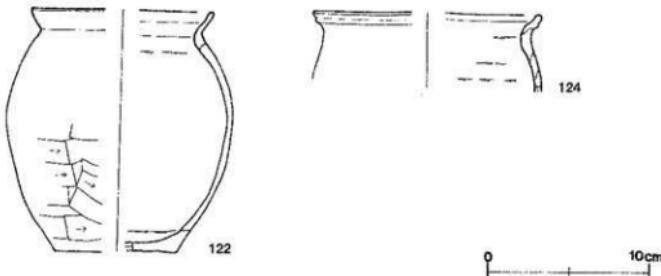
3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片28点（壺類7、甕類21）、須恵器片10点（壺4、蓋6）の他に、流れ込みと考えられる弥生土器片2点が出土している。118と120は著しく二次焼成を受けており、竈内で支脚に転用されていたと考えられる。121は竈焚き口前左側と竈内から出土したものが接合し、122は竈内から一括で出土しているが、胎土や調整などの特徴から同一個体であると考えられる。

所見 本跡は、耕作による削平が激しく、確認できた覆土もわずかであったが、遺物のほとんどが竈内や竈付近から出土している。時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。



第78図 第23号住居跡・出土遺物実測図



第79図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表 (第78・79図)

番号	種類	基盤	THE	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
118	瓶	环	13.4	4.0	6.8	青灰-灰白色	青灰	普通	底部削平後多方向のハラ削り、 底部下端手打ちハラ削り	青灰火山-灰黑	60% 次焼成
119	瓶	环	13.8	4.3	6.1	具石-石英-玄母	灰	普通	底部削平後多方向のハラ削り、 底部下端手打ちハラ削り	青灰火山-灰黑	10%
120	土器	盒合形	12.1	4.3	-	青石-石英-玄母	灰	普通	底部削平後多方向のハラ削り、 底部下端手打ちハラ削り	青灰火山-灰黑	50% 次焼成
121	瓶	壺	14.5	3.4	-	致石-石英-玄母	灰黄	良品	天井部削平後多方向のハラ削り	灰灰火山-灰黑	65% PL25
122	土器	小甕	12.4	3.4	7.4	致石-石英-玄母	明赤紅	普通	底部削平後多方向のハラ削り、 底部下端手打ちハラ削り	青灰火山-灰黑	10%
124	土器	小甕	14.0	4.7	-	致石-玄母	灰	普通	上端削平外輪塗アザ、輪柄みれ	灰灰火山-灰黑	5.16

表7 穴住居跡一覧表

番号	位置	半鐘方向	半鐘形	規模(m)	壁高(cm)	床高(cm)	漆喰	内部施設	蓋(1)	主な出土遺物	参考 (時期)	西田開拓 (昭和)	
3	B 1.0	N-45°W	長方形	5.90×4.80	36	平地	-	柱穴4口ピット、着床穴	1 1 12 9.0	人骨 陶瓦 木製漆器 板鏡 銅鏡	漢代後期		
4	B 2.2	N-25°E	方形	3.80×3.74	18	平地	3.5	2 4 5 5.0	1 1 1 1	人骨 上部器 陶器 陶片	5世紀中葉		
5	B 2.12	N-4°E	方形	3.97×3.45	21-25	平地	-	4 1 2 2	1 1 1 1	人骨 土器 鍋	5世紀中葉		
6	B 2.47	N-12°W	[方形]	3.53×3.15	30	平地	-	1 1 -	-	人骨 上部器 陶器	9世紀後葉		
7	B 2.24	N-56°W	長方形	6.16×5.23	12-30	平地	-	3 1 1 1	1 1 1 1	人骨 土器	9世紀後葉		
8	B 2.22	N-21°W	方形	2.91×2.86	35	平地	-	-	1 1	人骨 上部器 陶器	9世紀後葉以前		
9	C 2.83	N-0°	長方形	3.71×3.26	61	平地	全壇	-	1 1 2	1 1 1 1	人骨 上部器 陶器	9世紀後葉	
10	C 2.27	N-11°W	方形	3.12×2.96	45	平地	1-2	-	1 1	-	人骨 土器 鍋	9世紀後葉以前	
11	C 2.16	N-2°E	方形	3.94×3.93	41-11	平地	1.5	-	1 1 1	1 1 1 1	人骨 土器 鍋	9世紀後葉	
12	B 2.17	N-2°E	方形	3.88×3.58	61	平地	-	-	2 2 2	1 1 1 1	人骨 上部器 陶器 刀子	9世紀後葉	
13	B 2.69	N-1°E	方形	2.76×3.50	40	平地	-	-	1 3 1	-	人骨 土器	9世紀後葉	
15	C 3.81	N-8°E	方形	4.55×4.21	44	平地	-	-	2 1	-	人骨 土器 鍋	9世紀後葉	
16	C 3.11	N-11°E	-	(3.20×2.10)	-	平地	-	-	1 1	-	1 1 1 1	9世紀後葉以前	本跡→SI13
17	D 3.81	N-12°E	方形	2.75×2.55	51-53	空地	-	-	1 1	-	人骨 土器	9世紀後葉	
18	C 3.17	N-7°W	方形	3.26×3.24	1-10	平地	-	1 1 1	1 1 1 1	人骨 土器 陶器	9世紀中葉		
19	C 3.06	N-36°W	方形	5.27×5.24	35	平地	全壇	4	-	1 1 1 1	白磁 土器 陶器	6世紀後葉	
20	C 3.e7	N-18°E	[真方形]	3.34×2.75	34	平地	-	-	1 1	1 1 1 1	白磁 土器	9世紀中葉	
22	C 4.10	N-22°E	長方形	3.38×3.00	12	平地	-	-	1 1	1 1 1 1	白磁 土器	9世紀後葉	
23	C 4.43	N-33°E	[方型]	3.23×3.20	28	平地	-	-	1 1	1 1 1 1	白磁 土器 陶器	9世紀後葉	

(2) 火葬墓

第1号火葬墓 (第80・81図)

位置 調査区南東部のC 3 h8区に位置し、南東へ緩やかに傾斜した台地の縁辺部に立地している。

規模と形状 径65cmほどのほぼ円形で、確認面から底までの深さは35cmほどである。壁はいずれもやや外傾しながら立ち上がり、最上部は大きく開いている。底面は平坦で、炭化物の充填による被熱のため極暗褐色に変色している。

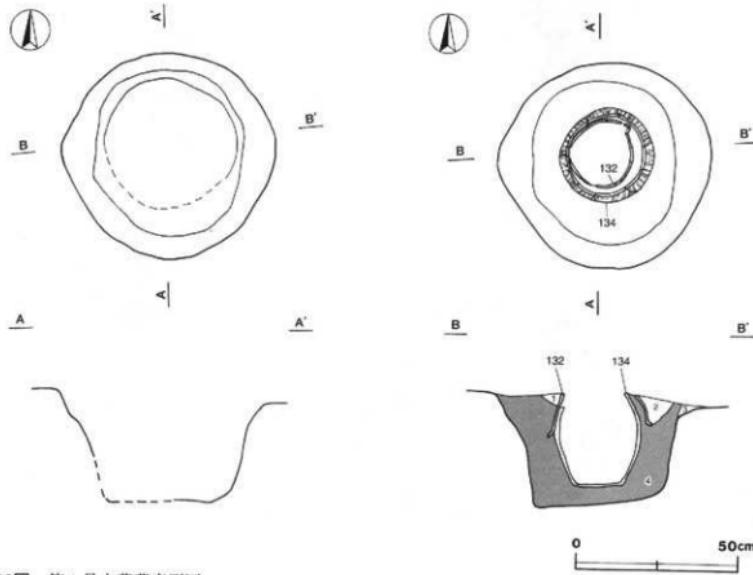
覆土 4層からなり、骨蔵器の周りに木炭が多量に詰め込まれている。

土層解説

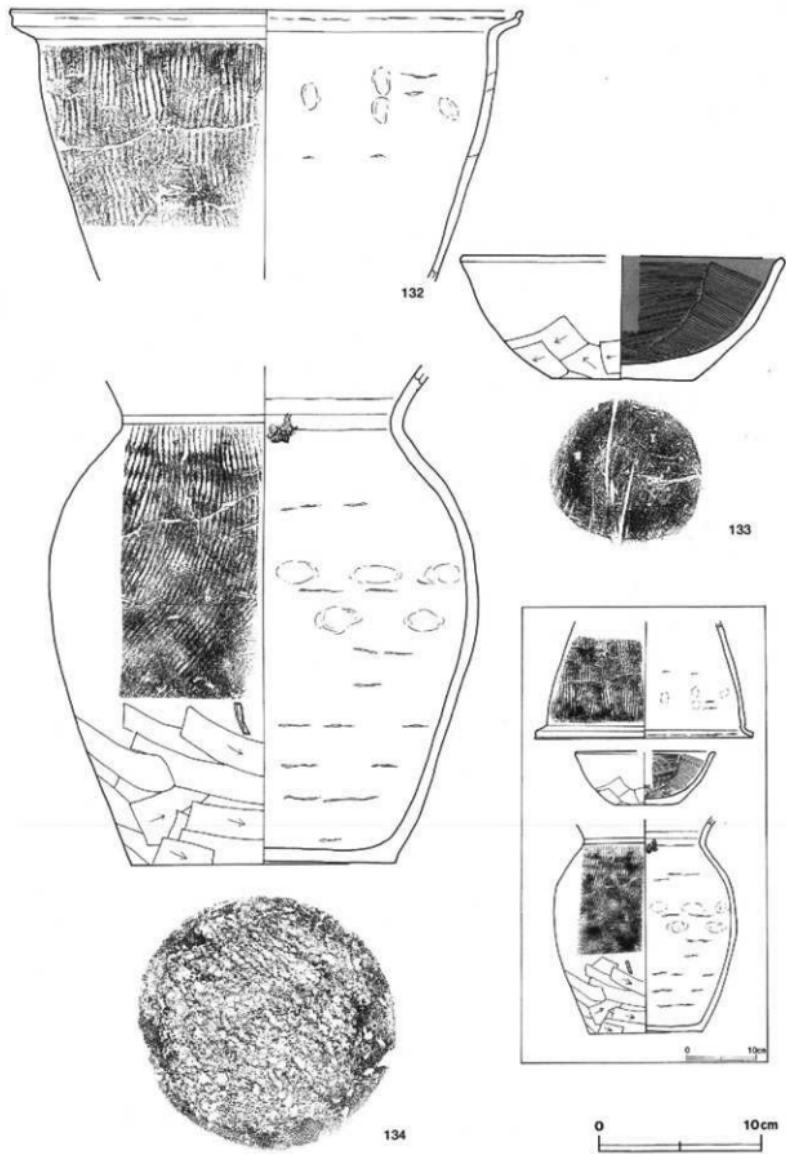
1 明褐色 ローム粒子・炭化物中量、焼土粒子微量	3 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量
2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物少量	4 暗褐色 炭化物極めて多量、ローム粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器1点(壺)須恵器2点(鉢・甕)が出土しており、耕作によってそれぞれ一部が欠損している。甕には多量の火葬骨が納められ正位の状態で出土している。壺は口縁が破損した状態で底部が甕内に落ち込んでいたことから、正位の状態で甕に蓋されていたと想定できる。また、鉢は底部を破損しているものの逆位の状態で骨蔵器(須恵器甕)にかぶせられていた。骨蔵器の中からは頭骨、頸、歯、大腿骨などが確認されているが、性別や年齢については不明である。火葬骨全体の重さは1.5kgほどである。

所見 当骨蔵器は、土坑を掘り込んで埋納しているが、底面が被熱していることから、土坑内で火を焚いた可能性や火葬の際の燃え残りを土坑に入れたための被熱の二通りが考えられるが、壁面部に被熱痕が認められないことから、燃え残りを入れたものと想定できる。埋納法は、掘り込んだ土坑にまだ熱を持っている木炭を入れ、次ぎに、納骨した甕を置いてから肩部分まで木炭を充填し、その段階で壺で蓋をし、鉢を被せ、最後に全体に木炭を充填したものと考えられる。時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第80図 第1号火葬墓実測図



第81図 第1号火葬墓出土遺物実測図

第1号火葬墓出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
133	土師器	环	[196]	7.6	8.8	長石・石英・赤色粒子	橙	良好	底面多方向からのハラ削り。体部外側下端へハラ削り。	骨蔵器中	60% PL25
132	須恵器	鉢	31.4	(16.8)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外側下端へハラ削り。体部外面上位縦位の平行叩き、内面指痕有、輪樋み痕	骨蔵器上	70% 逆位 PL25
134	須恵器	壺	-	(31.0)	16.2	長石・石英・雲母	灰白	良好	体部外側下端へハラ削り。体部外面上位縦位の平行叩き、内面當て具痕、輪樋み痕	床直	80% 成直・ 60% 成斜・ 60% 傾直

(3) 土坑

第9号土坑（第82図）

位置 調査区中央部南側のC 2 e8区に位置している。

重複関係 北西側の一部が第1号溝に掘り込まれており、南東側の一部は第22号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 径が1.20mほどの円形で、確認面からの深さは66cmである。壁は外傾して立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。

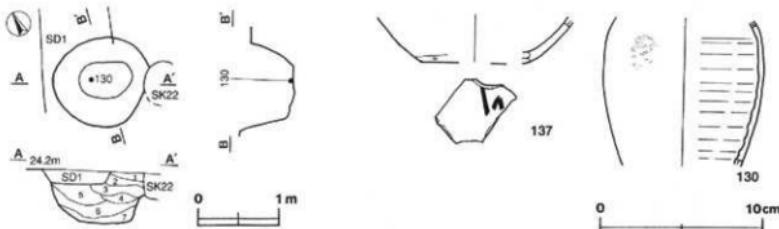
覆土 7層からなり、レンズ上の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 黒色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 黄色 | ロームブロック少量 | 7 黄色 | ローム粒子中量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師器1点（環）、灰釉陶器1点（水瓶）が出土している。水瓶は胎土や手法の特徴などから黒釜90号窯式と考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第82図 第9号土坑・出土遺物実測図

第9号土坑出土遺物観察表（第82図）

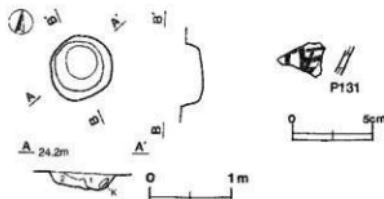
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
137	土師器	环	-	(2.8)	[6.6]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部下端持ちハラ削り	覆土中	5% 亂青[口]
130	灰釉陶器	水瓶	-	(9.1)	-	長石・石英	にふい黄褐	良好	体部外面クロロナデ	覆土下層	10% 黒釜90号窯式

第51号土坑（第83図）

位置 調査区中央部北側のB 2 e7区に位置している。

規模と形状 長径82cm、短径76cmのほぼ円形で、確認面からの深さは24cmである。壁は緩やかに外傾しており、底面はほぼ平坦である。

覆土 2層からなるが、ブロック状の堆積状況を示す人為体積である。



第63図 第51号土坑、出土遺物実測図

第51号土坑出土遺物観察表(第84図)

番号	種別	容積	口径	底高	底径	胎土	色調	地成	手汰の有無	出土位置	備考
(31)	土器部	坪	-	(1.9)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	内面ヘラ着き	覆土中	5%出者[口]

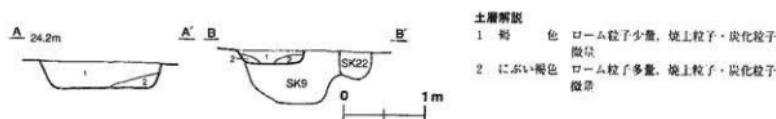
4 その他の造構と遺物

今回の調査で、時期及び性格の判断が困難な溝跡1条、土坑34基、不明造構1基が確認されている。以下、検出された造構などについて記載する。

(1) 溝跡

時期及び性格不明の溝1条は調査区中央部の南寄りで検出された。以下、実測図を記載する。

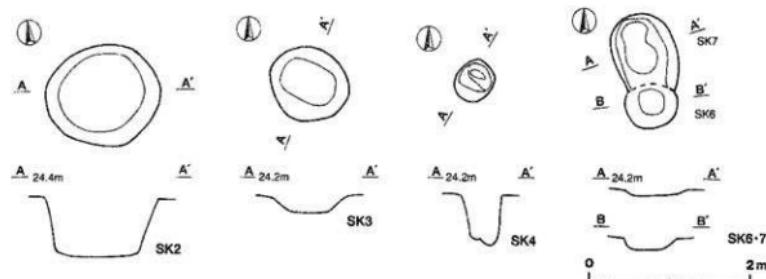
第1号溝跡(第84図・付図)



第84図 第1号溝跡上層断面図

(2) 土坑(第85・86図)

時期及び性格不明の土坑33基はほとんどが調査区中央部で検出され、南東部では検出されていない。以下、実測図と一覧表を記載する。



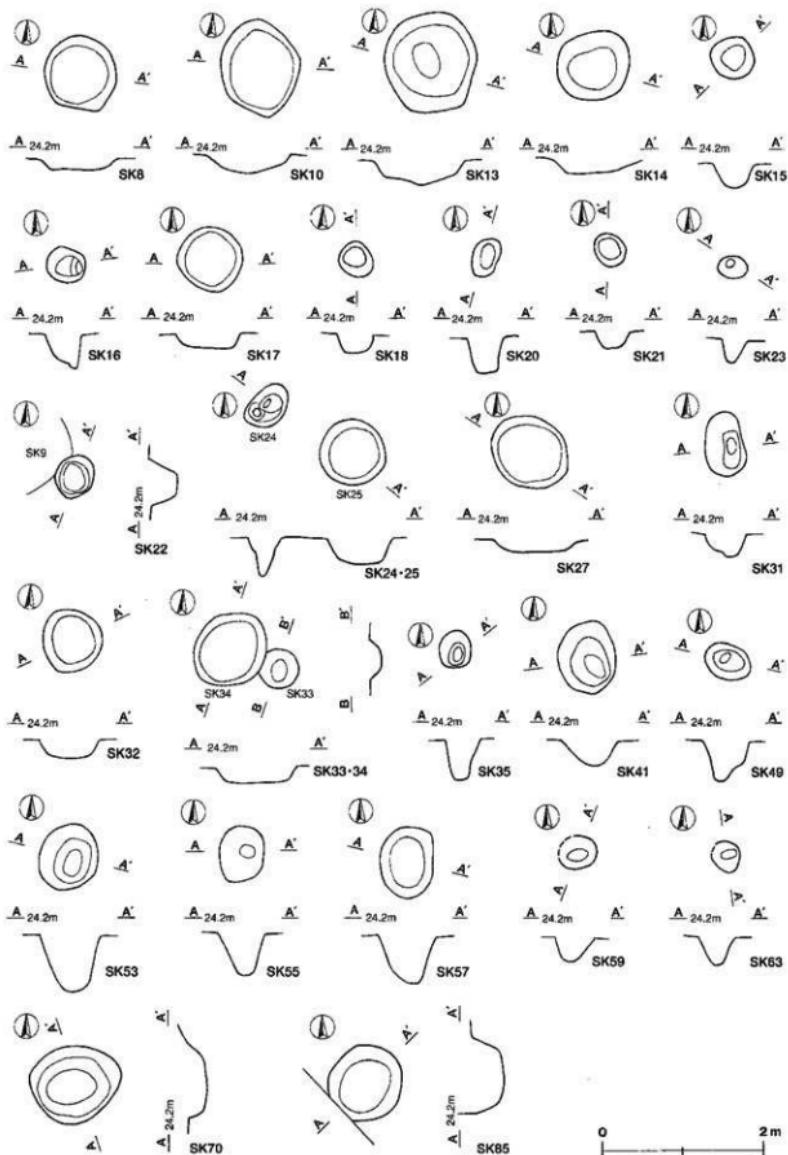
第85図 その他の土坑実測図(1)

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 浅褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土器部1点(高台付坏)が覆土中から出土しており、体部外面に墨書きが認められるが判読できない。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。性格は不明である。



第86図 その他の上坑実測図(2)

表8 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物		備考 新田開拓(II)→新
									平頭	尖頭	
2	B 2 b1	-	円形	1.30×1.29	74	外傾	平坦	人為			
3	B 2 b5	N-58°W	楕円形	1.00×0.90	21	緩斜	平坦	自然			
4	B 2 d7	N-34°E	楕円形	0.53×0.48	62	垂直	圓底	人為			
6	B 2 f1	-	円形	0.62×0.60	14	緩斜	平坦	人為	土師器		SK7→本跡
7	B 2 e1	N-20°W	円形	0.88×0.76	4	緩斜	平坦	自然			本跡→SK6
8	B 2 e1	-	円形	0.96×0.87	14	緩斜	平坦	自然			
9	C 2 e8	-	円形	1.12×1.12	66	外傾	平底	自然	上縁石、陶器片		本跡→SD1-SK22
10	B 2 f1	N-40°W	楕円形	1.30×0.98	22	緩斜	底状	自然			
13	B 2 h2	N-26°E	楕円形	1.30×1.14	27	緩斜	平坦	自然			
14	B 2 i3	-	円形	0.94×0.90	14	緩斜	平頭	人為			
15	B 2 j4	N-36°W	不整規円形	0.58×0.50	47	外傾	平頭	人為	土師器		
16	B 2 j4	-	円形	0.47×0.13	42	外傾	平頭	自然			
17	C 2 a3	-	円形	0.80×0.79	16	緩斜	平坦	自然			
18	C 2 a5	N-42°W	楕円形	0.45×0.40	23	緩斜	平坦	人為			
20	B 2 i5	N-30°E	楕円形	0.49×0.30	46	外傾	平頭	人為	土師器		
21	B 1 i9	-	円形	0.41×0.38	22	外傾	平頭				
22	C 2 e8	N-32°E	楕円形	0.50×0.44	34	緩斜	平坦	人為			
23	B 2 e9	N-77°W	楕円形	0.55×0.28	32	外傾	平頭	人為	土師器		
24	B 2 g9	N-35°E	楕円形	0.53×0.42	46	外傾	V字状	人為			
25	B 2 i9	-	円形	0.89×0.80	32	外傾	平頭	人為			
27	B 2 i0	N-50°W	楕円形	1.00×0.85	18	緩斜	平頭	自然	土師器		
31	C 2 b5	N-6°W	不整規円形	0.60×0.50	28	外傾	平頭	人為			
32	C 2 b5	-	円形	0.79×0.74	22	緩斜	平頭	人為			
33	C 2 e6	-	円形	0.50×0.50	15	緩斜	平坦	人為			本跡→SK31
34	C 2 e6	N-30°E	楕円形	0.98×0.65	21	緩斜	平頭	自然			SK33→本跡
35	C 2 e6	-	円形	0.43×0.40	51	外傾	平頭	人為			
41	B 2 i8	N-15°W	楕円形	0.88×0.71	31	緩斜	平頭	自然			
49	B 2 j8	N-78°W	楕円形	0.50×0.45	45	外傾	V字状	自然			
51	B 2 e7	-	円形	0.82×0.76	21	外傾	平頭	人為	土師器		
33	C 2 a8	N-20°E	楕円形	0.82×0.76	70	外傾	V字状	人為			
55	C 2 a8	N-13°E	楕円形	0.87×0.76	52	外傾	V字状	人為			
57	C 2 b8	N-18°E	楕円形	0.82×0.70	39	外傾	V字状	人為	土師器、陶器片		
59	B 2 j9	-	円形	0.48×0.45	28	緩斜	平頭	人為			
63	B 3 j2	N-23°W	楕円形	0.44×0.36	36	外傾	V字状	人為			
70	C 2 e9	N-66°E	楕円形	1.09×0.93	24	緩斜	平頭	自然	土師器、燒土器		
85	C 2 i9	-	円形	0.96×0.89	32	外傾	平頭	自然	土師器、燒土器		

(3) 不明遺構

第1号不明遺構(第87図)

位置 調査区中央部北側のB 3 i2メートルに位置している。

規模と形状 約170cmほどの円形で、確認面からの深さは44cmである。壁は緩やかに外傾しており、底面は平坦である。

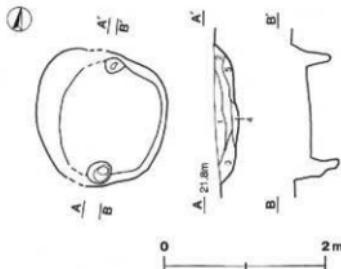
覆土 5層からなる。ロームブロックや焼土粒子を含む人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 槌土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 喀褐色 ロームブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、撃土粒子・炭化粒子微量
- 5 海 色 ロームブロック少量、撃土粒子微量

遺物出土状況 土師器19点（坏類16, 完類3）、須恵器6点（坏類3, 完類3）が出土しているが、ほとんどが碎片であり図示できなかった。

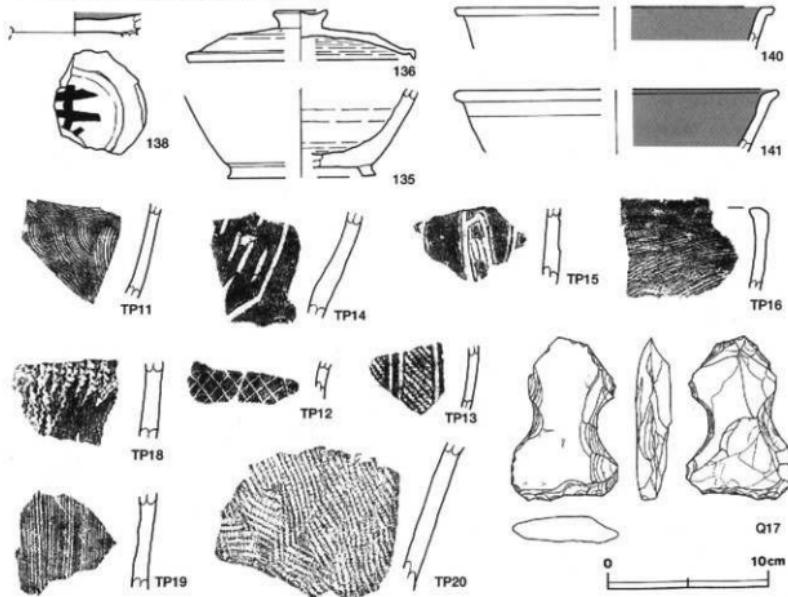
所見 覆土の状況から出土した遺物は混入されたものと考えられる。南北にピットを伴うが、時期及び性格は不明である。



第87図 第1号不明遺構実測図

（4）遺構外出土遺物

当遺跡での試掘、表土除去、遺構確認の段階で、遺構に伴わない遺物が出土している。以下、主な遺物について実測図及び出土遺物観察表を記載する。



第88図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第88図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	粘土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
138	土師器	高台付环	-	(1.4)	-	長石・雲母	にぶい赤褐色	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	B 2 区確認面	5% 深層□
136	須恵器	蓋	-	3.1	[140]	長石・石英	黒灰	普通	天井部右回りのヘラ削り	C 3 区確認面	30%
140	土師器	鉢	[19.0]	(2.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口沿部外面焼ナメ、内面黑色処理	C 2 区確認面	5%

番号	傳 細	源 住	FHR	総面	底地	粘 土	色 深	地底	丁度の 特 質	出土位置	備考
TSH-1	瓦器器	長持	-	(5.3)	灰岩・石英	-	灰	良好	城跡周辺ハラ切り後成白配り有り、 体部外側下部にタコ成形模様有り。	C 3区確認面	5%
141	須恵器	支	200	(3.9)	長石・石英	に灰・白	普通	1段部内・外面模様ナメ	体部外側タコ成形模様ナメ。	C 3区確認面	5%
TPH-1	須恵器	裏	-	(2.3)	長石・石英・雲母	灰マリープ	良好	表面に打目有り。	B 2区確認面	5%	
TPH-2	撫文土器	外	-	(2.3)	長石・石英・母貝	日本式	普通	表面に打目有り。	B 1区確認面	後期中葉 PL28	
TPH-3	撫文土器	内	-	(4.0)	長石・石英・雲母	日本式	普通	上段部の表面刷毛と裏面に2段の 丸形突起を塑り有り。	B 2区確認面	中期中葉 PL28	
TPH-4	撫文土器	深鉢	-	(6.6)	長石・石英・雲母	日本式	普通	化粧区外側面に外点文を充填	C 3区確認面	後期前葉 PL28	
TPH-5	撫文土器	深鉢	-	(4.6)	長石・石英・雲母	日本式	普通	表面に内文間に列状文を充填	C 2区確認面	後期前葉 PL28	
TPH-6	撫文土器	浅鉢	-	(5.6)	長石・石英・雲母	日本式	普通	口部部裏面刷毛工具による溝行条文	D 3区確認面	後期中葉 PL28	
TPH-7	撫文土器	深鉢	-	(4.6)	長石・石英・雲母	日本式	普通	底状の貝殻模様文	C 3区確認面	後期前葉 PL28	
TPH-8	撫文土器	深鉢	-	(5.0)	長石・石英・雲母	日本式	普通	刷毛工具による彫刻の波線文	D 3区確認面	後期中葉	
TPH-9	撫文土器	深鉢	-	(9.4)	長石・石英・雲母	日本式	良好	I.R.の半導體文を既及び右方向に施文	C 2区確認面	中期中葉 PL28	
番号	器種	長さ	幅	N/S	底盤	材質	器種	基盤	出土位置	備考	
Q17	打磨石斧	10.0	6.6	21	157.5	花崗岩	分離型、自然面を残す		C 2区確認面	PL28	

第4節 ま と め

今回の調査によって、当遺跡からは弥生時代の堅穴住居跡2軒、古墳時代の堅穴住居跡3軒、奈良・平安時代の堅穴住居跡14軒、火葬墓1基、土坑2基、時期及び性格不明の溝1条、土坑34基、不明遺構1基が検出された。また、縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺物が出土している。

今回の調査は、遺跡全体から見ると南側一部分の調査であり、花房遺跡の北部に広がる未調査区に集落の中心が存在している可能性が高い。

ここでは、遺構の検出数が少ない弥生時代や古墳時代については概略を述べるに留め、平安時代については若干の考察を加えて概要を述べる。

1 弥生時代

当遺跡の位置する桂川流域には、弥生時代の遺跡数は下原遺跡が知られている程度で極めて少ない。また、阿見町全体をみても確認数は少なく、道記遺跡や桜立遺跡、下小池遺跡が知られているだけである。

このような状況で、当遺跡から弥生時代後期の堅穴住居跡が2軒検出されたことは貴重な資料となり、上縦吉式の広口壺や紡錘車、穂摘具などが出土している。特に、第7号住居跡の床面直上から正位で出土した広口壺は、頸部から底部は欠損していること、1段部内面に顯著な摩耗痕があり、上器台に転用されたと想定され、二次利用を考える上で良好な事例になると思われる。

2 古墳時代

古墳時代の堅穴住居跡は3軒検出されている。第4・5号住居跡は5世紀中葉（古墳時代中期）のがを持つ住居跡で、調査区西北部に隣接して検出されている。第19号住居跡は6世紀後葉（古墳時代後期）の窓を持つ住居跡で、調査区南東部に位置している。

遺物はいずれも調理具の出土は少なく、それぞれの住居跡から碧玉の湖片が出土していることが注目され、周辺部に玉類の製作工房が存在する可能性があるが、いずれの時期での玉作りかは明確でない。

今回の調査から、古墳時代中期から後期まで継続的に集落が営まれていたことをうかがえるとともに、集落の中心は未調査区域と想定される。

3 奈良・平安時代

遺跡全体の範囲は広範囲にわたるが、前述したように今回の調査区域は南西部の一部分であり、当該期の堅穴住居跡の確認数は14軒で、他に火葬墓1基、土坑2基が検出されている。出土遺物が多く、明確に時期が確認された住居跡のはほとんどが9世紀前葉から9世紀後葉であり、当遺跡の中心をなしている。中でも9世紀後葉の住居跡6軒は、ほぼ北から東へ12°以内の軸で構築されており、ほどよい距離を保ちながら調査区中央部に位置している。

住居跡からは、土師器や須恵器の他、灰釉陶器、金銀製品（刀子、釘）などが出土している。中でも、9世紀後葉の住居跡からは土師器壊の出土割合が多く、須恵器生産が下火となって土師器の模倣壊が増加する当期の傾向に符合している。また、他地域との交流を物語る灰釉陶器が27点出土し、内訳は短頸壺1点、水瓶1点、碗3点、不明23点である。ほとんどが片断のため産地などの特定に至らないものが多く、井ヶ谷78号窯式1点、黒筒90号窯式1点、藤岡47号窯式2点、二川窯業1点が産地同定できた。しかし、当財團の集成による出土傾向との整合まではできなかった¹¹。

（1）棚状施設について

棚状施設とは「竈をもつ堅穴建物の堅穴壁に接して設けられて段差をもつ屋内施設のうち、モノを置くためのスペースを地山の掘削や構築上の充填・盛土などにより造りだしたもの¹²」で、調理具や供膳具類などを収納する場所と想定されている。

当遺跡からは、竈を付設している壁に砂質粘土を貼った棚状施設を有する住居跡が5軒（第10・11・12・13・15号住居跡）検出され、住居跡全体の26.3%に相当する。また、竈側の壁に砂質粘土が貼り付けられることから棚状施設を持つ可能性が想定できる住居跡が2軒（第22、23住居跡）検出され、それらを合わせると7軒（36.8%）となる。これらの住居跡にはすべて北竈であるという共通点が見い出せる。また、確認された棚状施設は、竈の両側に砂質粘土を貼り付けたB型¹³であり、棚状施設の構築にあたって粘土を充填もしくは化粧する事例は東京・千葉（下総）・茨城に多い¹⁴。

これらの中で、第11号住居跡の竈左側の棚状施設からは須恵器壊が出土しており、棚状施設の使用状況の一端を示している。また、第12号住居跡の棚状施設から出土した須恵器鉢は、竈内や床面から出土した遺物と接合したことから、住居廃絶後に遺棄されたものと判断される。

（2）火葬墓について

当遺跡からは、9世紀後葉の火葬墓が1基検出されている。当火葬墓は調査区南東部に位置する台地縁辺部の斜面から発見されており、須恵器壺を骨蔵器として、土師器壊を蓋にし、さらに須恵器鉢を被せている。形態は、土坑を掘り、骨蔵器の周囲には炭化材を充填して埋納している。骨蔵器の中には多量の火葬骨が納入され、火葬骨全体の重さ15kgほどの中に頭骨、鎖、歯、大腿骨などが確認されたが、性別や年齢は同定できなかった。ただし、頭骨の縫合部分は、内板の被着は進んでいないものの外板の被着が進んでいることなどから、被葬者の年齢は壮年であった可能性が指摘できる。

本県では火葬墓の出土例が多く、その分布は土浦・石岡を中心とした霞ヶ浦周辺地域と水戸市を中心とした那珂川流域とに大きく二分できる¹⁵。骨蔵器として利用された容器の多くは、日常使用している土器を転用して組み合わせる場合が多く、那珂川流域では須恵器の割合が高いが、霞ヶ浦周辺では須恵器と土師器を併用し、さらには灰釉陶器を用いるなど器種構成に差が認められる¹⁶。また、骨蔵器は異なる器種を蓋をした2点で埋

納されることが多いが、県南地域では骨蔵器に2点以上の土器で蓋とし、密閉度を高めて埋納する例が多く、差が認められる。

当遺跡の骨蔵器は、須恵器を用いた3点構成であり、隣接する手接遺跡では土師器甕を使用した3点構成、さらに大日遺跡では灰釉陶器を用いた3点構成であり、当遺跡を含め各火葬墓は、霞ヶ浦周辺地域の状況と類似し、バラエティー豊かな火葬墓といえる。

(3) 文字資料について

当遺跡からは、墨書きが13点、ヘラ書きが1点の計14点の文字資料が出土している。これらは、9世紀中葉の住居跡から2点出土しているほかすべて9世紀後葉（含第9号・51号土坑）と考えられ、全体の85.7%を占めている。9世紀後半に多くの墨書き土器が出土する傾向は、県内も含めて⁷⁾全国的にも共通する⁸⁾傾向が見られる。

第12号住居跡は9世紀後葉と考えられ、土師器甕の体部外面に「万歳」、底部外面に「万」と墨書きされており、吉祥的な文字が記されている。これは、墨書き内容が7世紀以降の文書行政的な表現（人名・地名・役職名など）から、8～9世紀代の吉祥句の文字への変化傾向⁹⁾と符合する。また、9世紀中葉の第6号住居跡出土の土師器甕には「多寺」と墨書きされ、同じ住居跡からほかに「多」と墨書きされた土師器甕も出土し、「多寺」墨書き土器と同一の意味合いをもと考えられ、類縁的ではあるが調査区域外に「多寺」と呼称される寺が存在する可能性を示唆している。

表9 文字資料一覧表

番号	款文	焼 別	器 様	遺物番号	出 荷 所	方 向	遺 構	時 代	備 注
1	「多」	墨書き	土師器	18	体部外面	正位	第6号住居跡	9世紀中葉	住居廃絶後の投票
2	「多寺」	墨書き	土師器	19	体部外面	横位	第6号住居跡	9世紀中葉	住居廃絶後の投票
3	「子」	墨書き	土師器	50	体部外面	正位	第11号住居跡	9世紀後葉	
4	「了」	墨書き	土師器	51	体部外面	正位	第11号住居跡	9世紀後葉	
5	「田」	墨書き	土師器	59	体部外面	正位	第12号住居跡	9世紀後葉	
6	「万」	墨書き	土師器	60	底部外面	—	第12号住居跡	9世紀後葉	
7	「万歳」	墨書き	土師器	60	体部外面	正位	第12号住居跡	9世紀後葉	
8	「+」	ヘラ書き	須恵器	62	体部外面	—	第12号住居跡	9世紀後葉	棚上・遮覆土中・腹上下層
9	「口」	墨書き	土師器	67	体部外面	—	第13号住居跡	9世紀後葉	
10	「万」	墨書き	土師器	128	体部外面	正位	第13号住居跡	9世紀後葉	
11	「口」	墨書き	土師器	138	体部外面	—	第13号住居跡	9世紀後葉	
12	「口」	墨書き	土師器	79	体部外面	—	第15号住居跡	9世紀後葉	
13	「口」	墨書き	土師器	137	体部外面	—	第5号土坑	9世紀後半	
14	「口」	墨書き	土師器	131	体部外面	—	第5号土坑	9世紀後半	

註

- 1) 奈良・平安時代研究班「茨城県における施釉陶器の検討(1)～(5)」「研究ノート」4～8号 茨城県教育財團 1995～1999年6月
- 2) 桐生直彦「窓をもつ堅穴建物跡にみられる棚状施設の研究」一関東地方の事例を中心に 2001年4月
桐生氏は、東京・千葉(日下郷地域)・茨城は「粘土多用地域」と呼んでいる。
- 3) 川津法伸「窓の脇に棚をもつ住居について」「研究ノート」第6号 茨城県教育財團 1997年6月
- 4) 許2)に同じ
- 5) 吉澤悟「茨城県における古代火葬墓の地域性 土浦市立博物館保管の骨蔵器の資料紹介及び県内事例の集成から」「土浦市立博物館紀要」第6号 土浦市立博物館 1995年3月
- 6) 許5)に同じ
- 7) 奈良・平安時代研究班「茨城県における文字資料集成1～3」「研究ノート」9～11号 茨城県教育財團 2000年6月～2002年6月
- 8) 高島英之「古代出土文字資料の研究」東京堂出版 2000年9月
- 9) 幸川南「墨書き土器の研究」吉川公文館 2000年11月

第6章 大日遺跡

第1節 遺跡の概要

大日遺跡は、牛久市と接する阿見町南東部の茨城県稻敷郡阿見町大字吉原字馬立1707番地の1ほかに所在し、桂川支流の左岸の標高15~26mの台地上に位置している。調査面積は4,097m²で、調査前の現況は畠地及び山林である。

当遺跡は縄文時代から平安時代までの複合遺跡で、今回の調査によって検出された遺構は、縄文時代の竪穴2基、奈良・平安時代の竪穴式居跡16軒、平安時代の火葬墓2基、土坑1基である。その他、時期が特定できない方形竪穴遺構2基、溝3条、土坑10基も調査されている。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で13箱分が出上した。主な出土遺物は、縄文土器片、土師器(环・高台付环、高台付皿、甌、小形甌)、須恵器(环・高台付环、高台付皿、鉢、甌、瓶)、墨書き器、灰釉陶器(短頸甌、長頸甌、水瓶)、土製品(支脚)、石製品(有孔円板)、石器(打製石斧・剥片)、金属製品(刀子・鍔・帶金具)などである。

第2節 基本層序

調査区中央部のB2h6区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は23.2mで、地表から約1.7mほど掘り下げ、第89図のような堆積状況を確認したが、北側は第1層から4層にかけて擾乱を受けている。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層 厚さ35cm前後の褐色のソフトローム層で、粘性は普通であるが、しまりは強い。

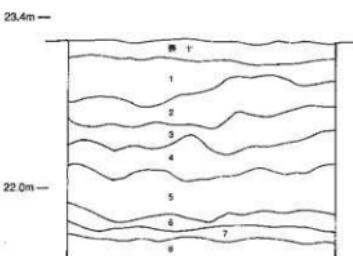
第2層 第1層よりもやや明るい褐色のソフトローム層である。白色粒子と黒色粒子をそれぞれ微量含み、厚さは12~34cmで、粘性、しまりともに普通である。

第3層 第2層よりは若干暗い褐色のソフトローム層である。白色粒子・黒色粒子・赤色粒子をそれぞれ微量含んでいる。堆積状況が一定ではないが、厚さは8~32cmで、粘性は普通であるが、しまりは強い。

第4層 第3層よりは若干明るい褐色のハードローム層である。白色粒子・黒色粒子・赤色粒子をそれぞれ微量含んでいる。堆積状況が一定ではないが、厚さは18~40cmで、粘性、しまりともに強い。

第5層 第4層よりも若干暗い褐色のハードローム層である。黒色粒子と赤色粒子をそれぞれ微量含み、厚さは27~37cmで、粘性、しまりともに強い。

第6層 第5層よりもやや明るい褐色のハードローム層である。褐鉄鉱を少量含んでおり、白色粒子・黒色粒子も微量含まれている。厚さは4~15cmであり、粘性、しまりともにかなり強い。



第89図 基本上層図

第7層 鋼鉄粒を中量、黒色粒子を微量含む淡い褐色のハードローム層で、厚さは4~14cmであり、粘性、しまりともに強い。この層は、粘土ブロックも少量含んでおり、常総粘土層の漸移層と考えられる。

第8層 鋼鉄粒を中量、白色粒子・黒色粒子を少量含むにぶい褐色の粘土層である。層厚は未掘のため確認できなかったが、粘性は極めて強く、しまりも強い。7層よりも粘土の含有量が多く常総粘土層と考えられる。

遺構は、位置により異なり、ほとんどは第1層及び第2層から確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

縩文時代の遺構は、調査区南東部北側に陥し穴2基確認されたが、出土遺物がないため時期を明確にすることはできなかった。以下、確認された遺構と遺物について記載する。

陥し穴

第1号陥し穴（第90図）

位置 調査区南東部のC2 b0区に位置している。

規模と形状 長径2.56m、短径0.85mの長楕円形で、深さは1.60mほどである。長径方向はN-16°-Wで、長軸の北部壁は直立しているが、南部壁の下部はやや外傾し、上部は直立している。また、短径方向の断面形は、ほぼV字状で、下部は溝状に狭くなり、底面は平坦である。

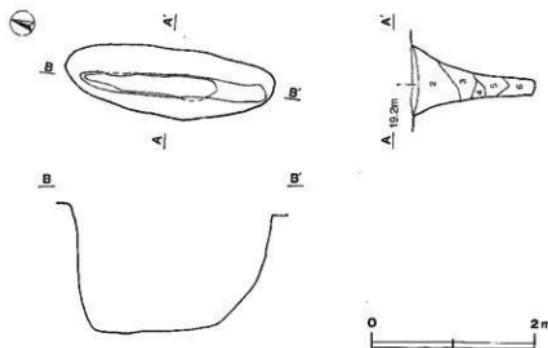
覆土 6層からなる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子微量	4 暗褐色 ローム较少少量
2 暗褐色 ローム粒子微量	5 暗褐色 ロームブロック少量
3 黒褐色 ロームブロック微量	6 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが、遺構の形態から縩文時代の陥し穴と考えられる。



第90図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴（第91図）

位置 調査区南東部のC 2 a0区に位置している。

規模と形状 長径3.18m、短径0.69mの長楕円形で、深さは1.30mほどである。長径方向はN-8°-Wで、長軸の壁はオーバーハンジングして立ち上がっている。また、短径方向の断面はV字状で、下部は溝状に狭くなり、底面は北側へ緩やかに傾斜している。

覆土 5層からなる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

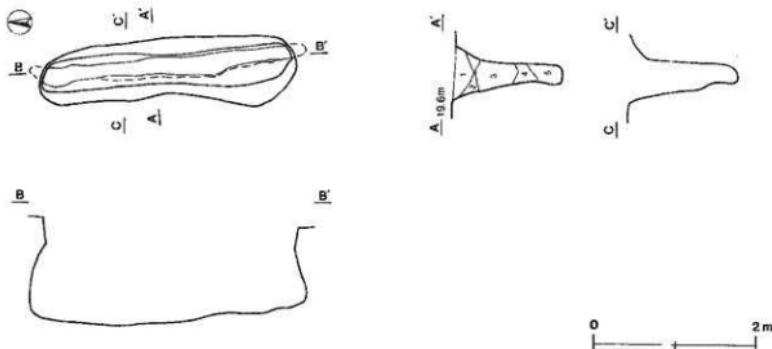
土層解説

1 植物褐色	ローム粒子少量
2 地質褐色	ローム粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック少量

4 紫褐色	ロームブロック少量
5 黑色	ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない

所見 遺物が出土していないため時期は明確に特定できないが、遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第91図 第2号陥し穴測定図

表8 陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	C 2 b0	N-8°-W	長楕円形	2.56×0.85	156	外斜	平底	人骨	-	-
2	C 2 a0	N-8°-W	長楕円形	3.18×0.69	136	垂直	平底	人骨	-	-

2 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構は、調査区域の南東部を中心に堅穴住居跡16軒、火葬墓2基、土坑1基が確認された。以下、確認された遺構と主な遺物について記載する。

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡（第92・93図）

位置 調査区南東部のC 3 f2|に位置し、台地からの緩やかな南東斜面部に立地している。

規模と形状 耕作による削平を受けており、南東側の床面が露出した状態で検出された。遺存している床や壁から判断して長軸3.58m、短軸3.06mのやや東西に長い長方形と推定される。主軸方向はN-88°-Wであり、確認された壁高は38cmほどで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 耕作による削平で一部確認できないが、遺存する床はほぼ平坦で、東側から窓付近まで踏み固められている。壁溝は南東コーナーを除いて確認された。

窓 西壁のはば中央部に付設されており、突き口から煙道部までは80cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されており、袖部幅は105cmほどである。火床部も床面と同じ高さの地山面をそのまま利用しており、被熱のため若干赤変している。壁外への掘り込みは40cmほどで、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

壁土層解説

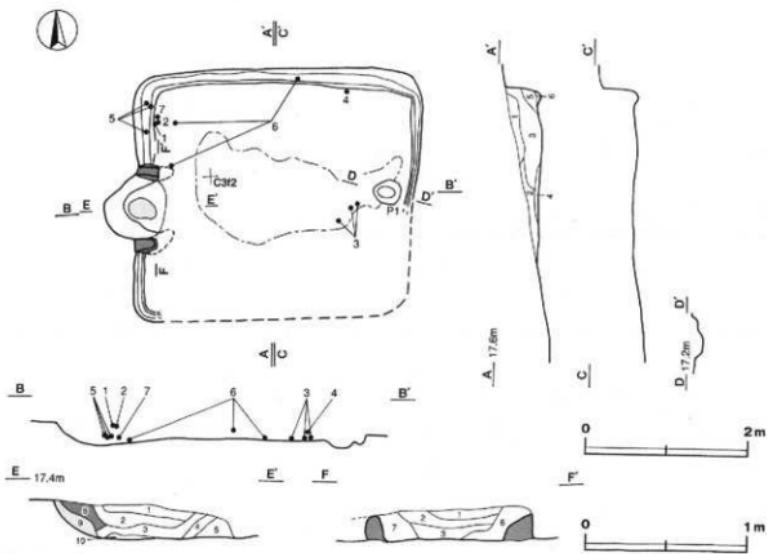
1 暗褐色	ローム粒子・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒微量	7 にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量	8 にぶい赤褐色	粘土粒子・砂粒中量・焼土ブロック少量
3 黒褐色	焼土ブロック少量・ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量	9 帽赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
4 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒中量・炭化物微量	10 暗赤褐色	焼土ブロック少量・炭化物・粘土粒子・砂粒微量
5 暗褐色	粘土粒子・砂粒多量・焼土粒子微量		
6 灰褐色	粘土粒子・砂粒多量・焼土ブロック少量		

ピット 1か所検出された。P1は深さ10cmほどで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。主柱穴の配列や位置を考えて床面と遺構の外側を精査したが確認できなかった。

覆土 6層からなる。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

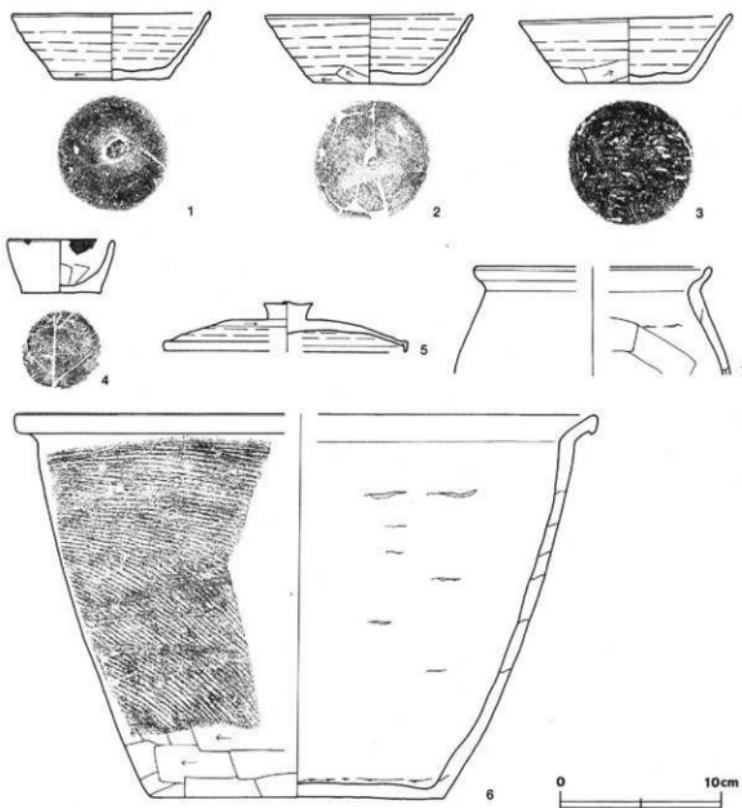
1 暗褐色	ロームブロック少量・焼土粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子少量
2 褐色	ロームブロック少量・焼土ブロック微量	5 暗褐色	ロームブロック少量・焼土粒子微量
3 黑褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量	6 褐色	ローム粒子中量・焼土ブロック微量



第92図 第1号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片35点（坏類1, 壺類34）, 須恵器片27点（坏類20, 壺類5, 盖2）が出土している。1・2は北西コーナー付近で, 1は逆位で, 2はその下から正位で出土している。3は出入り口施設付近の床面, 4は北側壁際のやや東寄りからそれぞれ出土している。4の口縁の一部に油煙が付着している。

所見 耕作による削平が激しく、確認できた覆土もわずかであったが、時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第93図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第93図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	仲名
1	須恵器	环	12.2	4.2	6.9	貝石・石英・雲母	褐灰	良好	底部削面ハク切り、全体手揉みハク解り	鹿上下層	P1.36
2	須恵器	环	12.8	4.4	6.8	貝石・石英・雲母	灰黄	良好	底部削面ハク切り後、内側ハク削り、全体手揉みハク解り	鹿下下層	P1.36
3	須恵器	环	12.1	4.2	7.6	貝石・石英・雲母	青灰	普通	底部削面ハク切り後、内側ハク削り、全体手揉みハク解り	全体	P1.36
4	土器	碗	6.4	3.3	4.6	貝石・石英・赤色粒子	青灰	普通	内側ハナナギ。底部本良板	鹿上下層	80% (25-57%) P1.36
5	須恵器	碗	15.0*	3.1	-	貝石・石英	灰	普通	大半底面凹りハク削り	鹿下下層	50%
6	須恵器	钵	13.8*	2.0	18.1	貝石・石英・雲母	灰	普通	底部削面下層ハク解り、全体表面剥落	鹿下下層	80%
7	土器	小形器	14.6	(6.6)	-	砂利多量・粘土質	灰	普通	底面ハク削り	鹿下下層	5%

第2号住居跡（第94～96図）

位置 調査区南東部のC 3 g4区に位置し、台地からの緩やかな南東斜面部に立地している。

重複関係 南東側コーナー付近を第3号住居に掘り込まれている。

規模と形状 一辺が5.15mほどの方形で、主軸方向はN-15°-Eである。壁高は5~41cmで、各壁とも外傾して立ち上がりっている。

床 ほぼ平坦である。南壁中央部から竈付近にかけて踏み固められており、床溝は竈を中心にして左右に延びているが全周はしない。

竈 北壁中央部に付設され、焚き口から煙道部までは102cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されており、袖部幅は98cmほどである。火床部も床面と同じ高さの地山面をそのまま利用しており、被然のため赤変硬化している。壁外への掘り込みは30cmほどで、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

堆土層解説

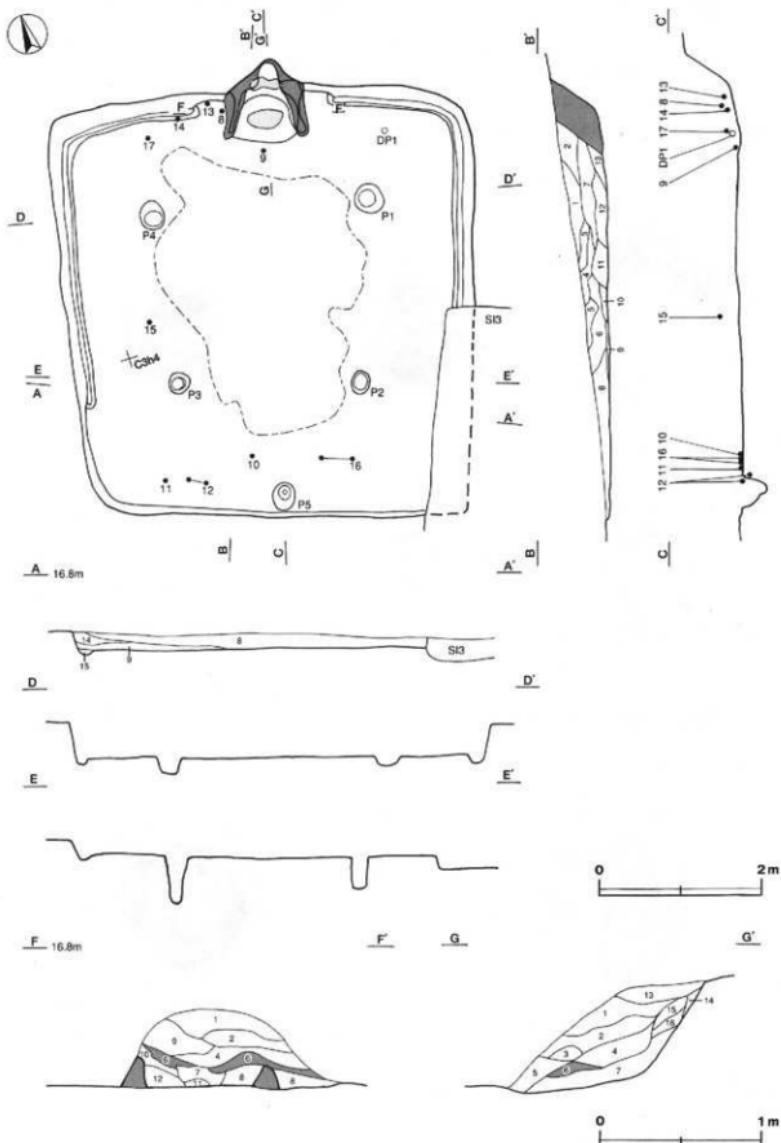
1	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	9	暗褐色	ロームブロック、粘土粒子、砂粒微量
2	暗褐色	粘土粒子、砂粒少量、ローム粒子、炭化物微量	10	暗褐色	燒土粒子中量、粘土粒子、砂粒少量
3	暗褐色	粘土粒子、砂粒少量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	11	赤褐色	燒土粒子多量、粘土粒子、砂粒中量
4	暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量	12	赤褐色	燒土ブロック中量、粘土粒子、砂粒少量、ロームブロック微量
5	暗褐色	ローム粒子、燒土粒子少量、炭化粒子、粘土粒子	13	黒褐色	ロームブロック、燒土ブロック、粘土粒子、砂粒微量
6	灰褐色	粘土粒子、砂粒多量、燒土ブロック少量	14	灰褐色	燒土ブロック、粘土粒子、砂粒少量、ローム粒子微量
7	赤褐色	燒土粒子、炭化粒子少量、ローム粒子、粘土粒子、砂粒微量	15	黒褐色	燒土ブロック中量
8	黒褐色	燒土ブロック少量	16	赤褐色	燒土ブロック、粘土粒子、砂粒中量

ピット 5か所検出された。P1~P4は深さ16~56cmで、配置から柱穴と考えられる。P3は深さ30cmほどで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 15層からなる。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

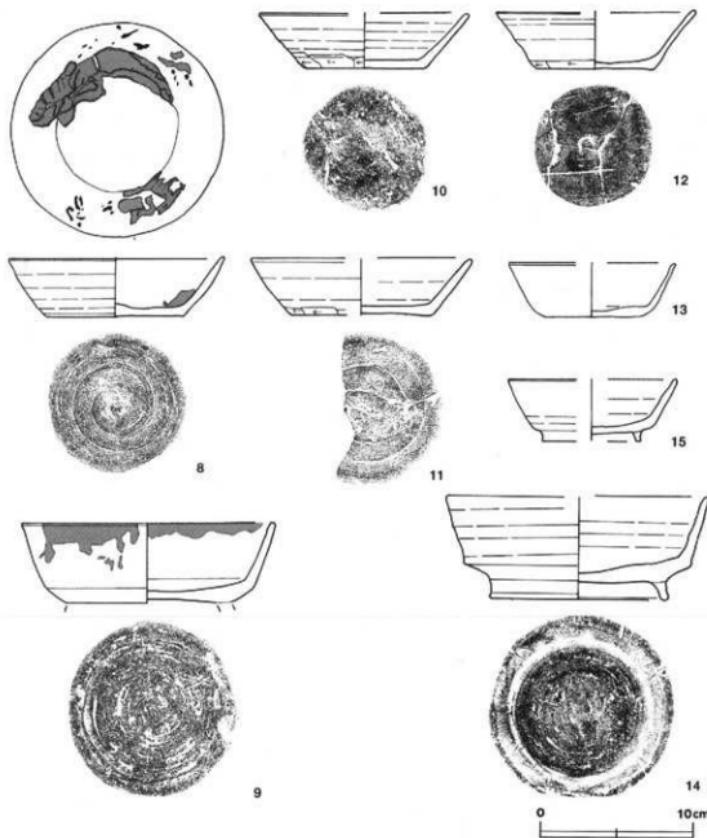
1	黒褐色	ロームブロック、焼土ブロック、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量	8	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量
2	黒褐色	粘土粒子、砂粒少量、燒土粒子、炭化粒子微量	9	暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量
3	黒褐色	ローム粒子少量、燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量	10	暗褐色	ロームブロック、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量
4	黒褐色	ローム粒子、燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量	11	暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子、砂粒少量
5	黒褐色	ロームブロック、燒土粒子、粘土粒子、砂粒微量	12	暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子、砂粒微量
6	暗褐色	ローム粒子中量、燒土粒子、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量	13	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子、粘土粒子、砂粒微量
7	黒褐色	ローム粒子中量、燒土粒子、砂粒微量	14	暗褐色	ローム粒子少量、燒土ブロック微量
			15	黒褐色	ロームブロック少量



第94図 第2号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片75点（坏類4, 蓋類71), 須恵器片106点（坏類56, 蓋類43, 蓋7), 土製品7点（支脚片）の他に、混入したと考えられる縦文土器片3点と灰釉陶器片2点が出土している。8は竈左袖部の外側から逆位で、9は竈前から正位でそれぞれ出土しており、内面や口縁部に漆の付着が認められる。10～12・16は南壁付近の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第95図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)